



「どうも、エトセは風呂に入ろてえんたなま」
 「はい、私ならば汗をかいたりしませんし……」
 うーん、どうも身体の構造なんだろう？
 そのとき、何となく夢さぐい、エトセが、
 意を決したまに身を乗り出した。
 「あの、私も同じにお風呂に入りたいです」
 「ええ、どうぞ」
 「えんて、ですか？ 人間の習慣は、えんて、ちんちんと勉強したい、です」



9784584381236



1920193005523

ISBN4-584-38123-2

C0193 ¥552E



定価：本体552円＋税

KKベストセラーズ

BOOK INFORMATION



【ジャンル】めいへんちっくアドベンチャー
 【ストーリー】夏休み前の終業式の日、知也の前に身長15センチの可愛い女の子が現れた。彼女の名前はエトセラ。卒業試験を受け、「想像の国」からやって来たという。試験は、15日間で知也とエトセラの間に深い信頼感を築き上げること。しかも、ほかの人間に絶対に見つからないように、それに合格すると、エトセラは晴れて本当の人間になれるらしい。エトセラのために友達のビムドミンティも加わって、なんとが試験を突破しようとするのだが……

沙高 渉

ヒトよりもナメケモノに近いであろう謎の生物。習性は街の徘徊とビデオを撮り溜めして見ないこと。本業は自称シナリオライター……らしい。本作が作家デビューとなる。

キッド KID CORPORATION

1988年前立の気鋭ゲームソフト会社。数々のパソコン版美少女ゲームをTVゲームに移植してきたが、今回、初めてオリジナル美少女ゲームとして『6インチ まいだーりん』（セガサターン）を発売。今後は、オリジナル作品を意欲的に開発して、美少女ゲーム界のトップに君臨する予定。

カバーデザイン———
 プレーンバスターズ
 カバー印刷——— 凸版印刷



私、本当の人間になりたい!



不思議な箱から飛び出してきた
身長15センチの女の子との秘物語

『6インチ まいだ〜りん』
(セガサターン用CD-ROM)

好評発売中!
¥5,800(税別)

©KID 1999

『6インチ まいだ〜りん』特製
トレーディングカード全25枚セット
読者プレゼント!

プレリュード文庫

★
PB-023
0002495-2

『6インチ まいだ〜りん』 特製トレーディングカード 全25枚セット読者プレゼント!



カバーについている応募券を官製ハガキに貼り、住所・氏名を書いて、下記の宛先までお送りください。抽選で印名様に、『6インチ まいだ〜りん』特製トレーディングカード25枚セット(制作・株式会社)をプレゼントいたします。締切!1999年4月30日消印有効。

宛先:〒160-8305 東京都新宿区西新宿7-22-27

KKベストセラーズ プレリュード文庫プレゼント係



6インチ まいだ〜りん

沙濤 渉・著 キッド・原作



プレリュード文庫

プロローグ 8

第1章 突然の同居人 12

第2章 ふたりっきりのヒヤヒヤ生活 51

第3章 初めてのドッキリ外出 71

第4章 思わぬ出来事大連発 100

第5章 愛のお勉強はひとりで 140

第6章 見られて、見られた!? 166

第7章 最終試験の結果は? 206

エピローグ 228

6インチ まいだ〜りん◎主要登場人物



エトセラ 「想像の国」からやってきた、身長6インチの可愛いピグマリオン。



椎名知也 本作の主人公。17歳、高校2年生。とくに取り柄もなく、女の子とは話すのも苦手で、17年間彼女なし



ピム エトセラの友達その2。ボーイッシュなショートカットのピグマリオン。



ミンティ エトセラの友達で、いつも猫の着ぐるみを着ていて、関西弁を話すピグマリオン。



武藤公一 知也の悪友。頭の中はオンナだらけだが、知也と同じく、まったくモテない。



藤枝加奈子 知也の幼なじみで、現クラスメイト。何かと知也の世話をやく。



知也の母



椎名美知 知也の妹。外では結構モテるらしいが、知也にとってはただのうるさいガキ。



知也の父



鬼松 知也のクラスの担任教師。

描き下ろしイラスト
ちにか

6インチ まいだ〜りん

沙濤 渉・著 キッド・原作

プロローグ

「……あ……のお……」

……声……。

「……あのお……すいませーん」
声がる……。

「……起きて……ください」

誰かが……呼んでる……。

「すいませえん！ 起きてくださーい!!」
んんー……もう食べられないってばあ……。

「は？」

「なんか寝ぼけてるみたいだよ」

「大丈夫なんかいな？ こいつ」

んー……なんだよ、うるさいなあ。俺は連日の期末試験で、このところ寝不足なんだ。誰だか知らないけど、静かに寝かせてくれよお……。

「仕方ないですねえ。お邪魔したついでに、ご挨拶あいさつでもと思ったんですけど……」

「ええんやないか？ 用件だけ伝えておけば」

「そうそう！ 早く済ませて帰ろうよ」

うんうん。ぜひともそうしてくれ。

「そうですねえ……それでは、箱を」

箱？

「箱を拾ってください。明日、必ず」

箱、箱ね。ダンボール箱でも拾ってくればいいのか？

「いえいえ、そうじゃなくてですね、こう、手のひらで抱かかえられるくらいの大きさで、寶石箱のような感じの木箱なんですけど……」

寶石箱ってことは……、中身はやっぱり宝石？

「違う違う！ もっといいものだよ」

「そや。もっとキレイで、もっと可愛くて、もっと、もおーっつと、エエもんやでなんだ、そりゃ。よくわからないなあ。」

「とにかく、拾えばいいの！」

はいはい。

「ほんまに大丈夫なんか？ こんなアホ面づらして寝ぼけとるやつで」

悪かったなアホ面で。どうせ今回の期末テストだって、あんだだけ勉強したにもかかわらず惨嘆さんたんたる結果に……って、終わったことを嘆いてもしょうがない。俺はあの不眠地獄の日々から生還するためにも、泥のように眠らねばならないのだ。だから邪魔しないでくれっ！

「じゃあお願いしましたからね。絶対ですよ」

「拾わなかったりしたら、承知しないからねっ！」

「頼むで、ほんま」

はい……。

わかりま……し……た……よ。

……。

ぐう……。

そうして、俺は再び深く静かな安らぎの世界へと落ちていったのだった。



第1章 突然の同居人

1

ふわあああああああ……。

ついに耐えきれなくなつて、大あくびをしてしまった。

ハツとして、教壇の上の鬼松おにまつのヤローを確認したが、どうやら奴は黒板に『夏休みの注意事項』を書くのに集中していて気づかなかつたらしい。

はあ……、危ない危ない。奴の授業中にあくびしてるところなんて見られたら、お説教の1時間や2時間じゃすまないからなあ……。

俺の名は椎名しいな知也ともや。今が旬の高校2年生だ。

俺たちは今、終業式での校長のありがたくも長〜い話をなんとか乗りきり、教室に戻つてきて、ホームルームの最中である。

あたりを見回せば、クラスメイトたちは一応全員が静かに前を向いて、奴の言葉に耳を傾けているように見えるが、この中の何人が真面目に話を聞いてるだろうか？ おそらく大半は、明日からの夏休みの予定に心を奪われているんじゃないだろうか。

窓の外では、初夏の真つ白な日差しの中、気の早いアブラゼミが暑っ苦しさを倍増させる声をたてている。つい先日まで、ジトジトと雨ばかり降ってたというのに……。

こう季節の移り変わりが激しいと、身体がついていけない。勉強にも身が入らないってもんだ。だからこそ、夏休みってのはみんなにとってうれしいものなんだろうけど……。

「はあ……」

俺はもう一度小さくため息をつき、目にはじんだ涙をぬぐった。昨日のあのへんてこな夢のせいで、ちよつと寝不足なのだ。まったく！　なんだか知らないけど、安眠の邪魔しやがって！　……って、自分の夢に怒ってもしょうがないよな。はは……。

(でも……)

妙に現実感のある夢だったよな。なんか夢の中でも眠かったから、相手をよく見なかったけど、あの声は女の子だよな。それも3人。ひとりは妙な関西弁使ってた……。

それに……、なんて言ってたっけ？　えーと……。

(箱！)

そう、箱だ！　箱を拾ってくれ、確かにそう言ってた。

「箱ね……」

俺は小さく呟いた。

「箱根がどうしたって、知也？」

隣の席から囁きささやきがして、横つ腹を突つかれた。チラリとそちらを見ると、机から大きくこちらに身を乗り出して、俺の顔をのぞき込んでいる男子生徒がひとり。

こいつが俺の親友、いや悪友の武藤公一むとうこういちだ。

中学時代からの同級生で、まあ、クサレ縁えんというやつか。何かと気が合うんで、いつもつるんでは馬鹿ばかりやっている。

「おまえ、夏休みは温泉にでも行くつもりなのか？」

「違うよ。ちよつと寝不足でさ」

「寝不足だあ？ まさか、おまえが女と一緒にだったわけじゃないだろうし……。そうか、またエッチな本でも読みふけつちまったんだな？ わかるわかる」

……断言しよう。こいつの頭には「女」の一文字しかない。

いつもニコニコ（ニヤニヤと言わないところに、友情を感じてほしい）しているのは、おそらく随時、頭の中で裸の女でもクネクネと踊り狂っているのだろう、と俺は常々思っている。

しかし、軽すぎる性格が災わざわいしてか、まったくといっていいほどモテない。

そういう鬱積うっせきした女への欲望、というか情念とかいったものが、凝り固こまってエネルギーとなり、こいつの行動原理となっているのだろう。

とは言っても、17年間彼女なしってのは、俺も同じなのだ。そういったところも、気の

合う理由なのだろう。

……ちよつと悲しい(泣)。

あ、言っておくけど、俺の場合、顔の問題じゃあない……と、思うぞ。……いや、思いたい……。

と、その時。

「こおらあああああつっつ！ そのふたりいいいいいっつっつ！」

教室に、大音響で響き渡るドラ声。

(ま、まずいっ！)

おそろおそろ頭を巡らせば、案の定、教壇の上から鬼松が俺たちをにらみつけていた。

鬼松。本名は……忘れた。松本だか松田だかという名前だったと思うが、全校生徒の間で『鬼松』で通ってるんだからそれでいい。どうせ覚えたところで、高校卒業とともにソッコで忘れる名前だ。

一応、俺たちの担任であり、時代遅れなほどバリバリな、一年中白いTシャツにジャージという超お約束なほどの体育教師である。いや、教師というより、その風貌ふうぼうはどう見ても進化したゴリラか悪役レスラーにしか見えない。無駄なまでに鍛えあげた全身の筋肉は、おそらく頭の中にまでビッシリと詰まっているものと推測される。

「俺が話しているときにおしゃべりとはいい度胸だなあ。そんなに大事な話なら、時間を取ってやるからこの教壇の上でじっくりとしてもいいぞ」

そう言って鬼松は、ゲジゲジが貼りついたような眉毛をクイツと上げた。

「いや、そんな。先生のお手間を取らせるほどの話ってわけじゃ……」

と武藤が言い訳がましく言う。

「ほー。ということとは、さほど重要でもない、いつ話してもいいようなどーでもいいことを、この俺のホームルームの最中にしていたと？」

ニヤリと口の端を上げ、不敵な笑みを浮かべる鬼松。

うう……ホント嫌な奴……。

「武藤！」

「は、はいっ！」

鬼松の大声に、思わずガタンと椅子を蹴って立ち上がる公一。

「おまえ、こここの席に來い！」

と言って鬼松が指差したのは、教壇のまん前にある空席。その席の主は1カ月ほど前に転校していったのだが、場所が場所だけに誰も座りたがらず、今までずっと空いたままだったのだ。

「はッ？」

「席替えだ」

「せ、席替えって、もう1学期も終わりじゃないですか!？」

「だから、新学期からこの席だ。ここなら、じっくりと勉強に身が入るだろう？ 俺もマンツーマンで指導ができるしな」

「あ、あの、それなら知也でも……」

「そりゃあ、おまえ。まずブラツクリスト筆頭のおまえからが当然だろう？」

「……………」

引きつった表情のまま、公一は固まった。

日頃の行いの差だな。
……………ご愁傷さま。

2

ホームルームも終わり、鬼松も職員室へと去って安らぎの戻った教室。クラスのみんなはすでに帰り仕度じたくを始め、夏休みの予定なんかをワイワイと話し合っている。

「……で、その寝不足の原因ってのはなんなんだよ？」

机の中のものをカバンに詰め込みながら再び大あくびをした俺に、公一はゲツソリとやつれきった顔で聞いてきた。夏休み前から新学期のことを考えて心労とは……かわいそう

な奴。

「ああ、昨日の晩さ、へんな夢を見たんだ」

そう言つて、俺はカバンを机の上に置いて椅子に座り直した。公一も前の席にまたがり、背もたれにひじを置く。

「夢？ 夢って裸の女でも……」

……それはもういい。

「まあ、女の子は女の子なんだけど……」

俺は、昨日の夢について話してやった。3人の女の子と「箱」のこと。

「……箱ねえ……」

公一はアゴに手を当て、しばらく真剣に考えていたが、

「別になんでもないんじゃないか？」

すぐに興味を失つたかのように突き放してくれる。

……持つべきものは友だなあ（泣）。

「夢占いとか正夢とか信じてるわけじゃないだろう？ あんまり考えすぎないほうがいいと思うぞ」

そう言つて手をパタパタと振る。

……まあ、それはそうなんだけどさ……。

「それよりも、明日から待ちに待った夏休みなんだぜ？ おまえ、何か予定は？」

「そりゃあ、たぶん……、家の手伝いをやらされる……と思う……」

そうなのだ。これが、俺の憂鬱な理由その2。わが家は、かつこよく言えばリカーショップ、まっハッキリ言えば酒屋を経営しているため、今までも夏休みには、これ幸いと必ず店の手伝いをさせられてきたのだ。もちろんバイト代などまったく出ない。

それを思うと、公一でなくても気が滅入ってくる。

「はあ……。おまえは、そうやってこれからも暗い青春を送っていくんだなあ」

と言って、俺に哀れむような目を向ける公一。おまえに言われたくないよ……。

「そっちこそ、どうするんだよ？」

気を取り直して聞き返すと、公一は「当たり前前のこと聞くな」とでも言いたげに鼻で笑い、チツチツチツと指を振った。

「俺か？ 俺はもちろん、素敵な出会いを探すんだよ。青い体験、ひと夏のアバンチュールってやつだぜ！」

そう言って、力強く拳こぶしを握ってガッツポーズ。

……予想どおりの答えを返す奴……。

まあ、こいつの積極性を、俺も少しは見習いたいとは思っているのだが……。

さつき俺も公一もモテないと言ったが、公一の場合その調子のよさが災いしているのに

対して、俺の場合はその逆。ろくに女の子と話せないのだ。というか、何を話していいんだかわからないと言ったほうがいいかな……。女の子って、まだ俺にはちよつと理解しづらい存在なのだ。おかげで、俺のまわりにいる“女性”といえば、母親と妹とペットのメス猫1匹。

ああ、それからもうひとり、うるさいのが……。

「なんの悪だくみ？」

背後からかけられた声に振り向けば、見るからに気の強そうなショートカットの女生徒が、大きな瞳で少し小馬鹿にしたように俺たちを見下ろしていた。

あーあ、また来たよ。

「なんだよ加奈子」

これがそのうるさい女、藤枝加奈子^{かじえだかなこ}。俺たちのクラスメイトであり、公一とよりも付き合いが長い。幼稚園に上がる前から一緒だから、まあ、幼なじみっていうやつだ。

「なんだよ、じゃないわよ。男ふたりでコソコソと、アヤシイつたらない」

「いいだろ、おまえには関係ないんだから」

「ほら、またふてくされる。ホント、子どもなんだから……。いい、公一くん？ 知也くんにヘンなこと吹き込まないでよね。知也くんのお母さんから、学校での面倒は私が見てくれと頼まれてるんだから」

そうやって、俺の頭をポンポンと叩く加奈子。

もう、やめろっての！

俺のことが頼りなく見えるのか、こいつは何かにつけて俺を注意をする。しかも俺の家族ともすこぶる仲がよく、どうやら俺のことを弟か何かと勘違いしているらしいのだ。俺のほうが生生日早いんだけどなあ……。

「もう、いいから、おまえはあっち行ってろよ！」

「はいはい」

まるで母親のように相づちを打って立ち去りかけたが、ふと足を止めて俺を振り返った。

「夏休みだからってハメ外しすぎちゃダメ・メ・よ」

「うるさいっての！」

ムキになる俺の態度にクスリと笑い、加奈子は廊下へと出ていった。

まったく……。

「……加奈子もいい女だよなあ」

去っていく加奈子の後ろ姿を見送っていた公一が、ポツリとつぶやいた。

「……そうか？」

「そうだよ」

うーん……、まあ客観的に容姿だけ見ればそうなのかもしれない。確かに美人の部類に

入るのかな。でも、俺にはただのうるさい小言女こごとでしかない。

「おまえ、近くにいきすぎて気づかないんだよ」

「そうかなあ……」

加奈子にオンナを感じるなんてことないしなあ。まっ、だからこそ、へんに意識しないで、さつきみたい普通に話すこともできるんだけど。

これがほかの女の子だと、まともに返事もできやしないんだから、われながら情けなさない。ほかの子だとどうしても意識しちやつて、ちゃんと話せないんだよなあ。俺って、これから大丈夫なのかなあ……。と、その時。

きーんこーんかーんこーん！

下校時間を告げるチャイムが学校に鳴り響いた。

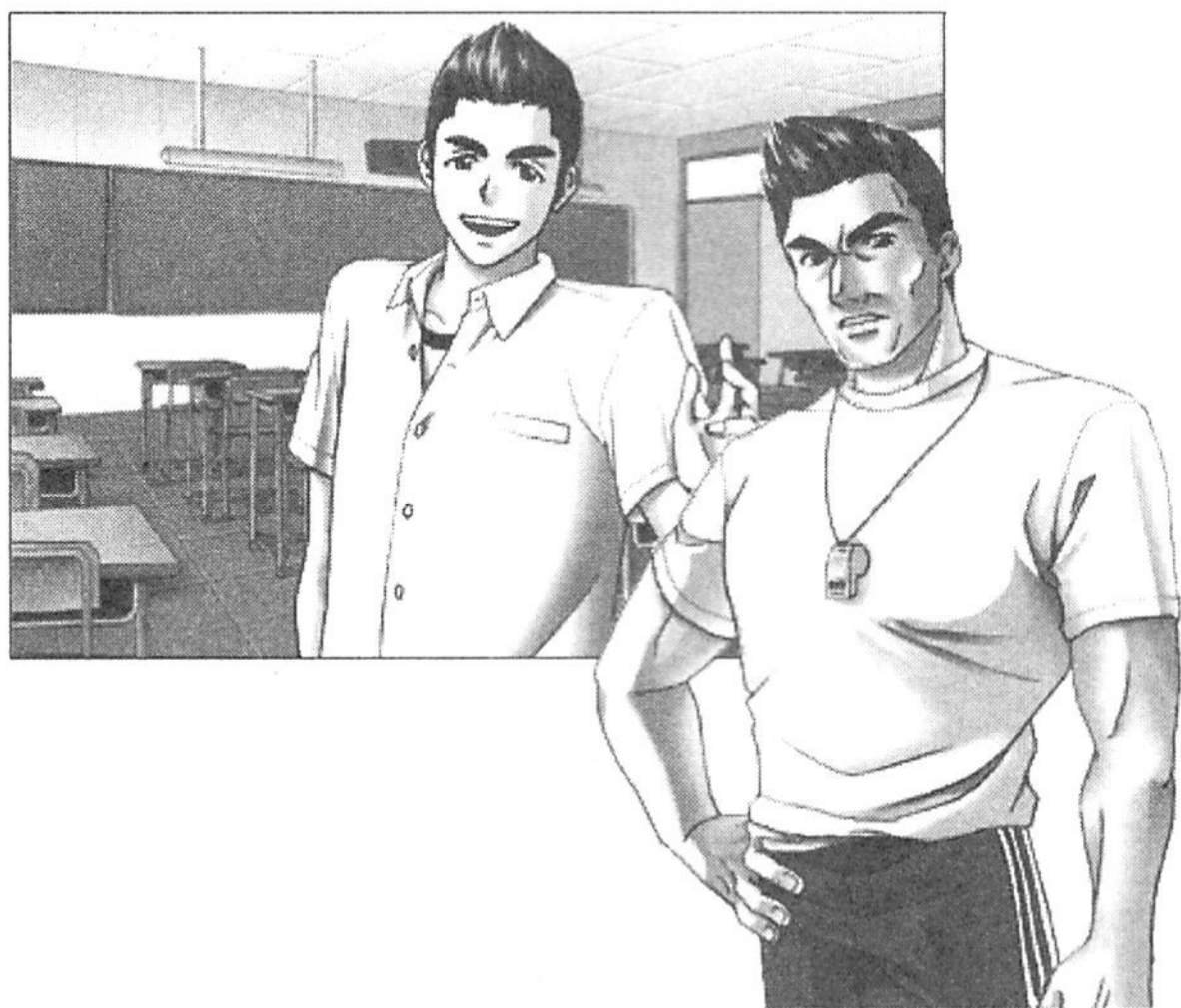
「お！ 人生最高の夏休みの開始を告げる、祝福の鐘の音だな！」

「ははは……がんばれよ」

こうして公一には薔薇色（予定）の、俺には灰色（確定）の夏休みは始まったのだった。

3

家が別方向の公一と校門で別れた後、俺はわが家への帰路を外れて山道を登っていた。あまり早く帰って家の手伝いさせられるのも面白くないので、急に思いついてこの場所へ



来たのだ。

ここは、街の外れにある裏山である。まあ、山といっても小高い丘くらいのもので、スニーカーひとつで気軽に登ることができるのだ。この時期の山登りはちよつとツライけど、夏には夏の表情つてのがあって、それを見ながらの散歩つても悪くはない。

さんと照りつける夏の日差しを浴びて、青々とおい茂る木々や草花。その間を切り裂くように通る砂利道を登りきると、前方が急に開ける。と、そこには目を見張るばかりの大パノラマが広がっているのだ。

眼下に広がるわが街。相変わらず、ここからの眺め^{なが}は最高だ。

見下ろせば住宅地の屋根がいくつも連なつてカラフルな波を作り、右手を向けばさつきまでいた学校の灰色の校舎、左手奥にはこの街でいちばん高い建物である高層マンションの白い壁。街のド真ん中を寸断するように流れる川には、橋の上から釣り糸を垂らす子どもが見える。そして正面を向けば、ずうーっと向こうの地平線の彼方に、この裏山なんか比べものにならないほど高い山々が、まるで薄墨で描いたようにぼんやりと見えている。ここに立てば、街が完全に一望できる。小さい頃はよく遊びに来て、ここから見える街並みのすべてが俺のものだと思つたものだ。

……よくよく考えると、嫌なガキだなあ。俺だつたら絶対殴るな。

と、それはともかく。うっすらと汗ばんだ肌に、乾いた風が心地よい。草の上に寝そべ

つて空を見上げれば、雲がゆったりと流れていくのが見える。

ああ、雲になりたい……。

そんな、めるへんちつく回路を半開させていると、ふと昨日の夢を思い出した。

「箱を拾ってください」

箱か……。

箱って言ってもなあ、そうそう落ちてるもんじゃないよな。

だいたい拾ってくれってことは、どこかに落ちているわけだよな？ でも、「探せ」とは言われてないんだから、見つけなきゃ拾う義務はないわけだ。それとも、誰かが落とすとか、箱自体が向こうからやってくるとか……。

(……………)
一瞬、足が生えた箱が、びよこびよこ歩いてくるさまを想像してしまった。

(……………それはコワイ……………)

……………って、俺はなんで夢の話なんかを、真剣に考えてるんだか……………。

そよ風が俺の頬を撫で、草の青臭さが鼻をついた。

(……………!?)

首を傾けた拍子に、俺の目の端に映ったもの……それは。

「……箱だ！」

がばっ、と起き上がり、確認しようと駆け寄った。

やっぱり箱だ！

半ば土の中に埋もれて、フタの部分だけが頭を出している。

ちようど両掌りょうてで抱えることができるくらいの木箱で、箱全体に施ほどこされた彫り物や、枠に縁取りされた金の装飾からして宝石箱のように見える。アンティークか何かだろうか？ 骨董屋こつどうやに持って行ったら、結構いい値がつく代物しろものなのかもしれない。

「夢と同じだ……」

箱で、木箱で、宝石箱。

どういうことだろう？ ホントに正夢!?

もう一度、あの声が頭に響いた。

「箱を拾ってください」

……そして俺の手は、自然とその箱へと伸びたのだった。

住宅街の真ん中にポツンと建つ酒屋、椎名酒店。ここがわが家である。

店舗は道路に面していて小さめのコンビニタイプだが、裏に回ると住まいとひと続きになっっている普通の住宅だ。

俺は、家の者に気づかれないように、住まいのほうのドアをそおっと開けると、音をたてないようにして玄関へと上がった。

抜き足差し足で、2階への階段へと向かう。2階に俺と妹の部屋があるのだ。

階段の1段目に足をかけたとき、突然、廊下の奥にある台所から声が飛んできた。

「知也ー、帰ったのー？」

母さんだ！

ギクリとして、小脇に抱えていた箱をとっさに背中後ろに回す。

「う、うん、ただいま！」

早口で答えると、母さんが台所から出てくる前に一気に階段を駆け上がり、自分の部屋へと滑り込んだ。

ふう……危ない。

こんな箱を拾ってきたなんて知れたら、また何を言われるかわかったもんじゃない。ここぞとばかりに馬鹿にされるだろう。……そういう家族なのだ。

俺の部屋。まあ平均的な男子高校生の部屋だろう。

厳密にどういったものが“平均的”なのかは定かではないが、とりあえずあまり本来の目的に使用されない勉強机や、厚い本の少ない本棚、ベッドの下には超極秘の重要機密書が隠されている。やっぱり、これはかなり平均的だろう。うん。

「さてと……」

机の上に、抱えていた木箱を置いた。結構重かったので、手に赤く痕あとがついてしまった。夢の箱……いったいなんなんだろう？ 別にあの夢の声に従ったわけではないが、つい持って来てしまった。

あのととき、箱を見た瞬間に、これを持って帰るのは当たり前のことだと感じたのだ。そう、まるで当然のごとく箱に手が伸びていた。

……そういえばパンドラの箱つてのがあったな。開けると中から災わざわいが溢あふれ出すつていう。あとは妖怪が詰まったスズメのつづらとか、竜宮城の玉手箱とか。

……なんか、ろくでもない想像しか思い浮かばない。

まあ、しかし……、まさかねえ……。

「……よし！」

しばらく観察した後、俺は決心して箱に手をかけた。

鍵穴はあるが、鍵は掛かっていない。ゆっくりとフタを持ち上げると、軋きしんだ音をたて

たが、苦もなく開いた。

ギギギギギ……。

おそるおそる中をのぞき込む。

「……なんだ？」

中であつたのは赤い布だ。どうやら、何かを包んであるらしい。

そして、箱のフタの裏には紙が貼ってあり、なにやら文字が書かれている。

「なにになに？」

此ハ、世ニモ希ナル、

びぐまりおんにんぎやう也

古ノたましひヲ籠メタル、

不可思議ナにんぎやう也

持チ手ガ、己ガたましひヲ籠メ、

優シキ心注ガバ、

ヤガテにんぎやうハ、

真ノ人”と成ラン。

「……ピグマリオン人形？」

人形が人になる!? いったいなんのことだ!?

俺は、急いで箱の中の赤い包みを取り出し、布を取り去った。

中から、ちょうど手のひらに納まる程度の、木彫りの素朴な人形が出てきた。

「これが？」

人形……というか、こけしみたいな形だ。木製で腕も脚もなく、ストーンとした胴体と首があるだけ。

こんなのが人間になるって? そんな馬鹿なこと。

悪戯いたずらだろうか? にしては、ずいぶんと手がこんでるしなあ……。

それに、夢の件もある。まさか故意に夢を見させるなんてのは不可能だろう。

「うーん……」

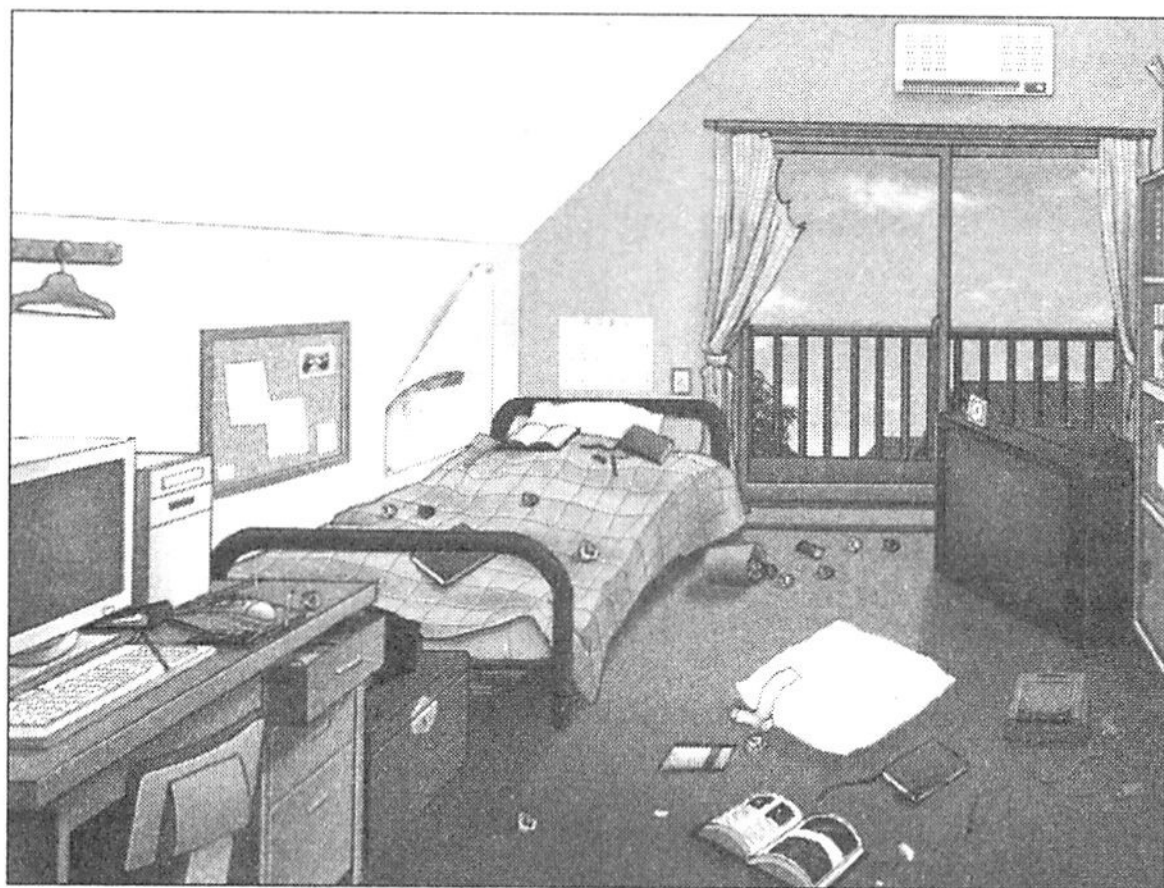
しばらく腕組みして考え込んだが、答えの出るわけもなく……。

「知也ー! そろそろお昼ご飯よー!」

階下から、母さんの声が響いた。

「ちよつと待って!」

答えながら、とりあえず人形を元のように布に包んで箱に戻し、箱は机の下に押し込んでおいて階下へと向かった。



食卓は沈黙に包まれていた。

……といつても、陰悪なムードなわけではない。母さんはさつきからずっと俺の正面に座って、黙ったままニコニコと微笑ほほえんでいるのだ。

妹がまだ学校から帰ってきてきていないし、父さんも配達に出ていて帰ってない。ふたりとももうそろそろ帰ってくるだろう、ってことでおあずけをくらっている状態だ。

俺の母さん。年齢は……まあ一応女性だしやめておこう。下手に言うとな後が怖いし……。最近ちよつと目尻に皺しわが増えたが、若い頃は結構美人であったことはうかがえる。スタイルも今はちよつと太目だけど、それほど悪くない。なんでも昔は女優にスカウトされたことがあるなんて、たまに自慢してたりもする。

……一番の問題は性格だと思っ……。

ニコニコニコニコ。

なんか、とてつもなくうれしそうに俺の顔を見つめてるんだけどさ……。

……イヤな予感……。

と、母さんがぐつとテーブルの上に身を乗り出してきた。

「ねえ、知也？」

来た！

「明日からの夏休み、ずっと家にいるわけよねえ？」

「え、えーと……いやあ……」

「いるのよね？」

笑い顔のまま、さらにずっと身を乗り出す。……いや、笑っているようで、目の奥がマヂだ……。

「う、うん。一応」

俺の言葉に、母さんはさらに満面の笑みを浮かべ、

「じゃあ、休みの間、ちよっとお店のほう手伝ってくれないかしら？ 父さんも母さんも、いつもいつも働き通しで、ちよっとは楽をしたいなーって思うんだけどお」

……やっぱり。しかし、俺も負けるわけにはいかない！

「いや、ほら、学生の本分は勉強だしさ……。それに父さんも母さんも、まだまだ元気じゃない。俺なんかが店に出ても、足を引っ張りかねないし……」

じわあつ。

え!? 突然、母さんの瞳から止めどない涙が溢れ出した。

「ちよ、ちよっと母さん!」

「ああっ、なんて子なの!? 親がこんつつつつなにも頼んでいるのにつ! いったい、ど

「こで育て方間違えたのかしらっ！」

そう言つて、手で顔を覆おおつてわんわんと泣き出す。

あわあわ……いや、そんな突然……。

「あつ！ お兄ちゃんがお母さん泣かしてるっ！」

唐突に背中に投げつけられる非難の声。振り向けば、いつの間にか妹の美知が台所の入り口に立っていた。学校から帰ってきたばかりでセーラー服のままだが、シヨートカットの上に、発展途上の微乳、生意気盛りでいつも俺の言うこと聞きやしないし、はつきり言つて、〃妹〃つていうか 〃弟〃みたいな奴だ。

……と言つても、外では結構モテるらしい。

「お父さーん！ お兄ちゃんがあつ！」

今度は美知の後ろから、配達から帰ってきた父さんがのっそりと姿を現した。こちらはまた、母さんとは対照的にどっからどう見ても普通のおっさんである。

しかしまあ、息の合った夫婦であるのは確かで……。

「どうした母さん!? 知也にいじめられたのか!？」

「えーん！ 聞いてよお父さん。知也つたらね、私たちに休む間もなく馬車馬のように働けつていうのよ。死ぬまで働いて、自分に楽させてくれればそれでいいって！」

「なんてことを……おお、よしよし」



「ひどーい、お兄ちゃん！」

「そ、そんなこと言っていないだろっ！」

家族中の大ブーイングが俺に集中する。

ああ……、またいつものパターンだ。そう、わが家はいつもこうやって俺ばかりを責め、結局損な役割を俺に押しつけるのだ。

くうううっ……仕方ない……。3対1じゃ、かなうはずもない。

「わかったよ！ やればいいんだろ、やれば！」

こうなつては、俺が折れないと収拾がつかないのだ。しかも、俺の言葉を聞いた途端に、母さんは泣くのをピタリと止めて一瞬にして再び笑顔に戻った。

「ホント？ じゃあ、さっそく午後から店番お願いね。ほほほ」

……あきれてグウの音も出ない。

「いい心掛けだぞ、知也。『親孝行したい時には親はなし』っていうからな」

いや、たぶん俺が天寿をまっとうした後も、ふたりは生き残ってると思う……。

……ん？ そうだ！

「美知、おまえはどうなんだよ!? おまえだって夏休みだろうが！」

「あたしは部活があるもーん」

「毎日ってわけじゃないだろう？ 休みの日にでも……」

「あ、そうだ。着替えてこなくっちゃ！」

言うが早い、スカートをひるがえし、一目散に2階へと駆け上がっていく。

……本当に、いい家族に恵まれたなあ、俺って……（泣）。

（はあ……、疲れる）

なんで昼飯食べる間だけで、こんなに疲れなきやならないんだろうか？

俺は、今日何度目かの深いため息をついた。

6

どさっ。

精根つき果て、ベッドの上に倒れ込んだ。

昨日からの寝不足の上に、店の手伝いまでさせられて、もうクタクタだ。

時計の針は、まだ午後7時を回ったばかりであるが、俺の気力はとうに限界にきていた。

……とりあえず、このまましばらく寝てしまおう……。

そうしてウトウトとしかけたとき、ドアを開けて美知が顔をのぞかせた。晩飯の用意ができたことを告げに来たようだが、俺が無視して寝続けるとあきらめて下りていった。

腹の虫も激しく抗議したが、今の俺には睡魔の誘惑に勝つ力はなかったのだ。

再び部屋に静寂が戻ると同時に、意識はどっぷりとぬるま湯の中に沈んでいった。

ぐう……。

……。

……。

「……あ……のお……」

……。

「……あのお……すいませーん」

……。

「すいませえーん。起きてくださーい」

……。

「おーきてくーださあああああーい！」

「なんだよ、もおっ！」

耳に響く呼び声に、俺は叫びながらガバツと起き上がった。

誰だよ、いったい!? 美知か?

「まったく……」

眠い目を擦りつつ、部屋の中を見回すが……。

……誰もいない。

……もしかして、また夢か?

そう考えながら時計を見ると、すでに午前0時を回っている。

短時間だが爆睡ばくすいしたおかげで、いくらか頭はスッキリしていた。窓の外はすっかり夜の帳とばりが下りているようだが、この部屋の中は電気も点けていないのに妙に明るい。

どうやらカーテンを開けっぱなしで寝てしまったため、月の光が差し込んでいるのだ。そのとき。

「すいませーん」

再び声がした。

ビククリして、もう一度あたりを見回したが、やはり誰もいない。

「？」

「ここですよー」

ここ、と言われても……。まさかこんな狭い部屋の中で、隠れんぼってわけでもないだろう。

「ここですつたらー！」

ん？　なんか声のする方向がヘンだ。もっと下のほう……？
視線を動かすと……。

「……………!?」

……………いた。

それは、枕の横にちよこんと正座して、俺のことをじっと見つめていた。

「こんにちは。あ、いえ、こんばんはですね」

そう言つて、お行儀よくペコリとお辞儀する。

……思考停止状態。

「あのお……大丈夫ですか？」

心配そうに俺を見上げている。

「あ、い、いや。き……君はいつたい？」

俺の問いに、その女の子はニコツと微笑むと、

「はい。エトセラと申します」

そう言つて、再びお辞儀をした。

7

はつきり言つて、驚いた。

エトセラと名乗った少女は、今は床に置いたクッションの上に座り、ちよつと不安そうにして、ベッドに腰かけた俺を見つめている。

パツチリとした大きな瞳には月明かりがキラキラと反射して輝き、雪のように白い肌と肩まで伸びたサラサラの髪。ゆつたりとしたドレスのような服が、異国のお姫様のような

雰囲気をかもし出している。

が、一番の問題はそんなことではない。
それは彼女の身長だ。

低い……といっても、並の低さではない。子どもだとか大人だとか成長が遅いだとか、そういうこととは別の次元の話なのだ。

彼女は、俺の手のひらに乗るほどの大きさしかないのである。座っているクッションが、まるでダブルベッドのようだ。机の上のパソコンの横に積んである3・5インチフロッピー12枚分……よりも頭ひとつ分小さいくらい。

……6インチ……15センチくらいか……。

ふと、そんなことを考えた。

「あのお……すいません、おやすみのところを起こしてしまつて。驚かせてしまいましたか？」

彼女は、本当に申し訳なさそうに何度も頭を下げている。

「い、いや、別にいいんだよ。驚いたのは確かだけど……」

まだちよつとドキドキしてるけどね。夢の続き……つてわけじゃないよな？

……ん？ 夢？ そういえば……。

「君……昨日の晩、俺の夢の中に……？」

声に覚えがあった。

「はい。失礼かとは思いましたが、どうしても箱を拾っていたただかなければならなかったので……」

「箱？」

はっとして、机の下をのぞいてみた。案の定、例の箱のフタが開いて中の人形がなくなっている。

そうか！

「君がピグマリオン!？」

「はい」

小さいアゴをひいて、こくんとうなずく。

なるほどね……。えーと、それじゃあ……。

「ねえ……、君のこといくつか質問してもいいかな？」

「え？ あ、はい、私の答えられる範囲内であれば」

ちよつとだけ神妙な顔になって、居ずまいをただすエトセラ。

「じゃ、じゃあ、えーと……まず、君はどこから来たの？」

「想像の国です」

「想像の国？」



「あなた方人間の想像力によって産み出された世界です」

「想像力？」

「はい」

そこで、コホン、と小さな咳払いひとつ。

「えー、人間の想像力は、実はとても大きなエネルギーなんです。偉大な発明も便利な生活も、すべては人間の想像から始まっているわけですよ。あんなモノが欲しい、こんな場所に住みたい。想像なくして、今の人類の発展はないわけですよ」

……確かに。

「人間の『想像力』は、つまり『創造力』なんです」

ソーゾー力がソーゾー力？

「たとえばあなたが何か想像しますよね？ えーと……普段どんな想像してます？」

え？ そ、想像!? えーと、今日の夕飯何かあとか、女の子のこととか……。

「うーん……明日の授業の内容とかかな？」

「……本当ですか？」

あ、ちよつと疑わしい目。

「ははは……少しウソです……」

照れて頭をかく俺のようすに、エトセラはくすりと笑い、

「まあ、それはともかく、そうした想像のエネルギーは、想像の国の大地となり、草木となり、そして私たちピグマリオンになるんです」

「君たちも？」

「はい。想像の国のすべての存在は、あなたがたの想像力からできています」
なるほどなるほど。

「で、その想像の国ってのは、どこにあるの？」

「ええと、そのところは私にもよくわかりませんが……。とにかく、この世界とは違う場所にあるんです」

……んーと……異次元ってことかな？ パラレルワールドとかそういうの。

そう聞くと、エトセラは「たぶん」と言って自信なさげにうなずいた。

「本来、ふたつの世界はこちら、人間世界側からの一方通行なんです。つまり、人間の想像のエネルギーが私たちの世界に届くだけで、私たちから干渉することはできないわけです。でも、ごくまれに両方の世界がつながることがあって……」

ああ、そうか。

「それが、今、なわけだね？」

「はい。今夜の新月から15日後の満月まで、箱を通じてふたつの世界を行き来することが可能になるんです」

月か……。窓の外を見上げれば、鎌のように細く鋭い三日月が銀色に輝き、まぶしいくらいに月光が地上を照らし出している。

エトセラはその月を見上げながら、祈るように胸の前で手を組んだ。

「古くから、人々は月へと想いを募らせてきました。その想いが、月に不思議な力を与えたと言われています。月は神聖にして偉大な存在なんです」

確かに、昔から月の魔力の話はよく聞くな。潮を満ち引きさせるのも月の力だっていうし、満月の日は犯罪が多くなるとか、犬が吠はえるとか、狼男が変身するとか……。

……あんまりありがたくないなあ。

「えーと、それで、エトセラはなんでこっちの世界へ？」

「ええ、それは試験なんです」

「試験？」

「人間になるための試験です」

ああ、そういえば箱の裏にそんなようなことが書いてあったっけ。

ヤガテにんぎやうハ、
真シノ 人ナと成ナラン。

「これから15日間こちらの世界で過ごし、その行動が評価されると晴れて人間になることを許していただけるんです」

「評価って……具体的には、どういったことをすればいいんだい？」

「さあ？」

ちよつと小首を傾げ^{かし}、困ったような表情になるエトセラ。

「さあ、って……」

「試験結果の合否は、すべて私たちの教官が決めることなんですけど、その教官がおっしゃられるには何も特別なことはいらないと……」

「どういうこと？」

「ええ、私たちピグマリオンは人間の心に感応して成長するんです。つまり、試験は人間のパートナーと一緒に暮らすことで、その人の心を受けて自分を成長させることだと……」

……えーと。

「パートナーって俺のこと？」

「はい。……あの、ご迷惑でしょうか？」

「え、いや、その……なんで俺なのかなあって？」

「それは、運命とか因果率とか……もちろん相性なども考慮した上で教官がお決めになったこととして……。あとは、私たちの存在をパートナーとして受け入れることができるだ

けの心を持っていかどうかってことなんですけど」

ああ。確かに自分でも驚くほどすんなりと、現状を受け入れてしまっているけど……。
「……すいません、やっぱりご迷惑でしたか？」

うるうるっ。

あ、や、やばい！ ちよつと泣きそうになってる!! 俺はこういう状況に弱いのだ!

「そ、そんなことないって! こんな可愛い娘と15日間も過ごせるなんて、すっごいうれしいし、楽しい生活になると思うしっ!」

「……ホントですか？」

ちよつとうるんだ瞳で、俺のことを心配そうに見つめるエトセラ。

こ、これは……。可愛いかもしれない……。

「う、うん……」

「ホントにホントですか？」

まだ不安そうに、上目づかいで俺のことをじーっと見つめている。

「うん。ホントにホントだよ」

その言葉を聞いて、エトセラの表情がパツと明るくなった。

「わーい! ありがとうございます! 私、絶対ぜーったいがんばりますんで、よろしく
お願いしますっ!」

そして、今度はキラキラとした瞳で俺のことを見つめる。

ははは……どこかで見たような展開……。

まあいいか。乗りかかった船だ！

「あ、それから、私たちは絶対にパートナー以外の人間に見られてはいけません」
再び神妙な顔になるエトセラ。

「え、なんで？」

「先ほども言いましたように、私はあなたの心に触れて成長しなければなりません。でも、別の人に意識を向けられてしまうと、その人の心にまで影響を受けてしまうんです」

「なるほどね。それは注意しないと……」

「お願いします」

「大丈夫だって！ 俺にどーんと任せておきなさい！」

「はい！」

そう元気よく返事をして、彼女は天使のようににこやかな笑顔を俺に見せてくれた。
まあ、これだけでも引き受けたかいがあるかな？

「そう言えば、まだお名前をお聞きしてませんでした」
エトセラが俺の顔を見上げる。

「あ、そうか。俺は椎名知也」

「シーナさん？」

「知也でいいよ」

「じゃあ、知也さん、ですね？」

「うん。よろしく、エトセラ」

「こちらこそ、よろしくお願いいたします。知也さん」

俺が人差し指を差し出すと、エトセラはその先を握って握手した。

ま、公一が期待しているのはちよつと違うけど、俺も女の子と知り合うことができたわけだし、どうやら灰色の夏休みだけはまぬがれたようである。

さあてと！ とりあえずこれから15日間は、楽しく暮らせそうだぞっ！！

第2章 ふたりっきりのヒヤヒヤ生活

1

翌朝。

朝食を済ませて部屋に戻ると、エトセラが机の上にちよこんと正座していた。どうやら、俺の帰りを待っていてくれたようだ。

「あ、エトセラ、起きたの？」

「はい」

その姿を見て、俺はちよつとほつとした。朝起きたときには、彼女はまだ箱の中で寝ていたようで、姿がなかったのだ。もしかして昨晚のことは夢だったんじゃないか、と不安になったのだが……。

……はあ……よかった……。心の中で、大きく安堵あんどの息を吐いた。

でもまあ、本当はちゃんと彼女が箱から出てくるのを待って「おはよう」を言いたかったんだけどね。あんまり遅くなって家族に不審に思われるのも困るし。仕方ないので、先に下に降りて朝食を食べてきたのだ。だから、ちよつとだけ遅れて朝の挨拶あいさつ。

「おはよう、エトセラ」

「はい、おはようございます」

彼女は、朝の陽光さえ霞むようなまぶしい笑顔で、ニッコリと俺に微笑みかけてくれた。んー、なんかこういうのっていいよね。今までなかった経験だ。これだけで「今日1日頑張るぞっ！」って気持ちになれる。

「どうしたんですか？」

こみ上げる幸せを噛みしめつつニヤケていると、エトセラが俺の顔を見上げて不思議そうに首を傾げた。

「え？ い、いや、なんでもないよ！」

「ふーん、知也さんて、おかしな人ですねえ」

エトセラがクスクスと笑い、照れ隠しに俺も一緒になって笑ってしまった。

「……で、よく眠れたかい？」

「はい、おかげさまで」

その言葉に、俺は机の下の箱をチラリとのぞき見る。昨晚もひと通りの話をした後、エトセラは再び箱の中に帰っていったのだ。

「……ねえ、エトセラ。夜は必ずその箱に戻らなきゃいけないの？」

「ええ。私たちがピグマリオンにとって、この世界に飛び交っている想像のエネルギーは強

すぎるんです。私たちの肉体自体、想像力が集まってできたものなわけですから、あまり長時間この世界にいと、なんらかの影響が出てしまうかもしれません。しかも、私が私自身を認識しているとき、つまり起きているときはいいんですが、眠って意識がなくなつた際に別の意識に取り込まれてしまう可能性もあるんです」

「ふーん……」

うーむ、わかったようなわからないような……。まあ、大変なことだったのはわかった。それにしても、寝顔を見れないのは残念だけどね。

「それから、絶対に箱の中をのぞかないでくださいね」

「え？ のぞくとどうなるの？」

機を織ってたりして……。

「ふたつの世界をつないでいる道が閉じてしまいます」

……なるほど。そうになると、向こうに帰れなくなつて……。

そ、それは一大事だ！ 絶対に見るのはやめよう、と俺は固く心に誓ったのだった。

「あ、そうだ。エトセラ」

俺の言葉に、エトセラは「なんです？」と答えて首を傾けた。

「今日は午前中から店の手伝いをしなくちゃならないんだ。だから、ちょっと相手をして

あげられないんだけど……」

そうなのだ。まったくうちの親ときたら、ここぞとばかりに俺をコキ使うつもりらしい。結局、夏休み中はズーツと仕事の予定を入れてくれた。当然、俺の都合なんてのは一度も聞かずに決められてしまったわけだが……。これじゃ、エトセラと一緒にいられる時間がほとんどないじゃないか！

「……ごめんな。できるだけ一緒にいてやりたいんだけど」

「いえ、私が勝手に押しかけたんですし、知也さんには知也さんの生活があるわけですから、私のことはお気になさらずに、ひとりでがんばってお仕事してください」

「う、うん」

うーむ……俺のことを気づかせてくれてるんだらうけど……。そう言われると、なんかちょっと寂しい（泣）。

「……でも、一日中この部屋にひとりであるってのも退屈だよなあ……」

「あの……でしたら、その……」

俺の後ろの本棚を指差すエトセラ。

「そこにあるご本を読ませていただけないでしょうか？」

「本？」

「ええ、私、この世界のことを何も知らないものですから、いろいろと勉強したいんです」

うーん、すすんで勉強したいなんて感心だなあ。俺なんて、言われてもやらないのに。「えーと、それじゃあ……」

椅子から立ち上がって本棚をながめた。……でも、あんまり勉強に向いた本なんてないんだよな、俺の本棚には。

「……どんなのが読みたい？」

「どんなものでもいいです。知也さんが選んでください」

うーん……そう言われてもなあ……。

俺は、本棚のいちばん上の段に目をやった。そこにはおんなじ色の表紙をした、少し厚めの本が数冊、きちつとそろえて並んでいる。

あ、そうか……。

「じゃ、とりあえずコレかな？」

と言って、その中の一番はじつこの1冊を手を取った。これはこの部屋において唯一文学的、かつ女の子向きな本である児童文学全集だ。俺が小さい頃に両親が買い与えてくれたもので、久しく本棚の隅っこでホコリをかぶっていたのだ。ちなみに全12巻もある。

「とりあえず第1巻」

「わあ、ありがとうございます」

机の上のエトセラの前に本を置いてやる。するとエトセラは、ちよつと重そうに本の表

紙をめくって中をのぞき込んだ。いちばん初めのお話は……。

「『ハイジ』……ですか？」

「うん。これならエトセラでも楽しめると思うよ」

ま、これでしばらくは退屈しないかな？ ……でも、やっぱりもう少し考えなきゃいけないよな。エトセラのためもあるけど、俺ももつといろいろと話をしてほしいし……。

んー、母さんに、休みの交渉でもしてみんなあ？ ちよつとむずかしいと思うけどね。……すると、ちよつどそのとき、階下から母さんの声が響いてきた。

「知也ー！ そろそろお店開けるわよー！」

「わかったー！」

と、返事をして立ち上がる。仕方ない、そこらへんはまたあとで考えよう。

「じゃ、行くけど、くれぐれも家族には気をつけて」

「はい」

エトセラの言葉にうなずいて、扉を開けて廊下に出ようとする……。

「にゃあ」

待ち構えていたように、猫のモモが俺の足に擦り寄って部屋の中に入ろうとした。

「こらこら、おまえは駄目だつて！」

モモを押さえつけて抱き上げる。すると、エトセラはモモの姿に驚いたようで、目をま

んまるに見開いて飛び上がった。しまった。

「わっ！　そ、その子は？」

「ああ、我が家のペット、猫のモモだよ。基本的にはおとなしいやつなんだけどさ、エトセラは気をつけたほうがいいな。こいつが君にじゃれついただけで、大変なことになるからね」

「は、はい」

ちよつと恐くなっちゃったのか、エトセラは身体をブルツと震わせた。

「はは、大丈夫だよ。俺も気をつけて、君のいる間はこいつを部屋に入れられないようにするから。……さ、おまえは外に出てろ」

モモを廊下に放すと、「ニャア」とちよつと不満そうな声を上げて、しぶしぶと階段を降りて行った。

「じゃ、ホントに気をつけてね」

「はい。知也さんもお仕事がんばってください」

俺はエトセラに微笑み返し、後ろ手に扉をパタンと閉めた。

2

「……………」

ううむ……。店番というのは結構ヒマなのである。現在、店内に客足はない。だいたい、朝からそうそう客なんて来るものでもないのだ。

だから、客のいないときはずーっとこうして座っているだけなんである。もちろん、ここにはテレビどころかラジオさえない。

「商売してるときは商売に徹すること。ほかのことに気を取られて、お客様への対応がよろそかになつては失礼！」

つてのが母さんの考えなのである。ほかの店じゃ、あまり気にしてないと思うんだけどなあ……。ラジオくらいかかってたりするじゃない？ ま、徹底して妥協しないところが、母さんらしいって言えばらしいんだけどね。

わが店は酒屋とはいえ、狭いながらも品ぞろえは充実していて、ちょっとしたコンビニ並みだ。しかも、住宅地のどまんなかにあるので、奥さんが料理中に、「あら、みりんが切れてたわ！」なーんて事態に陥つても、エプロン姿ですぐに買いに行くことができる。そのため、結構繁盛はしているのだ。

しかしまあ、壁といわず棚といわず、そこらじゅうにズラ〜ッと並ぶ酒ビンを見回しながら、「こりや地震が来たら、落ちて一発だな」などと、つつい親不孝なことを考えってしまうほどヒマなのだ。

することがなくて、ボーッと天井を見上げる。そういえば、この店舗の真上は俺の部屋

だったっけ……。エトセラ、大丈夫かな？ 自然と思考はあの娘のことへと集中する。

……ピグマリオンか。あんな小さな女の子が存在するなんてなあ……。でも……。可愛いよな。うん。

あの、ニコッていう微笑みがもう、とつても幸せそうでさ……。それだけでなんか、こ
う、ほわあつてした気分になれるんだよね。こんな感覚初めてだ。

でも、俺、エトセラとはちゃんと話ができるなあ。いつもだと、加奈子以外の女の子の
前じゃ、なんにもしゃべれなくなっちゃうのに。

さすがに、あんなにちっちゃいと女の子を意識しないですむからかなあ？ まあ、彼女
の存在は“女の子”って概念を超越してるからなあ。ほかの娘と一緒に考えちゃいけない
んだらうけどさ……。

……と、そのとき、店の入り口の自動ドアが音をたてて開いた。

俺はあわてて姿勢をただし、入り口に向かって満面の笑みを浮かべて接客モードに入る。

「いらっしやー……」

しかし、元気よく上げた声が、次第に尻すぼみした。そこに立っていたのは、

「よおー！ 元気が勤劳少年！」

「……なんだ、公一かよ……」

「なんだじゃないよ、ちゃんと応対しろって」

そう言ってズカズカと店内に入ってくる。

「なんだよ、今日は客なのか？」

「違うけどさ。どうせヒマなんだろ？」

そのまま俺の前を横切って店内の大型冷蔵庫の前まで行くと、中から勝手にコーラのペットボトルを取り出した。

「これ、1本おまえのおごりな」

「なんで!？」

抗議しようとする、公一はじとつと恨みがましい目で俺を見た。

「島流しの刑を俺ひとりに押しつけといて……、このくらいの施ほどこししたって、罰は当たらんだろう？」

わざとらしく、がっくりと肩を落としてみせる。島流しってのは、例の席替えのことか？

「……わかったよ。仕方ない」

そういうのって、俺の小遣いから引かれるんだぞ。

「ありがとう友よ」

白い歯を見せながら公一がペットボトルの栓をひねると、プシュツという小気味いい音



が店内に響いた。いけしゃあしゃあとよく言うよ。こりゃ、新学期始まっても尾を引きそうだな……。

「……で？」

幸せそうに喉を鳴らす横顔を見ながら聞くと、公一は「は？」と言って俺を見返した。

「だから、何しに来た？」

「ああ……」

突然深刻な顔になって腕組みし、大きなため息をひとつ。そしてそのままの姿勢でしばらく何事か考え込んでいたかと思うと、やおらボソリとつぶやいた。

「人生ってのは山あり谷あり。なかなかうまくいかないものだよなあ」

そう言つて、ふっと遠い目をする。

つまり、ナンパがうまくいってないわけだな。

「……さつきも駅前でも可愛い娘みつけたんだよ、隣街の女子高生。声かけようとしたんだけど、どうやら男連れでさ。それも、相手はサエないおっさんなんだぜ。あんな可愛い子なのに、世の中間違ってるよな」

「まあ、人生には思わぬ出会いってのもあるさ」

一応励ましてやる。俺って友達思いだなあ。

「たとえば？」

……たとえば、

「突然、別の世界からやってきた女の子が現れて、一緒に暮らすハメになるとか……」

「なんだそりゃ」

あきれた顔で俺の顔を見る公一。

「おまえ、オタクなアニメの見すぎじゃないのか？」

「冗談だよ」

ホントはホントのことだけだな。まさかそうとも言えず、笑ってごまかす。

そのようすに、少し不審そうな目つきで俺を見つめる公一。

……ちよ、ちよっとまずかったかな？ でも、少しくらい自慢したいじゃないかっ！

「はあ……出会いねえ……」

公一はまだ半分以上中味の残っていたボトルをあおると、それを一気に飲み干した。そして、「うーん」とうなって大きく背伸びをする。

「ま、ここにこうして俺より薄幸はっこうな奴もいることだしな。気を取り直してそろそろ街に繰り出すかな！」

……俺のことか？

「おまえもさ、たまには息抜きしないと駄目だぞ。なあ、今度一緒に海にでも行かないか？ 水着の女の子たちが、俺たちを待ってるぞ！」

「母さんに言ってくれよ。俺に休みをやってくれってさ……」

「……はあ……。おまえって、ホントに……」

ちようどそのとき、入り口の扉が開いて今度は本物のお客さんが入って来た。

「いらっしやいませー！」

にこやかに言いながら、手を払って公一に「帰れ！」と合図してやった。

「はいはい。お仕事がんばってね」

うるさい！ 口には出さずににらみつけてやると公一はニヤリと笑って、お客のおばさ

んとすれ違い、扉をくぐって真夏の日差しの中に消えていった。

今日も1日、奴はこの暑い中、女の子を追いかけて回すわけだ。

本当は大声で叫んでやりたい。

「俺の部屋には、俺の帰りを待っている可愛い女の子がいるんだぞおーおー！」

ってな。……まっ、誰も信じちゃくれないだろうけど。

3

それからしばらくの間、少々忙しくなった。

今、店内には数人のお客さんがいる。ヒマなときはおもいつきりヒマなくせに、いったん忙しくなるとしばらく客が続く。……ちよつと不思議だ。

と、そのとき。

ドシーン！ バタバタ！

(……!?)

突然、2階から何かが崩れたような、大きな音が響いた。
な、なんだ!?

お客さんも、ビックリして天井を見上げている。

真上は……俺の部屋！ ってことは!?

急いでカウンター奥の扉をくぐり、家屋側へと戻る。走って階段を登ろうとすると、廊下の向こうで母さんが叫んだ。

「ちよつと知也！ 今何か音が……」

「ごめん！ お客さんよろしく！」

「え!? ちよ、ちよつと！」

無視して階段を駆け上がり、自分の部屋の扉を開いた。そこには……。

床の上に本が散乱していた。本棚から落ちたらしく、ページが開いたのやら表紙が折れたのやらが、そこら中にばらまかれている。

「痛たたたた……」

声のするほうに目を向けると、床の上にエトセラがひっくり返ってお尻をさすっていた。

おおおっ！ スカートのまくれあがって、白いパンツまでがチラツと見える。
……って、そんな場合じゃないっ！！

「エトセラ！」

駆け寄ってひよいと摘まみ上げ、手のひらに乗せてやると、ちよつとびっくりした顔を
して俺のこを見つめた。

「と、知也さん……」

「どうしたんだよ？ いったい」

「い、いえ、それが……」

申し訳なさそうに、目を伏せるエトセラ。

「本を……読み終わってしまったもので、新しい本を出そうとして……」
それで、ひっくり返しちまったのか。

「もう、駄目じゃないか」

「ごめんなさい！ 知也さんにご迷惑をおかけしないように、ひとりで行ろうと思ったん
ですけど……」

俺の手の上で、エトセラはしゅんとしてうなだれる。

「ご本をこんなにしてしまって……、逆にご迷惑を……」
ちよつと泣きそうな声だ。

確かに、部屋を見渡すとばらまかれたの本の中には、折れたり破れたりしているのがいくつもある。でも、

「そうじゃないよ。本はいいけど、エトセラが怪我をしちゃ大変だろ？」

「え？」

驚いて俺の顔を見上げるエトセラ。

「本なんて折れたって読めるし、破れたら貼りつければいいんだよ。でも、エトセラが怪我をしたら取り返しがつかないじゃないか」

「知也さん……」

「いい？ 本が欲しいときは俺に言う、ヘンな気がねはしないこと！ 俺たちパートナーだろ？」

「は、はい！ ごめんなさい！」

あわててピョコツと頭を下げる。

「よおし」

俺が白い歯を見せると、エトセラもやっと笑顔を取り戻して微笑み返してくれた。

(ふう……ホントに驚いたよ)

まあ、俺ももうちよつと気を利かせて、もっと取りやすい場所に本を置いておくべきだったな。これから気をつけなくちゃ。

エトセラを机の上に戻してから、床に散らばった本を拾い集めて本棚に戻す。その際、彼女が取ろうとしていた全集の続きと、さらにその後の数冊分を彼女の前に置いてやった。

エトセラは「すいません」を繰り返して、何度も頭を下げる。

だから、もういいってば。……そういや、もう1冊読み終わっちゃったのか。

驚異的なスピードだな。俺なんて子どもの頃、あれを1冊読み終わるのにどのくらいかかったっけ？ 途中で飽きちゃったような記憶もある。

こりゃあ何日も経たずに全部読み終わっちゃうぞ。なんとかしてやらないといけないよなあ……。

……と、そのとき。

ガチャリッ！

いきなりノックもなしに背後のドアが開き、美知が顔をのぞかせた！

「おにーちゃん？ 誰と話して……」

美知と俺の目が合う。俺は、硬直したまんま動けない。

そして、美知の視線は机の上のエトセラへ……。

「……」

室内を包む重い沈黙。

やがて美知は、少し青ざめた表情で、無言のままゆっくりと扉を閉めた。
パタン……。

「……あ……」

ま、まずい！

「どうしようエトセラ！ 美知に見られちゃったよ！」

やばい！ やばいぞ！ このままじゃエトセラが……！！

「だ、大丈夫ですよ。幸い動いてるところは見られませんでしたし、たぶん私のことを本物のお人形だと思ったはずです」

「ホ、ホントに？」

「ええ」

そ、それならいいけど……。やばかったあ。はっきり言って俺の不注意だ。もうちよつとしっかりしないと、エトセラが人間になれなくなっちゃうよな……。

「はあ、寿命が50年は縮んだよ」

「私もビックリしました」

ふたりして、安堵あんどのため息をついた。

……ん？ ちよつと待てよ……。

「エトセラのことを、本物の人形だと思ったって？」

「はい」

えーと……と、いうことは……。そ、それって、別の意味でまずいんじゃない？
そのとき、階下から美知の声が響いてきた。

「お母ーさーん！ お兄ちゃんが、お人形とお話してるー……っ!!」

第3章 初めてのドッキリ外出

1

「わーっ！ 早い早い！」

俺のシャツの胸元から顔をのぞかせ、エトセラがうれしそうに声をあげた。

今、俺は配達用の自転車で住宅街を走り抜けているのだ。

結局、仕事は休みが全然ないし、その間俺の部屋で本を読んでいるだけってのも可哀想なので、こうして配達の仕事と一緒に連れて来たのだ。

初めは外出を恐がっていたエトセラも、外の世界の珍しいものや風景を目にして、だんだんと楽しくなってきたようだ。

「知也さん、まわりの景色がビュンビュン後ろに流れていきますよ！」

「怖い？」

「いいえ、なんだか気持ちいいです！」

まあ、荷台にはケースに詰まった酒ビンがガチャガチャと音をたてているし、誤ってエトセラが落ちてしまうのもまずいので、実際はそれほどスピードは出していないのだが。

それでも、初体験のエトセラにしてみれば、結構な速さを感じるのだろう。

「あ、知也さん。あれはなんですか？」

エトセラが身を乗り出して指差す。

「うん？ ああ、あれは電柱だよ。上の電線で電気を送ってるんだ」

「へえ〜……あ、じゃああれは？」

「あれは煙突。煙が出てるだろ？」

「ふーん」

……とまあ、万事この調子で、エトセラは目につくものすべてに興味を持って、俺に質問してくる。結構大変ではあるが、ひとつ答えるごとにいちいち感心してくれるので、こっちも教えがいがあるってものだ。

しかし、エトセラが身を乗り出すたびに、お尻を突き出す格好になって、ぼやぼやしたものが胸のあたりに当たってこれがなんとも……。

なんか、ちよつと幸せ……。

いやいや！ エトセラは真面目に勉強してるんだ。それを俺はなんて不真面目な！

……と、俺の葛藤かっとうも知らずに、彼女は次々に質問を続けてくるのだった。

「じゃあじゃあ、あれは何です？」

「ん？」

指差す方向を見れば、ひととき大きなコンクリート造りの建物がそびえているのが見えた。妙に角張ってて、窓がたくさんある建物。そう、あれは……。

「ずいぶん大きなお家ですねえ。お庭もあんなに広くて」

「はは。家じゃないよ。あれは俺の通っている学校さ」

「え？ あれが学校ですか」

俺の顔を見上げてから、もう一度校舎を見るエトセラ。

「知也さんも、あそこでお勉強してるんですね」

「ま、まあ一応ね。でも、どっちかっていうと勉強するよりも、友達と遊んで、弁当食って、昼寝するところかな？」

エトセラは「まあ」と言っ、クスクスと笑った。

「……知也さんのお友達って、どんな方なんですか？」

「友達？」

とりあえず思いついたのは公一である。俺っていい奴だよな。あいつは、もっと俺に感謝してもらいたいところだ。

「友達っていうか、悪友って感じだな」

「アクユウ？」

「えーと、そうだなあ。一緒にバカ話したりイタズラしたりとか……そんな関係かな？」

「イタズラですか。私も友達とよく……あ、いえ！」

ハツとして、ばたばたと取りつくろうエトセラ。でも、聞いちゃったもんねえ。

「ふーん、エトセラもイタズラとかするんだ」

「え、いえ！ 私、そんな……」

真っ赤になって、シャツの端で顔を隠してしまった。

「エトセラって、おしとやかで優等生なのかと思ってたら、そういう一面もあるんだね」

「……嫌ですか？ そういう娘……」

少し顔を上げて、恥ずかしそうに俺を見る。

「そんなことないって。ちよつとくらいそういうところがあったほうが、可愛いと思うよ」

「そうでしょうか？」

「うん」

エトセラは俺の言葉に「よかった」とつぶやき、胸を撫なで下ろした。

「そのエトセラの友達ってやっぱり女の子？ どんな娘かな？」

「え？ あ、ええと、この間お会いしましたよね？」

「は？」

会った？ いつ？

「箱を拾う前の晩に、夢の中で」

?.....ああ! そう言えばエトセラのほかにもいたっけ。

「確か、ふたり」

「はい。あのふたりが、私といちばん仲よしのピムとミンティーです」

ふーん、そうかそうか。すっかり忘れてたな。

「ピムは、すっごい元気で活発な娘ですし、ミンティーは……」

エトセラはしばらく考え込んでから、予想だにできなかったことを言う。

「猫……ですわね」

「はい？」

……猫? って、あの猫?

「会えばわかります。もしかしたら、ふたりともそのうち箱から出てくるかもしれませんから、そのときはよろしくお願いしますね」

「はあ……」

猫……まあ、いいか。

話している間にも自転車をこぎ続け、校舎がぐんぐん近づいてきた。目指す配達先は、学校のさらに向こう側なのだが……。

「ん？」

校門から、女生徒がひとり出てくるのが見えた。それも見覚えのある顔。

……まずい。

俺はペダルをこぐ脚に力をこめ、自転車のスピードを上げた。そして、何気ない顔をして校門の前を通り過ぎようとした、そのとき。

「こら！」

大声で叫んで、女生徒が自転車の前に飛び出し、俺の行く手をさえぎった。

とっさにブレーキを踏み急停車をかける。タイヤが悲鳴をあげ、耳障りなカン高い音があたりに鳴り響く。

「……っと！ 危ないだろっ！」

飛び出した女生徒、加奈子に向かって怒鳴ると、彼女は俺をじとつとにらみつけた。

や、やばい！

(エトセラ、隠れて！)

(は、はいっ！)

小声で注意すると、エトセラはサツとシャツの奥のほうへと顔を引っ込めた。そしてエトセラが滑ってストーンと下に落ちてしまわないように、何気なく腕組みをして足場を作つてやる。ちよつと大きめのシャツなんで、気づかれはしないだろう。

「何をコソコソしてるの？」

加奈子が、俺の目の前に仁王立におうちになった。

「い、いいだろそんなこと。それより、危ないじゃないかっ！」

「……君、今私を無視して通り過ぎようとしたでしょ？」

俺の顔をのぞき込むように、ずいっと加奈子が身を乗り出す。

「い、いや、それは……」

「言い訳したって駄目よ。あなたのことは、なんでもお見通しなんだから！　いつも言ってるでしょ？　知ってる人に会ったら、ちゃんと挨拶あいさつしなさいって！」

腰に手を当て、「情けない」とでも言いたげな顔でため息をつく加奈子。

ホントに、これじゃまるで母親と小学生だ……。こういうところが面倒くさいから、無視しようと思ったのに。

しかし、今回は徹底的に俺のほうが悪い。エトセラがいたからという大義名分もあるが、もちろんそんなことを説明するわけにもいかないし……。

「そ、それより、どうしたんだよ。なんで学校なんかにいるんだよ？」

「あたしは知也君とはちがって、夏休みだって部活で忙しいのよ」

そう言って、持っていたスポーツバッグを上げて見せた。部活の道具らしい。

と、シャツの中で、何か MOZMOZ と動いた。

……ヒヤッ！

「そ、そうだ！　急いで配達いかないと！　じゃあな！」

言うが早いか、あわてて自転車に飛び乗りペダルに足をかけた。

「あ、ちよっと！」

加奈子の呼びかけを無視して、全速力でその場から緊急待避。

しばらくこいでから後ろを振り返り、加奈子が見えなくなったのを確認してシャツの中に話しかけた。

「エトセラ、もういいよ」

もぞもぞとしてエトセラがシャツの胸元から顔を出し、大きく深呼吸する。

「……ふう」

「ゴメンな。あいつ、うるさくてさ」

「あの方……どなたですか？」

「ああ、加奈子ってクラスメイトなんだけどさ。家が結構近いんで、昔からの知り合いっていうか……まあ、幼なじみってやつかな」

「オサナナジミですか？」

「小学校上がる前から、ずっと一緒なんだよ。まったく……」

「ふーん……」

エトセラは、そのまま黙り込んでしまった。

あれ？

「……エトセラ？」

「なんですか？」

な、なんだ!? ちょっとトゲがあるような？

「ど、どうしたの？」

「なんでもありません」

じーっと前を向いたまま、顔を見てくれない。

おーい。

……俺、なんかしただろうか？

うーん……やっぱり、女の子ってよくわからない……。

2

しばらくすると、流れる街並みに好奇心を刺激されたのか、エトセラもやっと機嫌を直してくれたらしく、再び質問責めが始まった。

「あれはなんですか？ あ、あっちのあれもなんででしょうか？ それとそれとお」

「え、えーと……」

まあ、しゃべってくれないよりは断然いいけど……、やっぱりちょっと大変だなあ。

エトセラの攻撃に応戦しつつ、しばらくペダルをこぎ続けると、前方の家並みの向こう

に、屋根の上から顔をのぞかせている大きな松の木が見えてきた。

「ああ、あそこが目的地の配達先だよ」

「え、あれですか？」

そこはグルリと土壁に囲まれた瓦屋根かわらの純和風のお宅で、まわりの家に比べると少し大きな造りの「お屋敷」なのだ。

立派な門の前で自転車を止め、荷台にしばらくつけてあったケースを外して両手で抱える。門をくぐれば庭も純和風。壁の向こうからも見えた大きな松の木が何本も生え、池には錦鯉にしきい……とまではいかないが、金魚と蛙がたくさん泳いでいる。

塀へいから顔をのぞかせるほど高い松の木のおかげで、この家はあたりの住人から「松の木屋敷」なんて呼ばれている。

その庭を通って家の裏手に回り、勝手口へと向かった

「わー、こんなに大きいと、たくさん人が住んでいるんでしょうねえ？」

「うーん、それがねえ……」

この家には、老夫婦がふたりきりで住んでいるのだ。俺もくわしいことは知らないが、ほかの家族は見かけたことはない。まあ隠居生活いんきよってやつだろうか。

勝手口の前まで来て足を止め、胸元に顔を出しているエトセラを見下ろした。

「エトセラ、すまないけど、またしばらく隠れててくれるかい？」

「はい」

素直にうなずいて、シャツの中に顔を引っ込めるエトセラ。
俺は大きく深呼吸して、

「こんちはー！ 酒屋でーす！」

勢いよく言って、扉を開けた。そこはもちろん台所である。

老人ふたり暮らしにしては、ずいぶんと大きな台所だ。以前は、家族もたくさんいたのかもしれないな……。隅のほうには大きなかまどまである。さすがに長い間使っていないようだが、ところどころ煤すすで汚れているので、昔はこれで煮炊にたきをしていたのだろう。

しばらくすると、奥からはほほ直角に近いくらい腰の曲がったお婆さんが「はいはい」と返事をして、よたよたと出てきた。この家の老夫人だ。

気のよさそうな、いや実際に非常に気のいいお婆さんで、いい具合に刻まれた顔の年輪が、その奥深い人生を実によく物語っている。

お婆さんは俺の顔を見ると、しわしわの顔をゆるめて破顔はがんした。

「おやおや、お兄さんかい。今日は旦那さんは？」

「家でテレビ見てますよ。今夏休みなんで、俺が手伝いさせられてるんです」

「ほー、そうかいそうかい」

うんうん、とうなずいて、口の中で何度も「そうかい」を繰り返すお婆さん。

「えーと、品物はここに置きますから」

勝手の隅にケースを置くと、台所にガシャリと大きな音が響いた。

「はいはい。お疲れさまでしたなあ」

「それじゃあ、ありがとうございます……」

急いで立ち去ろうとすると、後ろからハシッ！ と服の裾をつかまれた。

うっ……。

「お兄さん。ちよつと上がっていきなさい」

振り向くと、お婆さんは真つ白い入れ歯をニツと見せて笑っている。

「え？ いや、今日は……」

「遠慮せんでいいって。知り合いからやぶきたのいいのと、きんつばをもらったんじゃ。

ほれ、上がった上がった」

ま、まずいぞ！ 今日はエトセラがいるから、さっさと帰ろうと思ってたのに！

「きよ、今日はホントに帰らないとっ！」

「ええから、ええから」

お婆さんは、俺を引きずるようにして家の中に引っ張り込む。

わわっ！ は、はつきり言って、腰の曲がった老人の力とは思えないぞ！

「ああっ！ 助けてえっ！」

「ええから、ええから」

ずるずるずるずるずるずるずるずるずるずる……。

あうう……。されるがままに引きずられていく俺。

なんか、はたから見たら、鬼婆に取って食われる旅人のようなのではないだろうか？

そうして通されたのは、庭の見える居間。もちろん障子戸、畳、掛け軸、ちゃぶ台と、四点セットそろった超純正日本間である。クーラーも扇風機もないが、風通しもよく、ちよどいい具合に日陰になっているので、結構涼しくて快適な空間だ。

そこにはすでにお爺さんが座って、お茶をすすっていた。この人がまた、お婆さんのさらに上を行きそうなほど人のよさそうな好々爺こうこうやで、俺の顔を見ると、これまたうれしそうに座布団を勧めてくれる。

まあ、悪い気はしないよね。

もしかしたら、昔はどこかの会社の社長か何かだったのかもしれないな。こうして家中を見回してみると高そうな壺やら置き物やらがあつて、生活に困るということはないよ。うだが、そこはやっぱり老人のふたり暮らし。寂しいのか、俺が配達にくるといつもお茶を出して話相手にしたがるのだ。

仕方なく、という言い方も失礼だが、そういうとき俺はおとなしく話を聞いてあげるこ

とにしている。別だん嫌なわけでもないし、面倒くさいとも思わない。逆にうちの家族なんかと話すよりも、ずっと楽である。

エトセラのことが心配になって、ふたりの目を盗んでシャツの中をのぞき込むと、彼女は「大丈夫です」と微笑み返してくれた。

でも、ちよつと苦しそうだ。やっぱり、早々に引き上げたほうがいいよなあ。

しかし、そんな俺の心配をよそに、お爺さんがあれこれと話を始めてしまった。

仕方ないので、出されたお茶をすすりつつ、ふたりの話に耳を傾ける。

毎朝庭にスズメが来るとか、近所の犬が子どもを産んだとかいう、たわいのない話がほとんどである。

「……それでな、来週、外国に赴任しとった息子夫婦がこっちに戻ってきて、ここで一緒に暮らすことになったんじゃないよ」

そう言つて、お爺さんがうれしそうにところどころ空きのある歯を見せて笑った。

「へえ、よかつたじゃないですか」

寂しい老人ふたり暮らしも終わりつてことだな。いや、それはホントによかつた。

つてことは、お祝いで店にも注文が来るかな？　こりゃ、父さんに知らせておこう。

「それで、一緒に孫娘も帰ってくるんじゃないかな」

へえ……お孫さんね。歳としはいくつくらいなんだろ？　美人かな？

「おまえさん、嫁にもらつてくれんかのう？」

「はあ、そうですねえ……」

相槌あいづちを打って、お茶をひとすすり。

……え？

「ええええええええええええつ!!」

叫んだ拍子に、思わずお茶をふいてしまった!

な、何を言い出すんだ、このヒトはっ!!

「おう、おう、そんなにうれしいかの？」

「ち、違いますよ! 突然とんでもないこと言うからっ!」

「いやあ、前々からどうかと思っておったんじゃ。最近の若いもんにしては、ずいぶんと親思いで働き者じゃからなあ」

いや、それは無理矢理やらされてるだけで……。

「だいたい、俺はまだ17ですよ!」

「わしらが結婚したのは15のときじゃったぞ。なあ婆さん?」

「そうでしたなあ」

お婆さん、ちよつと頬を赤らめる。

おいおい……。

「む、昔と今とじゃ違いますよ！」

「何を言つとる。最近の若者のほうが、昔よりもずっと成長が早いではないか。もう、子どもの作り方だつて知ってるじゃろ？」

「なつ、なななな……」

言葉にならない……。

すると、お爺さんは座布団の下から一枚の紙片を取り出した。

「ほれ、これが息子が送ってきた家族写真なんじゃがな、この真ん中のが長女の……」

は、初めから用意していたのかっ!?

「ほれほれ、よく見なさい。とつても美人じゃろうが。歳もおまえさんと同じくらいだつたはずじゃぞ」

そう言つて俺の前に写真を突き出す。俺はとつさに目を伏せた。

な、なんか妙に後ろめたい気が……。胸元のエトセラも気になるし。

しかし、お爺さんはぐいぐいと俺に写真を押しつけてくる。

「胸だつてこんなに成長しとるし、脚だつてスラーつと長いぞ。これが孫でなくて、わしがもつと若けりや、絶対ほつとかんぞい」

いや、そんなこと言われても……。で、でも……写真を見るくらいなら……。

俺がそおつと目を上げようとした瞬間。

ガブリッ!

「!?」

なっ……。

「痛ったあああああああああああつ!!」

服の中で突然起こった激痛に、飛び上がってしまった!

お爺さんが目を丸くする。お婆さんも、驚いて入れ歯を落としてしまった。

「なんじゃ、突然?」

「い、いえ……ちよつと……。ハハハ、ハ」

……乳首を嚙かまれた……。

「きよ、今日はやっぱり調子悪いんで……これで」

「そうかい? それじゃまあ、しょうがないけど」

俺はゆっくりと立ち上がると、不思議そうな顔をして俺を見ているふたりにえしやく会釈して部屋を出ようとした。

そのとき、後ろからお爺さんの追い撃ちがかかる。

「わしは本気じゃぞ。結婚の件、考えといておくれよ!」

ガブッ!

「!?」

今度はもう一方の……。
お屋敷に、俺の絶叫がこだました。

3

俺は老夫婦の家を出て、再び自転車をこぎ出した。気づかぬうちに結構長居していたらしく、そろそろ日も傾き始めている。

エトセラはようやく狭い服の中から顔を出すことができ、大きく息を吐いた。

……でも。

「あのー……エトセラ？」

「……………」

俺が声をかけても、ぷいっとそっぽを向いたまま返事をしてくれない。

えーと……………」

「おーい、エトセラさん？」

すると、エトセラはくるつと振り向いて俺を見上げた。

ああ、やっと反応してくれた……………」

「ご婚約、おめでとうございます」

にこやかに微笑む。

や、やっぱり……。

「い、いや、だからそれは……」

「私、結婚式には出席できませんが、花嫁の方にはよろしくお伝えください」
そう言ったきり、再びそっぽを向いてしまった。

ははは……。今度は、完全に怒ってしまったらしい。どうしよう？

街は、すっかり夕暮れムードだ。買い物帰りの主婦や、遊び倒して泥だらけの子どもたち、俺の自転車とスレ違う。

しばらく、無言のままペダルをこぎ続けた。

「……………」

「……………」

……気まずい……非常に気まずい。なんとか機嫌を直してもらわないと……。

俺は、自転車をこぎながらしばらく考えた。

……そうだ！

「ねえ……ちよっと寄り道してもいいかな？」

「……………」

やっぱり返事してくれない……。悲しい。

とりあえず家への道を曲がらずに、そのまままっすぐ進んで別の角を曲がる。そうして

しばらく進むと、あたりには次第に木々の緑が多くなってきて、舗装された道路は途中で途切れてしまう。

俺は道路の切れ目で自転車を止めて、そこから続く砂利の坂道を見上げた。

そう、ここはあのお気に入り裏山だ。

「ちよつと歩くけど、いいかな？」

「……………」

エトセラ、いまだ無言…………。

とりあえず、それを了解と受け取って、山道を登ることにする。昼間の照りつけるような暑さは過ぎ、夕刻のそよ風が心地好い。あたりの木々の間から聞こえてくるアブラゼミの鳴き声もやつと弱まってきた。

ふと、道端に白い小さな花が咲いているのに気づき、サツと摘み取った。

そのままトボトボと山道を登り、15分ほどで頂上に着いた。

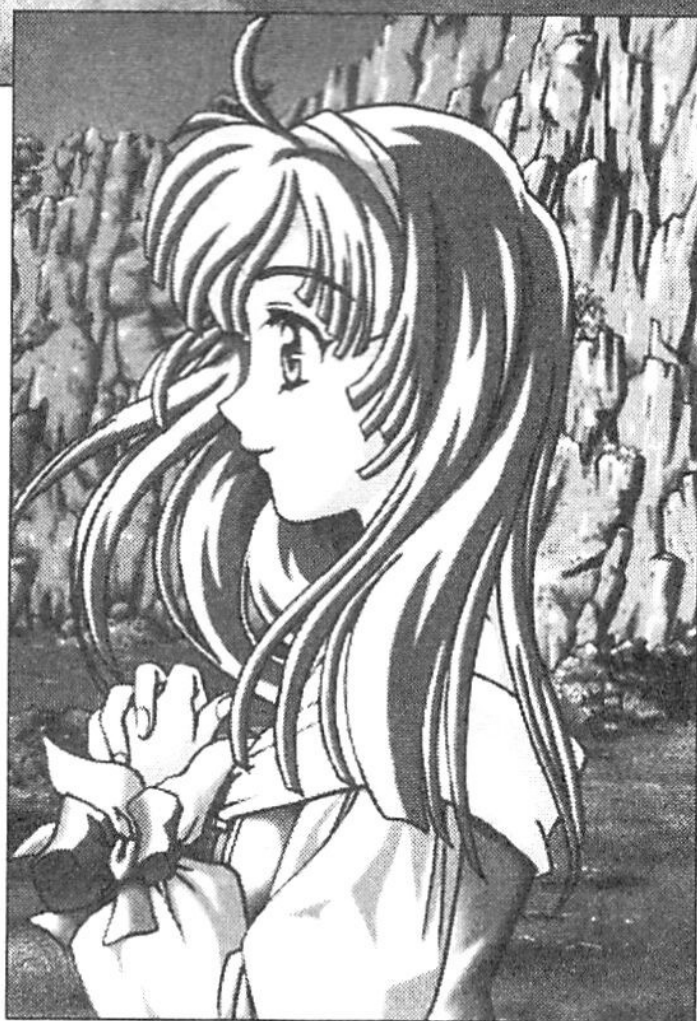
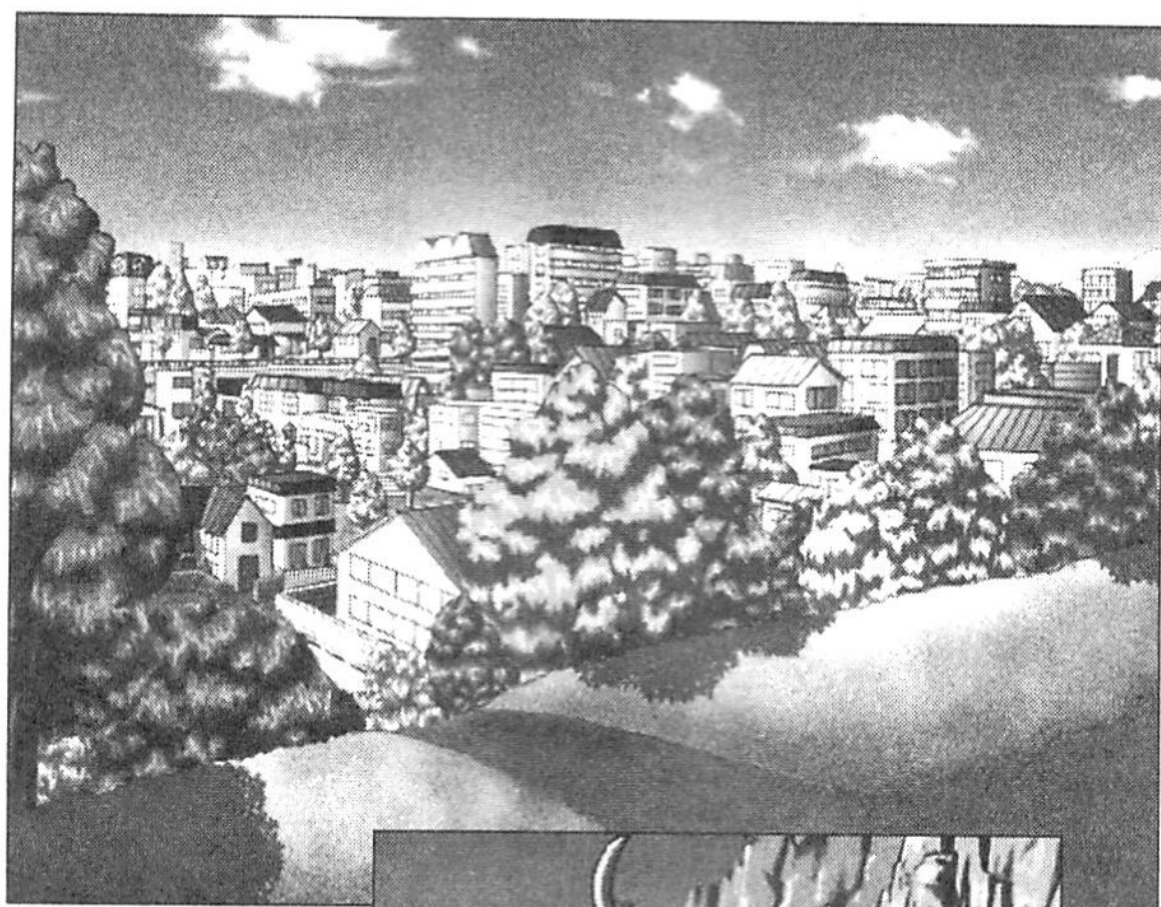
「ほらエトセラ、見てごらん」

俺の声に渋々視線を巡らすエトセラ。しかし、すぐに彼女は感嘆の声を上げた。

「わあ……………」

俺には見慣れた街の風景。しかし、それは夕日によって一面真っ赤に染まっていた。

昼間はあれだけさまざまな色に彩られているのに、今は見渡す限りの茜色だ。



「すごいですねえ」

怒っていたことも忘れて、エトセラはうっとり見入っている。

そこに、さつき摘んだ花を一輪差し出した。鮮やかな黄色の中心部に、薄くピンクがかった白い花弁を持つ小さな花だ。

「はい、プレゼント」

「……私にですか？」

「うん」

俺の手から花を受け取り、チラリと横目で俺を見る。

「……お花を贈れば、女の子は機嫌を直すとも思っています？」

「はは……。さあ、どうかな？ そこらへんは、あまりくわしくないもんで……」

……余計なことしたかな？

エトセラはジーツと俺をにらんでいたが、ふいに口元をほころばせた。

「このお花に免じて、許してあげます」

そう言っつて、ようやくニッコリと微笑んでくれた。

……はあ、よかった。

エトセラはしばらくニコニコと花を見つめていたが、思い出したように俺を見上げた。

「このお花、なんて名前だか知っていますか？」

「え？ えーと……」

聞いた覚えはあるんだけど……。

「ヒメジョオンですよ」

「ああ、そうだそうだ。よく知ってたね？」

「ええ、凶鑑で見ましたから」

俺の部屋にある『動物植物子ども大凶鑑』だな。小学生のときに買ったやつだ。

「でも、凶鑑で見るよりも、実物を見て、さわったほうがよくわかるだろ？」

「はい。とつても」

そう言つて微笑み、再び花の観察を始める。

これで今日の外出も意味があつたつてもものだ。うん。

……いろいろ、大変だったけどね。

それから、しばらくエトセラと一緒に夕日に染まる街をながめていたが、次第に日が落ちてあたりが薄暗くなってきた。

……そろそろ帰ろうかな。

と、思ったそのとき、後ろの茂みのほうから、何やらうめき声のようなものがしているのに気がついた。

「ああ……アアン……」

……なんだろう？ そう思つて、茂みをかき分けてみると……。

(わわっ！)

予期せぬ光景。

なんと、女の子の後ろから、男がのしかかっていたのだ！

4

「ンン……ん、あ……アア！」

湿った声が、野山に響く。

おおおっ！ こ、これは噂に聞いた青姦つてやつ！?

山の中とはいえ、こんなまだ日も落ちてないうちからなんて大胆な……。

女の子が木の幹に手をついてお尻を突き出し、男はその背中にのしかかるようにして腰を動かしている。どうやら、本番真つ最中らしい。

うわあ……こんなの見るの初めてだよ。

……って、普通あんまり他人の行為を見る機会なんてないか。ビデオなら、前に公一に借りて見たことあるけどさ……。

ちよつと遠めで、よく見えないのが残念。

女の子のほうは、隣街の私立女子校のセーラー服だ。このあたりまでくれば、知ってる

人間がいないとでも思つて、大胆になつてるのかもしれない。

後ろ姿だから顔は見えないけど、眼鏡をかけているみたいだ。でも後ろから見ただけでも知的で清純そうに見えるのに、女の子ってコワイ。

男のほうはかなりのオヤジだ。どう見ても30歳は超えてるだろう。

はつきり言つて、普通のカップルとは思えないんだけど……もしかして、援助交際つてやつだろうか？

「ウン……あ、アハア……ア……ン……ン……」

女の子が甘つたるい声でうめく。

「せ、先生、せんせえい……」

せ、先生!? つてことは、もしかして教師と教え子か!?

許されない間柄のふたりが、自分たちだけの場所を求めて、流れ流れて隣街のこの裏山まで来たのか……。なんか、とんでもない現場に居合わせてしまったんじゃ……。

まあ俺は、基本的に愛に身分や年の差や種族やDNAの差なんてものは一切関係ないと思つてはいるけど、どうやら世間はそうではないらしいから。

でも、それでのぞかれてちゃ意味ないよなあ……。

セミの鳴き声もやんだ静かな山の中に、ふたりの激しい息づかいだけが響いている。

女の子のセーラーの上着は、男の激しい動きにズリ上がり、ときどき角度によって大き

なオツパイが、ふるん、とハミ出すのが見える。しかも、男が腰を揺するたびにそれがプルプルと揺れるのもわかる。

「アっ、……あアアん……」

男が腕を前に回してそれを揉みしだくと、歓喜の声をあげて応えた。

……あの容姿に、あの巨乳は反則だ。

スカートは腰の上まで捲まくり上げられ、左の足首のソックスのところに白いパンツがひっかかっている。

白くてまるまっついお尻は剥むき出しになっていて、そこに後ろから突き入れられた男の剛直が、ぬちぬちと音をたてながら出入りする。

しかも、それがデカイ！ まるで、すりこぎかバットの柄くらいはあるか!?

なんかちよつと感動ものだ。すごいよ先生、あんた偉大だよ!!
ずちやつずちやつずちやつずちやつ……。

湿った摩擦音が木々の間に響く。

しかしまあ、あんなもの突っ込まれて、女の子のほうは大丈夫なんだろうか？ 童貞（もちろん!）の俺にとっては、大いなる疑問だ。

「あ、ああっ！ せ、せんせい！ イイっ！ すごいよおっ！」
……すごいらしい……。

おそるおそる胸元を見下ろすと、エトセラが不思議そうに俺のことを見つめていた。なんか、心なしかちよつと顔が赤くなってるような……。

「知也さん？」

「は、ははは……」

ガサリ。

思わず、茂みをさわって大きな音をたててしまった。

「!?」

振り返ったカップルと目が合う。

「……………」

お互いに引きつった顔のまま、しばらくその場の時間が止まった。

「ははは……すいません、お邪魔しちゃって……さいなら！」

踵かかとを返し、脱兎だつとのごとく駆け出す俺。一度も振り返らずに坂道を駆け下り、自転車に飛

び乗って全力でペダルをこぎ出した。猛スピードでその場から脱出!

「あのー……あのおふたりは、いったい何をしてらしたんでしょわか？」

エトセラが俺を見上げながら、不思議そうに聞く。

「え、えーと、そのー……」

な、なんて答えりゃいいのか？

「あれは、えー……愛の最終段階っていうかな？　愛するふたりが最後に行き着くところ
というか……。まあ、そういうことで……」

「愛……ですか？」

「う、うん、そう」

「ふーん」

ホントにわかったのかわからないのか、とりあえずはそれ以上の質問をしないでくれた。
……助かった。

あー、まずかったなあ。エトセラの教育に、妙な影響が出なきやいいけど……。
俺は深く反省しながら、沈みゆく夕日に向かって自転車をこいだのだった。

第4章 思わぬ出来事大連発

1

バタバタバタバタ。

扉の向こうから、廊下を歩く足音が聞こえてきた。

「！」

机の上で本を読んでいたエトセラがその音にピクリと反応し、すばやくパソコンの裏に隠れる。するとすぐに、ガチャリと扉が開き美知が顔をのぞかせた。

「おにーちゃん、お風呂空いたよー」

「おう」

机に向かっていた俺は返事をして、椅子をクルリと回した。

戸口の美知はすでにパジャマを着ていて、濡れた髪をタオルで拭いている。

「あ、何？ お兄ちゃんもしかして勉強!？」

ビツクリして美知が目を剥く。こいつ……本気で驚いてやがるな……。

「当たり前だろ。俺にだって宿題があるんだから」

「でも、毎年結局終わらないうちに夏休みのほうが終わっちゃって、開き直るじゃん」
 「今年の俺はひと味違うんだよ」

「どうだ！っと胸を張って見せると、美知は疑いの眼差しまなざを俺に向けた。

「……もしかして、お人形さんで遊んでたんじゃないの？」

「そう言って、背伸びして俺の肩越しに机の上を見ようとする。

「ばっ、ばか！ あれは誤解だと言ってんだろ！」

「どーだかねー」

おどけた調子で言って、美知はパタンと扉を閉めて部屋へ帰っていった。

まったく、あいつめえ……。

「ちゃんとお勉強してたんですけどねえ」

クスクスと笑いながら、エトセラがパソコンの陰から出てきた。

最近は家族への対応も慣れたもので、ああやって足音を聞くとすぐに隠れることができるようになったのだ。

「すいません、私のせいで……。ご家族にあらぬ疑いをかけられてるみたいです」

「なーに、ゼーんぜん気にしてないよ。誤解するやつにやさせときゃいいんだって」

「そう、世の中見えていることや自分の理解の範疇はんちゆうだけが真実ではないのだぞ。

正義は俺にありだ！

「……さてと」

俺は時計を見て、立ち上がった。すでに夜の9時を回っている。

『お風呂』ですか？』

エトセラが俺を見上げて聞いた。

「うん」

「……いつもその『お風呂』に行かれますけど、いったいどういう所なんでしょう？」

「え？」

「どういう所って……。」

「えーと、1日の汚れや汗をきれいにする所だよ。お湯につかってゆっくりして……とつても気持ちいいんだ」

「気持ちいい……んですか？」

「うん。そういや、エトセラは風呂に入ったことないんだよね」

「はい。私たちはその、汗をかいたりしませんし……」

「うーん、どういう身体の構造なんだろう？ まあ、風呂に入らなくてもエトセラは不思議と清潔なんだよな。なんか、いつも花の香りみたいな、いい匂いがするし……。」

そのとき、何事か考えていたエトセラが、意を決したように身を乗り出した。

「あの、私も一緒にお風呂入りたいです！」

「ええ!？」

と、突然何を言い出すんだ!？」

「だ、ダメだよ!」

「なんでですか? 人間の習慣は、ちゃんと勉強したいんです!」

「い、いや、それはわかるけど……」

だって、それには裸にならなくっちゃ……。

「と、とにかくダメ!」

「なんでですか!? 理由を言ってください!」

エトセラが真剣な顔で俺を見つめる。

そ、それはその……えーと……。

……困ったなあ……。

と、そのとき!

「ニヤアーーーーー!」

「きゃっ!？」

パクッ!

「!!」

突然現れたモモが飛びかかり、エトセラをパクリと頭からくわえてしまったのだ!

「エ、エトセラっ！」

さつき美知が扉を開けたときにこっそりと入り込んだのか!?

モモの口からエトセラの脚だけがはみ出し、必死にもがいている。
じたばたじたばた。

「うわわわわわわわわわああっ!!」

とっさに手が伸びて、モモのしっぽを勢いよく握る。手加減せずに思いっきり握りつぶしてしまったため、モモの全身の毛が一瞬にして逆立った。

「ふぎゃああああっ！」

ビククリしてエトセラを吐き出すモモ。彼女は机の上にはてつと落ちた。

ほっ。……っとしたのも束の間。

「フウーーーーーっ!!」

「痛たたたたたたたあっ！」

逆上したモモに今度は俺が襲われ、顔中に爪をたてられた。ひっぺがして床に放ると、さっと着地してドアの隙間すきまから一目散に逃げて行く。

「くうううっ……」

か、顔中が痛い……。こりゃ血だらけだな。……っと、俺のことより!

「エトセラっ! 大丈夫か!？」

声をかけると、エトセラはゆっくりと身を起こして俺を見上げた。かなりビククリしたらしく目がまんまるだ。

「は、はい。なんとか……」

声が少し震えている。まだ動揺してる……ようだ。まあ、無理もないか。食われそうになる経験なんて、そうそうあるもんじゃない。まったく、モモのやつ……あとでお仕置きしちやる！

「……と、知也さん……」

「ん？」

呼び声に再び視線を戻すと、エトセラは服の裾すそを掴つかまみあげて、泣きそうな顔で俺を見つめていた。

「なんか、ベトベトしますう……」

「ああっ」

エトセラの全身は顔と言わず服と言わず、モモの唾液だえきでべちゃべちゃに濡れて、いつもはサラサラの髪までじっとりとして、先端から粘着質の液体が滴したたっている。

うーん……なんか、ちよつとエッチだ……。

「知也さん？」

「え？ あ、うん。そうだな、なんとかしないと……」

服は洗濯するとして、髪や身体のはうは……アレ、だよな……。

「……エトセラ？」

「はい？」

「えーと、そのー……お風呂入るかい？」

「お風呂……ですか!？」

俺の言葉に、エトセラは目をキラキラとさせて大きくうなずいた。

2

エトセラをタオルに隠して脱衣所に入り、そっと彼女を洗面台の上に置いた。

「え、えーとエトセラさ、その……服を……」

「はい」

素直にうなずいて、べたべたのドレスをスルリと脱いだ。水分を吸ったドレスが、足元にビチャリと落ちる。

わっ……。

白い素肌があらわになる。服の下には下着はパンツ1枚だけしかつけていない。

「そ、それも洗ったほうがいいかな……」

俺がちよっと上ずった声で言うと、エトセラは素直にパンツを下ろし、脚から抜き取っ

て服の上に置いた。これで完全に全裸だ。

うわあ……。

そう、まるで洗練された彫刻のような……、いや、フィギュアかな？

人形マニアの気持ちだが、ちよつとわかるような気もする。

ともかく……きれいだ。

たわわな胸にくびれたウエスト、小さくまとまったお尻。そして、アソコにはちゃんと薄くヘアもある。

それがすべてが見えてしまっているのだ。……が、エトセラは全然意にも介していないようで、堂々と立っている。

うーん……恥ずかしいって感情も覚えたほうがいいかもね。やっぱり、こういうとき、恥じらってくれたほうが可愛いよなあ。

俺のほうは、ミニサイズといっても、女の子の裸をこんな間近で見るのは初めてだ。心臓が口から飛び出しそうなほど、バクバクいってるのがわかる。

でも、あんまりまじまじと見てしまうのも悪いと思って、目を伏せるようにして俺も急いで服を脱ぐ。そしてトランクスを下ろしたときに、エトセラが「あっ」と声を上げた。

「知也さん知也さん！ ソレってなんなんですか？」

「は？」

エトセラがじーっと見つめているのは、もちろん俺の股の間にぶらさがっている……。
「わわっ！」

急いでタオルを巻いて隠した。

「そんなの私にはついてませんよ。男の人には、みんなついてるものなんですか？」

「え、あ、うん。そうだよ」

「ふーん。……ねえ、よく見せてくれませんか？」

そ、そんなこと、

「ダメ！」

「えー、それもダメなんですか？ どうして？」

「どうしても！」

「ちよつとだけ、ね？」

ああ、こうなったらまた、テコでも譲りそうにないぞ……。

「じゃ、じゃあそのうち見せてあげるよ。だから今日はダメ！」

「むうー。絶対ですよ。ちゃんと見せてくださいね」

「う、うん」

……とんでもない約束してしまったんじゃ……。

「そ、それより洗い場に行くよ」

「はい」

俺が手を差し伸べると、エトセラは洗面台から降りて手のひらに腰を下ろした。

いつも外出の際に胸に感じてる、ほにゃつとした感触が手のひらに当たる。それも、今回には生だ……。な、なんか、俺のほうが恥ずかしい……。

反対の手で洗面台の上に置かれたエトセラの服をつかみ、風呂場の戸を開いた。その途端に溢れ出る、むっとする熱気と白い湯気。

うちの風呂は結構広い。大人が2、3人入ってもまだ余裕があるくらいだ。風呂好きの父さんの意見が反映されているわけだが、これには俺も大賛成。風呂は広いにかぎる！
バスマットのの上にそつとエトセラを置いて、そのままちよつと待つてもらおう。

俺は洗面器にお湯を汲んで石鹸の泡をたてると、エトセラの服を手早く洗った。もちろん、ちつちやなパンツも一緒に。こつそりと観察しながら。

それからもう一度脱衣所に出て、洗ったものを乾燥機の中に放り込んだ。少ない、というか小さいものなんで、風呂から上がる前に乾いてしまうだろう。

すぐに洗い場に戻り、壁に押しやられているバスチェアを手繰りよせて、その上にエトセラを立たせた。

「座れる？」

「はい、大丈夫です」

エトセラが椅子の上に正座する。真ん中には水切り用の穴が開いているので、落ちないように気をつけなきゃいけない。俺なんか座ると片方の尻つぺたがはみ出してしまう程度のものだが、エトセラにしてみればやはり大きいのだ。

それでは……えーと、まずはシャンプーかな？

女の子なんだから、俺みたいに石鹸でってわけにもいかないだろう。美知の使っている「サラサラヘアー」用を拝借しようと思いい手に取ったが、どうも残り少ない。まあ、エトセラには指先に一滴くらいで十分だけど。

こういうとき、小さいと安上がりで便利かもしれないなあ。ピグマリオンが人間になるより、人間がピグマリオンになったほうが、資源問題なんかも一発で解決だろう。

さて、シャンプーで髪の毛の汚れを流したら、次はいよいよ……。

「んじゃ……、身体を洗うけど……」

洗面器に泡をたてながら言うと、エトセラはこくんとうなずいた。

えーと、それじゃ……。

「背中……洗うよ」

俺の言葉に「はい」と返事して、エトセラがクルリと背中を向ける。

タオルに泡をつけると、それで人差し指を包むようにして、指の腹でエトセラの小さな背中を軽くこすってやる。

「ん……」

エトセラのかすかなうめきが、風呂場にこだまして大きく響く。

「あ、やっぱり痛いかい？」

「え、いえ。大丈夫です……」

しかし、俺の使っている垢すり用のタオルじゃ、やっぱりエトセラの肌にはキツイかもしれない。下手にこすって傷つけてしまってもまずい。

俺は、タオルを指からはずした。

「あのさ……指で直接洗ってもいいかな？」

そう言つて、指を一本突き出した。エトセラはその指をじっと見つめてから、ゆっくりとうなずいた。

手のひらに泡を塗りたくり、そろそろとエトセラの背中をこすった。慎重に慎重に。あんまり力を入れすぎないようにしないと。かといってあまり軽すぎると洗ったことにならないし……。んー、これは結構むずかしいぞ。

エトセラの肌は、つるつるとしていて俺なんかとは全然違う。女の子って、みんなこうなんだろうか？

指をくりくりと回すようにして、背中から肩、腰、腕まで念入りに撫でてやった。

ときどき、エトセラは「んっ」とか「くふっ」とか声を上げるので、俺はそのつどビク

りとしてしまう。でも……なんか楽しい……。あ、いやいや！ そーじゃなくて！
さ、さて、次は……。

「ま、前、向いて……」

「は、はい」

再びクルッと回って、俺のほうを向くエトセラ。ま、真正面を向かれると、やっぱりちよつと恥ずかしいよなあ……。

お願いだから、そんなに俺の顔をじーつと見ないで……。

俺はおそろおそろ指を伸ばして、ちよんと胸の先端に触れた。

「んクっ……」

エトセラが、ピクリと身体を震わす。

「あ、ゴメン！」

「だ、大丈夫です」

再び指を伸ばし、小さな、ピグマリオンサイズにしては結構大きめな（だと思われる）胸をゆっくりと撫でてやる。

それはとても柔らかくって、ひと口サイズのマシユマロかゼリーなんかをつついてる感じだ。しかし、洗おうとすると泡ですべってツルンと指先から逃げてしまう。それを追いかけるようにして指を動かすと、プルプルと胸が震えてそのたびにエトセラが小さく声を

洩もらした。

それが終わると、残った泡でお腹なかや、すらりとした脚を洗ってやった。さてと、終わり……かな。

手を引こうとすると、エトセラが俺を見上げてつぶやいた。

「まだ……残ってますよ」

「!？」

……た、確かに残ってるけど。で、でも……。

……洗っていいもんならどうか？。

エトセラはじーっと俺のこゝを見つめている。顔が少し赤いのは、風呂の熱気のためか、それとも……。

ま、まあ、エトセラがいつて言うなら……。

俺は再び手に泡を塗り、椅子の上に立つエトセラの太股の間に、そろそろと人差し指を差し入れた。そして指の腹を上に向け、脚のつけ根に押しつける。

ふにりっ。

「はっ……」

エトセラが、短く吐息を吐いた。

な、何か指に当たってるけど、小さすぎてよくわからん……。

指の先だけをクニクニと折り曲げるようにして、股の間を撫ぜる。指が前後する度にエトセラが小さく息を洩らし、それが俺の手のひらに当たってこそばゆい。

「ん……んん……」

俺はエトセラのそのようすに見とれて、しばらくそのまま指を動かし続けていたが、はつとして指の動きを止めた。

そ、そうだ。俺は身体を洗ってやってるだけだぞ！

「さ、さてと、もうきれいになったかな？」

わざとらしくおどけて言っあわてて指を引っ込めようとすると、しかしエトセラがきゅつと太股に力を入れて指をはさんだ。

「エ、エトセラ？」

ビツクリして彼女の顔を見ると、ぽおとした表情で目の焦点シヤンが合っていない。

そして俺の指にもたれかかり、今度は自分で腰を指先にこす擦りつけ始めた。

「ん……、んあ……」

エ、エトセラ……。

俺もなんだか頭がボーツとしてきた。熱気に当てられたのか、正常な判断力が失われている感じだ。

エトセラの胸が、俺の人差し指の中ほどあたりに押しつけられている。プニプニとした



その感触の中に、小さな突起が感じられるのだが……。これってその……さきっぱの……。それに指の先にも、柔らかくて温かな感触の中に、ほんの小さなしこりみたいなものがあたっている。よく神経を集中しないとわからないくらいの微妙な感触だけ。

え、えーと、これは確か……。

つちやつつちやつつちやつ……。

石鹸の泡だけではない、なにか別の液体による粘着音が響いてきた。

エトセラの動きが激しくなる。ゆっくりと擦りつけるような動きだったのが、小刻みに揺れ出した。

「はっ……んんっ、あっ……！」

それに比例して、声も1オクターブ高くなる。いつもの囁くささやくような声とはまるで違う声だ……。

「んっ！ んあっ……ああっ！」

そして、ひときわ大きく声をあげたかと思うと、ギョツと俺の指にしがみつき、全身をフルフルと震わせる。

「……………」

俺が茫然と見つめる中、昇りつめたエトセラはふっと脱力して俺の手のひらの上に倒れ込んだ。

「……はあ……はあ……」

「……エトセラ？」

俺の呼びかけにも答えず、エトセラは横になったまま全身で荒い息をしている。

仕方ないので、俺は手早く自分の身体を洗い、そのまま動かないエトセラを手のひらの上に乗せて、落とさないように注意して湯船に入った。

その間も、エトセラはぼーっとしたままだ。

はあ……大丈夫かな？ やっぱ無理矢理にでも止めるべきだったんじゃないか……。

……今さら悔やんでもしょうがないよな……。

そして、しばらく温まってからそろそろ上がろうかと湯船を出て、脱衣所の扉を開けた。すると、そこには……。

「!?」

美知がいた。

「……………」

どうやら、歯を磨くために洗面台を使いに来ていたようだが、振り返ったその顔はいつものやのように青ざめている。

しかも、その手の中に持っているのは、エトセラの小さな服と小さなパンツ。

「おまえ……それは……」

どうやら、乾燥機を開けて中を見てしまったらしい。

「……………」

「いや、あの……えーと……」

俺がしどろもどろと言いつつ、美知の視線がゆっくりと下に降り、俺の手の中のものへと移った。

そこにはぐったりとして、人形のように動かないすっぱだかのエトセラが……。

しかも俺は下半身丸出し。ちなみに、さっきのエトセラのようすを見たおかげで、ちょっと大きくなっていたりする。

「あ……あのな美知……」

だだだだっ！

エトセラの服を放り出し、無言のまま廊下へ駆け出していく美知。

こ、これはもしや……。

そして、扉の向こうから美知の叫びが聞こえた。

「おかしーさん！ お兄ちゃんがあっ！」

3

部屋に帰った後も、エトセラは魂でも抜けちゃったみたいにとボーツとした感じで、しば

らくするとフラフラと箱の中に帰っていった。

ほ、本当に大丈夫だろうか!?

俺のほうは、下に降りて家族と顔を合わせるものちよつとためられるので、仕方なくそのままベッドに入ってしまった。

家族もそうだけど、明日の朝、エトセラとも顔を合わせづらいよな。やっぱり、アレはちよつとまずかったよなあ……。

……後悔先に立たず。

しばらく布団の中で自己嫌悪と、脳裏から離れないエトセラの白い肌にもんもんとしていたが、いつの間にやら夢の世界へと引き込まれていった。

そう、夢の世界へ。

……夢……。

……。

「おいでませ！ 夢の世界へー！ー！ー！」

突然、あたりに明るい声が響いた。

……。

「……なんや、ノリ悪いなあ」

いや、茫然としてるんだが……。

気がついたら目の前に見知らぬ女の子がいて、いきなり関西弁で話しかけられたら誰でも驚くだろう。しかも、ヘンな格好してるし……。

「あっ！ 今、ヘンな格好や思ったやろ!？」

「え？ いや、そんなことは全然っ!」

鋭い……。でも、やっぱりヘンな格好だよな。猫の着ぐるみ着てるなんてさ。

……猫？

あ！

「もしかして君がミンティー!？」

「なんや、気づくの遅いわっ!」

そういや、最初にエトセラが夢の中に現れたときに、関西弁の娘がひとりいたなあ。

……って、なんで関西弁なんだろ？

俺はミンティーをまじまじと見た。着ぐるみって言うっても遊園地のキャラクターみたいなのじゃない。最近はやりの着ぐるみパジャマっていうのかな？ 顔の部分が空いててちゃんと本人の顔が見えている。

んー、よく見ると結構可愛い娘じゃないか。

……ん？

「あれ？ でも君もピグマリオンなんだろう？　なんで身体が……」

そう、俺と同じサイズなのだ。

「だあかあ、夢の世界や言うたやろ」

「夢の世界？」

あたりをグルリと見回す。見た感じどう見ても俺の部屋である。ちなみに俺もミンティーもベッドの上に座ってる。

そーいや、俺、寝てたはずだよなあ。

「夢っちゅうのは人間が寝とるときに、無意識にする“想像”やろ？　つまり、夢の世界は想像の国とは比較的近い構造を持つとんねん。だから、ピグマリオンはこうして夢の中に入ることも可能なんや」

「ふーん」

「ま、ちよいちよいできるもんでもないんやけどな。あの“箱”みたいに、月の力なんか関係してんねや」

なるほどねえ。つまり今、俺は寝てるわけか？

なんか、全然実感ないぞ。

「……で？　君はなんで俺の夢の中にいんの？」

「ん？　エトセラがあんたのこといろいろ自慢しよるでな、どんな奴か見に来たんや」

「じ、自慢？」

エトセラ、なんて言ってるんだらう？
ちよつとドキドキ。

「やさしゅーて、かっこよーて、何でも知つとるんやーって」

おおっ！ エトセラ偉い！ 明日ほめてあげよう！！

「でも、ちよつと優柔不断で頼りないとも言うてたけどな」

ガクッ！

エ、エトセラ、そりやないよ。まあ、否定できないけど……。

「それになあ……」

急に声のトーンを落とし、ミンティーはじつと俺の顔を見つめた。

な、なんだろ？

「……あんた、今日エトセラになんかしたやろ？」

「!!」

え、えと……あの……。

「な、なんでそんな……」

俺があたふたしてるようすをジーンツと睨んでいたミンティーだが、すぐに口元をゆるめてニヤッと笑った。

「別に責めとるわけやないで。今日こっちから帰って来たエトセラが、なんやパワーツとして心ここにあらずって感じやったから、これはなんかあったな思うたんやけど」
……確かにありました。

「あんたも結構スミに置けんなあ」

「い、いや！ あれはお風呂に入れて身体を洗ってただけで、その後の展開は不可抗力であってね、それで……」

「だから、責めてるわけやないっていうとるやろ？ ただな……」

そう言って、ミンティーは膝を立てて、じりつと俺ににじり寄ってきた。
ギシリと音を立ててベッドがきしむ。

「な、なに？」

ほとんど、ぶつかるといらいに顔が近づく。

すると、ミンティーはにーつと白い八重歯（キバ？）を見せて笑い、俺の頬をぺろりと舐め上げた。

「なっ!？」

思わず身を引く俺。な、なんかミンティーの目、あやしく光ってるよ……。

「ちいーつとばかり、エトセラの幸せ分けてくれへんかと思てなあ」

と言うが早いか、頭の猫耳付きフードを後ろに落とし、そのまままるで脱皮するかのこ

とくスルリと着ぐるみを脱いでしまった。

「わわっ！ ちょっとミンテイー？」

着ぐるみの下から現れたのは、まぎれもなく女の子の身体。しかも全裸、下着すらつけていない！

「ふにゃーん」

ミンテイーは猫のように鼻を鳴らして、突然ガバツと俺に飛びついてきた。

「うわっ！」

俺はベッドの上に押し倒されてしまい、上にのしかかったミンテイーにペロペロと首筋を舐められた。

ペロペロペロペロ。

わはっ、く、くすぐりたい！

舌の動きは次第に首筋を下りていき、俺の寝巻代わりのシャツを捲くり上げて、胸のほうまで舐めだす。そして、それはさらにお腹なかからへそへと移動し、さらにずーっと……。

「ミ、ミンテイー!？」

俺のトランクスの前のふくらみに、ミンテイーが頬ほおずりする。そこは、すでにテントを張っていて、ミンテイーが一気にトランクスをズリ下げると、ソレが勢いよくはじけ出た。「みやはっ！」

それを見たミンティーが、なにやら楽しそうな声を上げる。

「ふーん。なんや、面白い形しとんなあ」

「な、なんだ、見たことないのか？」

「あつたりまえやろ！　うち、男とこないなことしたことないわ」

「いや、やけに積極的だから……」

「んふふうー、それはなあ……」

ミンティーが、何やらあやしげな笑いをしたとき……。

「ああーっ！　ミンティー、何してんのよ!!」

突然聞こえた女の声に、飛び上がるほどビックリした。

まさかエトセラ!?

おそろおそろ声のしたほうに顔を向けると、部屋の中央に見知らぬ女の子が立っていた。ボーイッシュなショートカットの娘で、なんか『女ピーターパン』って感じの格好している。しかも、これまたエトセラやミンティーに負けず劣らずの美少女。

「なんや、ピムも来たんかいな」

ミンティーが顔を上げ、現れた少女に向き直った。

ピム？　確か、エトセラの3人の友達の、もうひとりだったかな？

「突然いなくなっただと思つたら、こんなところで何してんの!？」

顔を真っ赤にしながら、ミンティーに詰め寄るピム。

「ん？ なんや、ピムもまざりたいんか？」

「そ、そんなこと言っていないでしょ!？」

「遠慮するなやって」

ミンティーが笑いながらゆらりと立ち上がると、ピムはじりつと後ずさりした。

「ミ、ミンティー……もしかして、発情モード入っちゃってるの？」

「んっふっふっ！ ご名答っ！」

ガバツとミンティーが一気に襲いかかり、ピムを押し倒してしまった。

「やっ！ ちよつとミンティー！ やめなさいって!!」

「ふみやあつ」

電光石火の早業で、あつというまにピムの服を脱がして、丸裸にしてしまった。

おおっ！ こちらも結構胸がおつきくてスタイルがいい。ピグマリオンってみんなこん

なののか？

「やだもお！」

ミンティーは後ろからピムの身体を羽交はがい締めにして、俺に視線を送る。

「なあ、身体は大人やろ？ でもな……」

「!!」



わわっ！ そんないきなり！

「ピムの秘密大公開やで！」

勢いよく、ガバツとピムの脚を広げてしまったのだ。

「や、やだ！ ちよつとミンティー!!」

「どや？ ここはまだお子様やろ？」

……た、確かに。

ピムのそこにはまだ毛が生えておらず、赤ん坊のようにツルツルなのだ。

「も、もうやだー！」

ピムは顔を真っ赤にして、手で顔をおおってしまった。

「そんなもなあ……」

ミンティーは脇の腹から手を回し、ピムのツルツルのアソコへ手を這わせた。

「こうすると気持ちよくなるんやから、やっぱりもう立派な大人やねえ」

「や、やん！ ちよつとお！」

はじめのうちこそジタバタともがいていたが、ミンティーの手が2度3度上下するうちに、ピムの抵抗もしだいに小さくなって、荒い息をあげはじめた。

「や……ミンティー、やめようよお、こんなの不毛だよお……」

「毛がないのは、あんただけやろ」

うまい！　ざぶとん1枚！

ミンティーの手の動きが次第に早くなり、その頃にはもうピムも完全にミンティーに身体を預けて、あえぎ声をあげるだけになってきた。

「ん……あ、ああっ……」

「なんや、いつもより感じてるんちゃう？　人に見られてるからかいな？」

……普段からそういう関係なのか？

するとミンティーは、俺の考えを見透かしたように、

「うち、発情モードに入っちゃってまうと、歯止めがきかんのや。そういうとき、ピムにこうしてハケ口になってもろとるっちゅうわけなんやけどな」

……ピムも難儀なんぎなことに……。

「安心せい。エトセラには指一本触れとらんから。なんにも知らないあの娘こじゃ真面目すぎて遊びにならへんやろ？」

……ま、まあ確かに。

すると、ミンティーは手の動きを止め、ピムに何事か囁ささやいた。

「……な、ええやろ？」

とろんとした目をして、こくりとうなずくピム。

そして、今度はふたりで立ち上がって、ベッドの上の俺へとにじり寄ってきた。

ちよ、ちよつと……。

「あ、あのさ……ふたりとも……」

こんなところ見られたら……。

「エトセラか？ 大丈夫やって。あの娘、いちど寝たら朝までは絶対起きへんから」

いや、しかし……。

「だいたいなあ、もしかしたらうちかピムが、あんたのパートナーやったかも知れへんのやで」

え？ それってどういう……。

「最終的にエトセラに決まるまでは、うちら三人が候補やったんや」

「そ、そうなの？」

ミンティーの後ろのピムに向かって聞くと、彼女はこくんとうなずいた。

そ、それは知らなかった。

「最後にはジャンケンで決めたんやけどな」

ジャ、ジャンケン!? そんなもんで決めていいのか？

「ジャンケンいうても馬鹿にできへんのやで。運も、運命の齒車の中じゃ重要な位置を占めとるわけやからな」

それはまあ、そうかもしれないけど……。

「だからあ、エトセラばっかりやなく、ちよつとくらしいうちのことも構ってくれても罰ばちは当たらんのかな？」

そう言つて、にまあつと笑うと、ミンテイーはさつきからすつかり大きくなりっぱなしの俺の股間こかんのモノに顔を寄せ、ぺろりと舐め上げた。

「ひゃっ！」

「なんや、女みたいな声だすなあ」

だ、だつて……、こんなことされたの初めてなんだからしようがないだろ。

「じゃ、こんなのどや？」

ミンテイーはピムに目で合図して、それぞれ左右の俺の脚にまたがった。

そして俺のスネに、自分たちのアソコをこすりつけながら、身をかがめてふたりで両側からペロペロと舐めはじめ。

「うわっ！」

ふたりの舌が、俺の肉茎のまわりを縦横無尽じゅうおうむじんに動きまわる。

な、なんか2匹のなめくじが這いまわつてるような……。

ペロペロ、ぴちゃぴちゃ……。

舌の動きに連動するかのようになり、脚に擦り寄せるふたりの腰の動きも早くなってきた。

「ん、はっ……んア……」

「やっ……んん……、ああっ！」

「はあ……はあ……」

部屋の中には、3人の息づかいと湿った音しか聞こえない。そして、ふたりは同時に俺の脚にぎゅっと強くアソコを押しつけて、身体の動きを止めた。

「んん！」

「あっ！」

と、その瞬間、俺のほうも限界が来た。

も、もう……！

「くっ！」

びゅくっ！

背筋を電流が走るような感覚。そして、先端から熱いほとばしりを噴き上げる。

「きゃっ！」

ほとんどが、そのとき近くに顔を寄せていたピムの顔にかかってしまった。

はあはあ……。俺は脱力して、ベッドの上に身体を投げ出した。

「な、なんかベトベトするよお……」

ピムが泣きそうな顔で、顔についた精液をぬぐおうとする。

すると、ミンティーが舌を突き出し、まるで子猫がミルクを飲むような音をたててピム

の顔を舐めはじめた。

ぺちやぺちやぺちやぺちや……。

「なんや、へんな味のミルクやなあ……」

ピムの顔を舐め上げてきれいにすると、クルリと俺に向き直る。
「でも、クセになるかも知れんで」

そう言うのにんまりと笑い、再び「俺」の先端に吸いついてきた。

「あー、堪能したわあ！ ご馳走さんなあ」

ミンティーが、本物の猫のように背伸びした。

あ、あのな……。

絞っても何も出なくなるまで吸い尽くされた……。

「ピムかて結構楽しかったやろ？」

「んー、そーだね。いい運動にはなったよ」

ははは……結構、あっけらかんとしてるなあ……。

「ああ、そうや。このことは絶対エトセラには内緒やで」

口到人差し指を当てて、しいーっとポーズをとるミンティー。
そんなこと、言われんでもわかってるわい！

「あの娘すつごいやきもち焼きやる？ バレたらどうなるかわからんで」

「なんだよ。自分から襲ってきたくせに……」

「襲ってきたなんて人聞きの悪い。自分かて気持ちえかったやる？」

そ、それはまあ……。

「それにな、浮気はバレなえーんや」

「……そうかなあ？」

「そやで。女はな、ホンマのことなんか知りたないんやで。正直に言われるなんて、そんなモン望んでへんて。だったら、嘘ついてたほうが円満のままやる？」

そりやまあ、そうかも知れないけど……。

「そんなかわり、いちど嘘ついたら絶対貫つらぬき通さにゃあかんで。墓の中まで持っていきや真剣な顔で、じつと俺の目をにらみつけるミンテー。

なんかとんでもないことになってしまったな……。

「そんじゃな、うちら帰るわ」

突然立ち上がり、眠たそうにあくびをするミンテー。するとピムも後に続く。

え？ ちょっと。

「いい夢みーや」

「じゃあねー」

「お、おい！」

いきなり現れてやりたいことだけやって帰るとは、なんて勝手なやつ！
うおっ！　なんだ!?　突然眠気がっ!!
ね、眠い……。

そして、俺の意識はそこでききなり暗転したのだった。

4

ちゅんちゅんちゅんちゅん……。

……朝だ。

カーテンの隙間すきまからさわやかな陽光が差し込み、窓の外ではスズメが楽しげにさえずっている。実に清々すがすがしい朝である。

……が、俺の心はあまり晴れやかではない。

エトセラと、どんな顔して会えばよいのやら……。風呂のこともしかり、夢の中でのこともしかり……。

と、ベッドから起き上がり、ひとり思い悩んでるそのとき。

「知也さん、おはようございます！」

机の上から元気な声が響いた。

見ると、エトセラがきちんと正座して、ニコニコとこちらを見ていた。

「あ、お、おはよう」

なんだ。いつもと変わらないエトセラだ。

……でも、昨日のことは……。

「……？ どうしたんですか？ 私の顔をジーツと見たりして。何かついてます？」

「え！ い、いや、なんでもないよ！」

も、もしかして覚えてないんだろうか？

そういや、昨日はなんか飛んじやってるみたいだったしなあ……。

「ところで知也さん」

俺の心配をよそに、エトセラは明るく立ち上がった。

「ん？ なに？」

「実は、紹介したいお友達がいるんですけど」

「……え？」

エトセラの友達ってことは……。それって……。

「ピムだよー！」

「わあっ！」

突然の声にビックリして振り向けば、本棚の上にピムが腰かけていた。
「うちもいるで」

「!!」

耳元で囁いたのは、いつの間にか肩に乗っているミンティー。

「……夢の中ではどうもな、知也はん」

わっ！ 馬鹿っ!!

あわてる俺のようすを見て、ミンティーはニヤニヤとしている。

「あれ？ もう、お知り合いなんですか？」

エトセラが首を傾げる。

ほ、ほら！ どうすんだよ！

「なんや、最初の日には3人で一緒に会ったやないか」

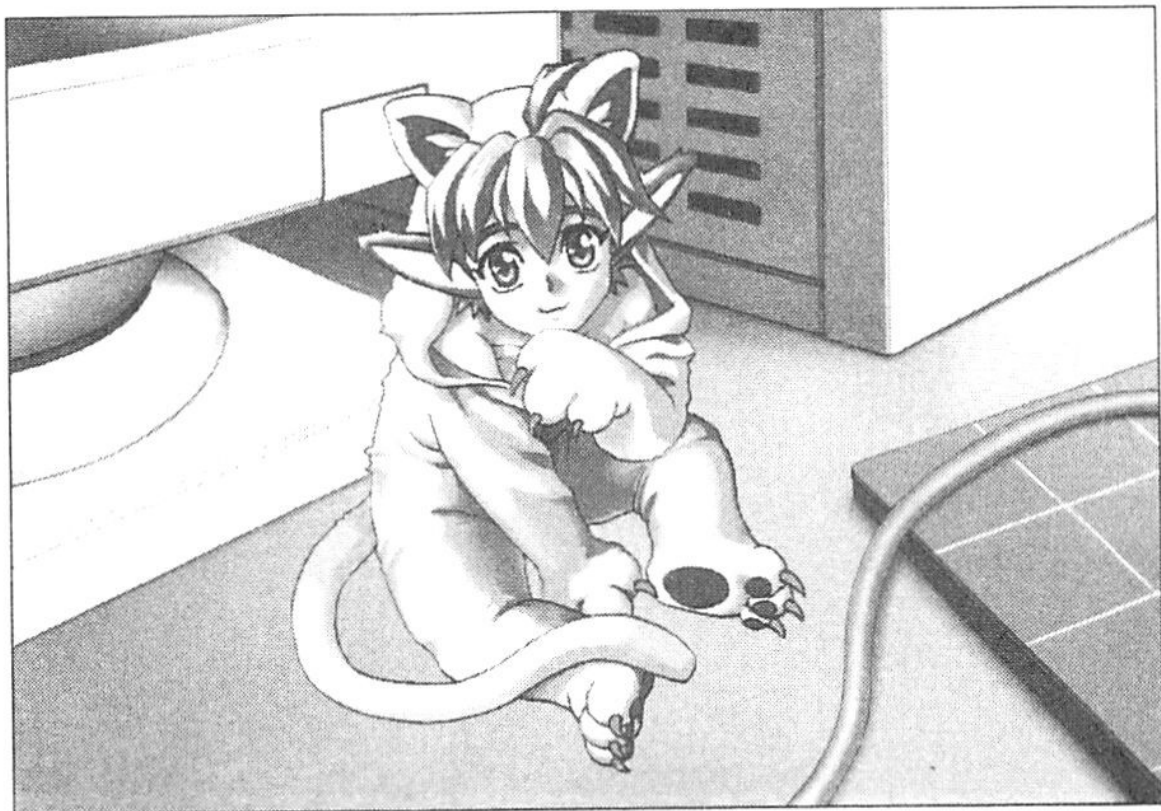
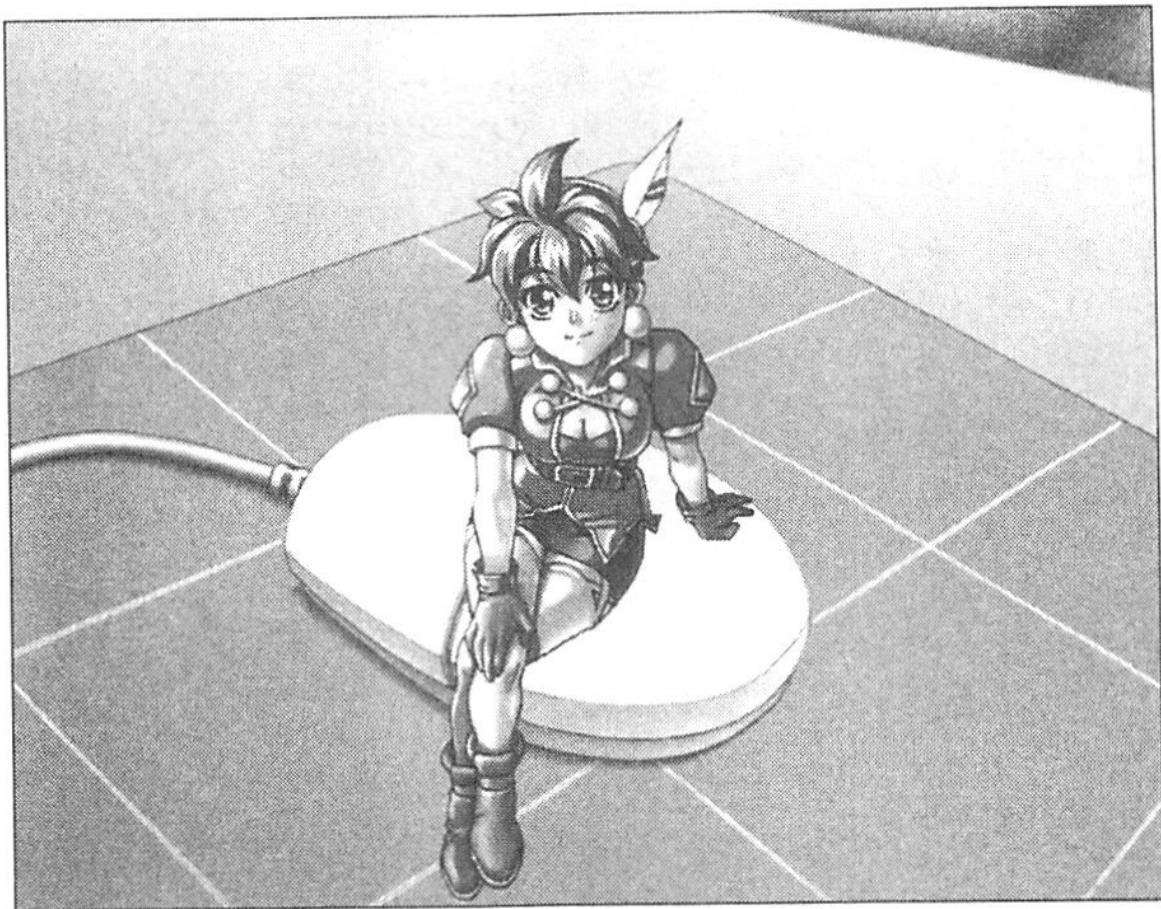
「あ、そうだったわね」

思い出して、手をぼんと打つエトセラ。……どうやら納得したようだ……。

ミンティーが、俺の耳へ口を寄せて囁く。

「ええか、昨日言ったこと忘れるんやないで」

は、はい……。



「あ、それから、もひとつな」

え？

「エトセラな、昨日あんたとあったこと、なんか勘違いしとるみたいやで。よかったな」
勘違い？ どういうこと？

するとエトセラは、ふと何事か思い出したらしく、「そうだ」と言っつて俺の顔を見た。

「知也さん、お風呂つて本当にとつても気持ちのいいものだったんですね。今度また一緒に入りましようね」

ははは……、気持ちいいって……。

俺は、笑ってうなづくしかなかった。

第5章 愛のお勉強はひとりで

1

「愛って、とっっても素晴らしいものなんですね！」

その日は店が定休日、午後のひとときをベッドに寝そべって、のんびりとマンガを読んでいた俺は、突然のエトセラの言葉にページをめくる指を止めて顔を上げた。

「……は？」

視線の先には、さっきまで机の上で静かに本を読んでいたはずのエトセラが、なにやら目をキラキラとさせているのだった。

な、なんだ……？

「すべての存在を超えるもの、それが愛です！ 愛のない人生は死んだも同然なんです！」
そう言って、エトセラはお星さまのいっばい浮かんだ瞳で、遠くのお空を見つめている。
キラキラキラキラキラキラ。

「エ……エトセラ？」

ちよ、ちよつと……突然どうしたんだ!?

俺はあわてて起き上がり、エトセラの読んでいた本を手を取った。手のひらサイズの小さな本。文庫本だな。タイトルは、『気になるアイツはMy Darling!』。

……なんだこりゃ?

表紙には少女漫画タッチの絵で可愛らしい女の子が描かれてて、そのまわりにハートがいっぱい飛んでいる。表も裏も全体にピンク色のデザインでまとめられた本で、これはどうやら少女向けのジュニア文庫のようだ。

パラパラと中を見ると数ページごとにイラストがはさんであって、その内容から察するに、どうやらコッテコテの純愛ラブストーリーり物らしい。

最近は可愛い表紙で実はエッチな内容だったりする本があったりするが、これはそういった内容でもないようだ。どっちにしても、俺にはまったく見覚えのない本だ。もしかすると、美知の部屋のもものが紛れ込んでいたのかも……。

「あの一、エトセラ……これって……?」

「お互い好きなのに、意固地いこじになって憎まれ口を叩いてしまうふたり。いつもいつも喧嘩ばかりしているけど、次第に自分の気持ちに正直になっていく……。そして! そしてついに夏祭りの夜に、ふたりはお互いの気持ちを打ち明けるんですっ!」

……聞いちゃいな……。

完全に、向こうの世界に行ってしまったてるらしい。

おーい、帰ってこーい！

「やっぱり、この世界でいちばん大切なのは愛！ 愛は地球まで救っちゃうんです！ そのうですよ、知也さん？」

「は、はは……かもね……」

「そうですよ、絶対です！」

ぐぐつと拳こぶしを握り締めて力説されてしまった。

どうやら、モロに本の影響を受けてしまったらしい。

これはヤバいぞ。普段、根が真面目な分、いったんハマるととことん行ってしまいう可能性がある……。

「愛は惜しみなく与えるもの。人生とはそれすなわち愛！ 汝の隣人を愛せよ。愛情満つれば粗食もうまし。青は愛より出でて愛より青しです！」

うーむ……ちよつと間違つた知識もまじってるな。とくに最後のあたり……。

しかし、そこでエトセラは、その夢見るような表情をふいに曇らせた。

「でも……この本には、このあいだ山で見た行為について載ってないんですよ」

「え!？」

山でって……。やっぱり「アレ」だよな？

「知也さん言いましたよね？ あれは、”恋愛の最終段階”だって。でも、この本の物語では、そこまで行かないんですよ」

そう言つて、不思議そうに首を傾げる。

ははは……。

後ろのほうのページをめくると、主人公の女の子とそのボーイフレンドらしい男のキスシーンのイラストが載っていた。なるほど、これがラストシーンか……。

まあ、確かにこの手の本じゃ、”その後”の展開は書かれはしないだろうけど……。

「どうしてなんででしょう？ この物語には、まだ続きがあるってことですか？」

「いや、これはこれでちゃんとした恋愛であつて……」

「じゃあ、このあいだ見たものは別の愛なんですか？」

真剣な顔で、ずいっと身を乗り出す。

「べ、別と言えば別だけど、この延長線上にあるのも確かなわけで……そういうことがまったくないということもなきにしもあらずだけでも……」

「それじゃ、よくわかりませんよお」

しどろもどろの俺の言葉に、ちよつと怒つて頬をふくらませてしまった。

あうう……俺だつてよくわかんないよ……。

「じゃあ、やっぱりあそこにある本が、”そっちの恋愛”について書かれたものなんでし

「ようか？」

そう言っつて、エトセラは俺の腰掛けているベッドの下の隙間を、横目でチラつと見た。
え!?

「……あそこの本つて、もしかしてベッドの下の……!？」

「はい、あの、裸で男女が抱き合っつて……」

「わあー！ わあー！」

しまった、見られた！ 例の重要機密書だ。エトセラが簡単にベッドの下に出入りできることを忘れていた！

「あれつてあのときの行為と同じですよね？ でも、あれ以外にもふたりで向き合つたつり、女の人が上になったり、いろいろな格好が……」

「ちよ、ちよちよちよつと、エトセラっ!!」

ま、まずい！ なんか、非常にまずいことになつてるような……。

「なんですか？」

あわてふためく俺の顔を、エトセラは不思議そうに見ている。

「い、いや、だからさ、あれは……そう、エトセラにはまだ早いから……」

「早いつつてどういうことですか？ じゃあ、いつになつたらいいんです？」

「それはだから、もう少し大人になつてから……」

「私、子どもじゃありません！」

「え、えーと……」

困った……。これはどうすれば……。

そのとき俺の頭に思いついた答えは、ただ一つしかなかった。すなわち戦線離脱！

「そ、そうだ！ 俺、配達があるの忘れてたよ！ ちよつとこれから行ってくるから！」
言うが早いか、俺は駆け出すようにして扉へ向かいノブを回した。

「じゃあ、俺のいない間、気をつけてね！」

「あ！ ちよつと、知也さんっ！」

背中にかけられたエトセラの声を無視して、ボタンとドアを閉めてしまった。

……ふう……。

ドアを背に、大きく息を吐く。

これは困ったぞ……。いや、もとはといえば俺が悪いんだけどさ……。エトセラの『試験』に、影響が出ないだろうか？

……と、そのとき。

「あれ？ お兄ちゃん、自分の部屋の前で何してるの？」

突然の声にギクリとしてそちらを見ると、部活から帰って来た美知が、階段を昇って来たところだった。

「あ、いや、なんでもないよ。忘れていた配達に行こうかなと……」

「ふーん……」

いぶかしげに俺を睨めつける美知。あの人形の一件以来、家族の俺を見る目がどうもおかしい。なんか、じっと観察してるような感じがするのだ……。母さんなんか、俺の顔を見て突然涙ぐむし……。

くううつ！ 俺は、何もやましいことなんかしてないぞおっ！

「……で、お母さんたちは？」

「ん？ ああ、ふたりとも買い物に行ってるよ。隣街のデパートまでだから、ちよつと遅くなるんじゃないか？」

「ふーん……そうなんだ」

なにか意味ありげにつぶやく。

……なんだ？

美知は、俺の前を横切って自分の部屋に向かおうとしたが、ふと足を止めて振り返った。

「あ、そーだ、シャンプーきれてただけどさ、お兄ちゃん買って来てくれない？」

「え？ そんなもん自分で買ってこいよ」

「いいじゃない、外に出るついでにさあ。シャンプーがなくちゃ今日、髪洗えないよ」

「石鹸でも使えばいいじゃないか」

「やーよ、お兄ちゃんじゃないんだから。そんなの使ったら髪が傷いたんじやうもの。ちゃんと、美知がいつも使ってるの買って来てね。『サラサラヘア』のやつ」

こいつ、いっちよまえに色気づきやがって……。

「でも、あれって駅前薬局まで行かなきゃ売ってないんだろ？」

「だから、配達の手いでに寄って来てくれればいいのよ」

「ついでって、俺は仕事でだなあ」

「じゃあ、よろしくね」

俺の言葉をまったく無視して、さっさと自分の部屋へとひっこんでしまった。

……手間賃は、ちゃんともらうからな。

仕方なく店に降り、配達のパールケースを抱えて外へ出た。自転車の荷台にそれを縛りつけながら、ちよつと気になって2階の窓を見上げる。向かって右側が俺の部屋、その隣が美知の部屋の窓だ。

「……エトセラを美知とふたりきりにしちゃって大丈夫かな？」

ふと心配になったが、今のあの調子では連れて行くのもちよつと困る。

まあ、今までもちゃんと見つからないようにやってきたんだから大丈夫だろう。

「できるだけ早く戻つってこよう」

俺は小さくつばき、自転車を発進させた。

でも、それまでにエトセラの質問の答えを考えておかなきゃいけないなあ。
あ、それから……。

エッチ本の隠し場所も変えないとな……。

2

一方その頃……。

部屋にひとり残されたエトセラは、かなりご立腹のようすであった。

ぷうつと頬をふくらませて、机の上から知也の出て行ったドアをにらみつけている。

「もう、知也さんったら！　なんで、ちゃんと教えてくれないのかしら!？」

足元に転がるビー玉をポコッと蹴飛ばすと、それはコロコロと机の上をすべって消しゴムに当たって止まった。

「いいですよーだ。私、自分で調べますから！」

つかつかと机の縁まで行くと、机の脚を伝ってゆっくり床へと降り始める。

「んしょんしょっ」

ずりずりずりずり。

なにやら危なっかしいことこのうえないが、しかしまあ、もう何度もやっているのだから慣れたものである。

それにしても、両足を絡めてからずり下がる姿はあまり人に見せられたものでもない。

「……よいしょっと！」

なんとか降りきるとほっと一息つき、すぐさまベッドの下へと潜り込んだ。

ここは光が届かないので結構暗く、ちよつとした洞窟探検の気分である。部屋の中とはいえ、真つ暗な所に入っていくのはさすがにちよつと恐い。なにか未知の生物……とまていかなくても、またモモあたりが潜んでいたら大変だ。

おそろおそろ奥へと進むと、目的の物が見えてきた。

「えーと……あ、あつたあつた」

奥のほうに、数冊の本が積まれている。厚さはそれほどないが、幅がちよつと広い本。知也のいう極秘機密書、ようするにエッチな本である。

「う……う……う……んつと……」

いちばん上の1冊を抜き出し、ずるずるとベッド下から引っぱり出した。

表紙には水着姿の女性がニッコリと微笑んでいる。モロに裸の娘では、さすがに買いにくいという配慮だろうか？ どっちみち、店員にはバレバレだろうに……。

その表紙をめくると、同じ女性が今度は下着1枚でこちらを見つめている。

「わっ……」

ページをめくるごとに、モデルの女性は下着を脱ぎ大胆なポーズを取り始める。大きな

胸を自分で寄せてみたり、よつんばいになってお尻を突き出したりしている。

そうしてしばらくページをめくっていると、今度は別の人間が登場する。ピッチリとしたビキニパンツ一枚の男が女性の身体をまさぐっていた。

よくわからないが、なんだか頬のあたりがぼつと熱くなる。ページを進めると、次には女性が男の股間に手を伸ばして……。

と、そのとき。

ガチャリ！

「!?」

突然、部屋の扉が開かれ、美知が顔をのぞかせた。

(わっ！ ど、どうしよう!?)

本に気を取られて、気配を察知できなかった。ここは広い床の上だ。隠れる場所などどこにもないし、今さら走って逃げるわけにもいかない。

(そ、そうだ!)

とっさにパタリと横になり、身体を硬直させて人形のふりをする。

「おにーちゃん、いませんねー……っ」と

キョロキョロとあたりを確認しながら、なにやら忍び込むかのように美知が部屋の中に

入って来た。すでにセーラー服を着替えて、Tシャツにミニスカート姿に変わっている。
ドキドキドキ……。

エトセラの小さな胸が、爆発しそうなほどに早鐘を打つ。

そろそろと部屋の中央まで来て、美知が足を止めた。

「あれ？」

「!!」

ついに足元に転がるエトセラに気づいた。ひょいと拾い上げ、まじまじと見つめる。
グツと身体を強ばらせるエトセラ。

「……………」

「ふーん、これがお兄ちゃんの“恋人”ね」

美知は皮肉のつもりで言ったのだが、エトセラはその言葉にドキリとしてしまった。

「よくできてるわねえ……」

そして裏返したり逆さまにしたりして、じーっと“お人形”を観察してたかと思うと突然スカート^まを捲くり上げた。

「!？」

とっさにあがりそうになる悲鳴を呑み込むエトセラ。すると、美知はそのままパンツを
ずりずりと下ろし始める。

(な、なにをつ?)

抵抗することもできずに、されるがままパンツを脱がされてしまった。そして……。
ガバツ!

「!?」

美知はエトセラの両足を持って、大股開きの格好にさせてしまった。

「×○○△#%〒¥♂♀!!」

パニックになりながらも、エトセラは必死に人形のふりを続ける。

「へえー、こんなとこまでちゃんと作ってあるなんて……すっごーい」

美知は妙に感心して、指先でこちよこちよと股のつけ根あたりをつついた。

「っ……………!」

奇妙なこそばゆさに、じつと奥歯を噛んで耐えるエトセラ。

「ひゃー、リアルう。こりゃ、お兄ちゃんが危ない世界に足を踏み入れちゃうのもわかる
気がするわ……」

上着をめくって中のふくらみまで確認すると、再びパンツをはかせて服をきっちり元
戻し、そつとクッションの上に置いた。

ようやくと解放され、エトセラは気づかれないようにほつと息を吐いた。

「下手なことしたら、お兄ちゃんに何されるかわかんないしね。こういうの好きな人って、

キレると危ないってゆーし」

本人のいない所で、えらい言われようである。

「……さーてと」

腰を上げようとして、再び床の上に視線を戻した。そこには、エトセラが引っ張り出したエッチな本が開かれている。

「やだもう、こんなの出しっぱなしで……」

と、言いつつも興味津々しんしんで本をのぞき込む美知。……が、2、3ページパラパラとめくって、すぐにやめて立ち上がった。

「うーん、さすがに外に出てるのを持っていったちゃ、バレるわよね」

再びあたりを見回しつつ、ゆっくりとベッドへ近づいた。

何事かと思つて、エトセラが薄目を開けてそちらをのぞき見ると、美知はベッドの下に手を突っ込んでガサゴソとやっている。

「んーと、確かここらへんに……お、あつたあつた」

そうしてエッチ本の束たばをつかみ出すと、上から順に中身の確認を始める。

エトセラもついつい気になって、人形のふりも忘れて美知のようすをうかがってしまう。
(……なにしてるのかしら?)

「よし、今日はこれね」

小さくつぶやいて本の束の中から1冊抜き出すと、それを脇に抱えて立ち上がる。

(……どうするんだろう?)

部屋を出ていこうとする美知に興味を覚え、エトセラはそーっと立ち上がって、ちよこちよこ美知の後を追いかけた。

3

美知が部屋を出て扉を閉めようとした瞬間に、サツと隙間に滑り込んで廊下へと出る。

そして彼女の部屋も同様にして忍び込み、まんまと潜入してしまった。

ちなみに、扉の閉まる前に自分の靴を隙間に差し入れておいたので、両方の扉ともうっすらと半開きの状態になっているのだ。これでいつでも脱出可能というわけだ。

エトセラは美知に見つからないようにしてファンシーケースによじ登り、並べられたぬいぐるみの中に紛れ込むとあたりを見回した。

この部屋の雰囲気は知也のそれとはまるで趣おもむきが違った。部屋の造り自体は同じだが、そこは女の子、室内が全体的にパステル調でふわふわとした感じでまとまっている。

くまさんとぶたさんのぬいぐるみの間から顔を出し、美知のようすをうかがう。すると美知はベッドに横になってエッチ本を広げ、パラパラとページをめくりだした。

(妹さんも、「愛」についてのお勉強かしら?)

美知は再び横になって行為を再開すると、枕に頭を押しつけながら、とろんと空ろな瞳で目の前に開かれたエッチ本を見つめた。

そこには大股開きをした女性の陰部を、男の手がおおっている写真がデカデカと載っている。

パンツ越しに、内側のクレヴァスに沿ってちよつとだけ中指を動かしてみた。

「ん、んんっ！ やっ……」

必要以上の刺激に、恐くなって指の動きを止める。

数年前に、こうして自分で慰めることを覚えてからは、たまに好きなアイドルのことを考えたり、今日のように兄のエッチな本を借りては恥ずかしい部分に指を這わせているのだが、いまだこうやってパンツの上から股間に手をやってじわつとした快感を得るくらいが精一杯で、強烈な刺激には恐怖心が先立ってしまう。

「はあ……んあ……」

右手は股下にはさんだまま、空いていた左手をふくらみかけの、もう少しすれば立派な“バスト”になるであろう胸に這わせる。

（うわあ……）

エトセラはなぜかその光景から目が離せず、食い入るようにして見つめてしまっていた。それに、身体の奥のほうになにかムズムズとした未知の衝動があり、知らず知らずのう



ちに顔が火照り、息が荒くなつてしまふ。

(な、なんだろう……)

先日、お風呂に入ったときの感覚に似ている。知也に身体を洗ってもらつてゐるうちに、なんだか頭の中に靄がかかったような気分になつてきて……。

「んっ……うん……」

美知はしばらくそのままマッサージするように股間をさすつていたが、やがてその手の動きが少し早くなつたかと思うと、突然ピクリ、と小さく痙攣して動きを止めた。

「はあ……」

そして大きく息を掃き出すと、そのままベッドの上でくつとして動かなくなつた。

4

エトセラは美知に気づかれないうにして部屋を抜け出し、知也の部屋へと帰つてきた。

「……………」

なにか全身が熱っぽく、ぼーっとしている感じである。

視線を動かすと、床の上には先ほどのエッチ本が開かれたまま置かれている。

フラフラと誘われるように歩み寄り、本をのぞき込む。そこには男女が激しく抱き合い、腰を擦り寄せている写真が載っていた。

再びあのムズムズとした衝動が湧き上がり、自然と指が股間へと伸びていく。

「……………」

少し触れて手のひらで撫ぜただけで、小さな電流のようなものがパチパチと全身を駆け抜けた。

(……………こ、これって……………)

風呂での、知也の指の感触を思い出す。

(お風呂入ってるわけじゃないのに……………なんか、あのとときみたい……………)

身体力が抜けて立っていらなくなり、ペタンと床に座り込んでしまう。

それでも指の動きは止めず、パンツの上からすりすりときさすり続ける。

「ん……………な、なんか……………熱い……………」

全身を包む熱に耐えきれなくなり、ついにドレスを脱ぎ去ってしまった。バランス的には美知のそれよりも断然大きい胸が、ふるんと揺れる。

普段は真っ白い肌が、今は薄く桜色にそまっていた。

「んん……………いい、いい……………アン……………」

すりすりすり……………。

しばらく股間を撫ぜ続けていると、股布の中心あたりからじわつと染みが浮いてきた。

「やんっ！ な、なんだろ、これ……………」

パンツをちよこつとめくつてのぞき込むと、どうやら自分の股の間から染み出てきているものだということがわかった。

(だ、大丈夫かしら？ 普通の人もこんなになるの？)

ちよつと不安になったが、好奇心と身体を突き動かす甘い衝動には勝てず、再び行為を再開した。

目の前のエッチ本で絡み合う男性と女性。その姿が、自分と知也の姿にダブる。

人間サイズになった自分が知也と抱き合っている。知也の裸身にも、しっかりと股間から突き出す物体がついていた。

「……知……也さん……」

せつなそうに呟いた。

そのまましばらく続けているうちに、次第に何も考えられなくなり、ただひたすらに指を動かし続ける。

「あつ、んあ……ああつ！」

次の瞬間、全身に衝撃が走り、頭の中で何かが弾ける。

「っ……っ！」

こてん。

そのまま床に倒れて、またもや人形のように動かなくなってしまった。

「ただいまー……っと」

俺は玄関で靴を脱ぎながら、小さく息を吐いた。

疲れた……。

何が疲れたかって、今俺が右手に下げている駅前薬局のビニール袋のせいだ！

なにせ、今日の配達先は駅とはまったく逆方向だったのだ。このクソ暑い中を、街の端から端まで自転車で横断してしまった。

しかも、商品名を忘れてしまったため、薬局の店員に「あの、サラサラヘアーのやつありますか？」なんて聞くハメになってしまったのだ。これって、結構恥ずかしいんだよな。

これは、美知に特別手当を請求せねばなるまい！

と、意気込んでドカドカと階段を昇り、2階へ向かう。

いちど俺の部屋をのぞいておこうかと思ったが、その前にこいつを渡してしまおうと考えて扉の前を素通りし、そのまま美知の部屋の前まで行くとノックもせずドアを開けた。

バン！

「美知ー！」

「きゃっ!!」

……。
部屋の中の美知と目が合い、ふたりとも硬直してしまった。

「……」

「……」

……なんか、最近このパターンが多いな……。

俺の目に映ったのは、発展途上の白い胸に、くびれたはじめたウエスト、水色のパンツに包まれて小さくまとまったお尻……。

まあ、美知はいわゆる“パンツ一枚”だったわけだ。

いやあ、ちよっと見ぬ間に成長したなあ……じゃなくて、

「は、はは……ゴメ」

ガコッ！

「ぐわあっ!？」

美知の投げつけた目覚まし時計が、俺の顔面にヒットした。

いつ……。

そのままよろけて廊下へと後ずさり、顔を押しさえてしゃがみこむ。

「っ痛ううううう……」

……鼻もげるかもしれん……。

そんな俺を尻目に、美知がボタン！ と力いっぱい扉を閉めた。

「エッチ、バカ、ヘンタイっ！ なんでノックしないのよ！」

扉の向こうで、美知の罵声ばせいが飛んだ。声の調子から相当怒ってるのがわかる。が、俺にだって言い分はあるぞ！

「おまえだって、俺の部屋はノックなしだろう！」

「男と女じゃ違うのよ！」

……俺のプライバシーはないのか!?

「……だいたいおまえ、なんだって裸でいるんだよ!？」

「着替えに決まってるでしょ！」

そ、そうか、なるほど……。

しかし、それにしても時計投げつけるこたあないだろう……。

「まったく……これ、ここ置いとくからな！」

そう言っつて、俺はシャンプーの入ったビニール袋を美知の部屋の前に置くと、自分の部屋へと戻った。

まったく、同じ女でもエトセラとはえらい違いだよな。

そうそう……エトセラ、おとなしくしてたかな？

「エトセラー」

勢いよくドアを開けた。自分の部屋だ、ノックの必要はない。しかし……。

「!!」

再び俺は硬直した。

部屋の中のエトセラも動きを止めた。

「……」

「……」

机の上に、これまたすっぱだかのエトセラが立っていたのだ。

あ……ああ、でも彼女は別に気にしてないはず……。

「え、えーと……エトセ」

「きゃあああああああああああああああああつ！」

ごすっ！

「っ………!!」

エトセラの投げたビー玉が、先ほど傷めた俺の鼻にヒットした。

「っ痛ううう………!!」

「もう！ 部屋に入るときはノックしてください！」

うづくまって鼻を押さえる俺に、エトセラも抗議の声を上げた。

第6章 見られて、見られた!?

1

ついに、エトセラが俺のところに来てから、今日で14日目を数えた。

しかし、それはつまり一緒にいられる時間があと1日しかないってことだ。

思い起こせば、俺はエトセラにとってだいじな試験のパートナーだったのに、この2週間仕事仕事でろくに相手もしてやれなかった。……いろいろと脱線しかけたし。……いや、しちやったのか……。

と、まあそういう意味もあって、今日と明日はできるだけ一緒にいてやりたいと思い、とりあえず今日はふたりでデートすることにした。

しかも、エトセラ同様、これは俺にとっても人生初のデートである。

まあ、俺たちの場合はふたりで歩くってことができないんで、ようするに俺が街の中をブラブラと散歩しているだけなんだけど。それでもエトセラは喜んでくれているようで、俺のシャツの胸ポケットの中で瞳を輝かせてはしゃいでいた。

ちなみに、店のほうは現在休業中なんである。実にタイミングよく、両親は昨日から町

内会の慰安旅行で箱根湯元に温泉につかりにいつていて、明後日まで帰ってこない。ついでに美知の奴も部活の合宿中で、家には俺たちのほかに誰もいないのだ。

これで明日まで、今までみたいにビクビクせずに、のんびりと過ごすことができる。できれば、もっと早く旅行に行ってもらいたかったね、2週間の間ずーっと。

ま、過ぎたことを言ってもしょうがないので、今日の1日を大切に楽しもう。

駅前の繁華街を冷やかして回り、図書館でエトセラの読みたかったという本をしばらく読んでから、街の中心部に位置する公園まで足を運んだ。

ここは結構広い場所で、園内には芝生や樹木等の緑も多く、花壇には色とりどりの花が咲き乱れている。そして中央には、絶えず水を吹き上げ続ける大きな噴水。

しかし、いつ来ても園内に人の姿はあまりない。駅からちよつと遠いつてのが、原因のひとつだろうか。

でも、俺たちにとってはそれがかえって好都合である。今、エトセラはポケットから出て、俺の肩の上にちよこんと座っている。そして俺も、噴水の広場をグルリと囲むように並べられたベンチに腰を下ろした。

「あの、知也さん。今日はとっても楽しかったです」

エトセラが肩の上で満面の笑みを見せてくれた。そう言ってくれると俺もうれしい。

「俺も楽しかったよ」

とてもいい気分で空を見上げた。あの、箱を拾ったときと同じような晴れ晴れとさわやかな青空だ。

でも、明日になれば、エトセラは想像の国へ帰ってしまうのか……。そして、試験に合格していれば人間に……。

「……………」

……人間になる……か。

俺は肩に座るエトセラを見た。その視線に気づいて、エトセラが「なんです？」と首をかしげる。

「……ねえ、エトセラ？」

「はい？」

「聞いてなかったんだけどさ、君はなんで人間になりたいんだい？」
俺の言葉に、エトセラはまっすぐ俺を見つめかえす。

「それは……すべてのピグマリオンの夢なんです」

「夢？ 人間になることが？」

「はい」

神妙にうなづくエトセラ。

「私たちピグマリオンって、非常に不安定な存在だと思いませんか？」

「……どうということ？」

「ピグマリオンが、人間の想像力によって誕生するってことは、以前にお話しましたよね？ だったら、人間が想像することをやめたら、私たちはどうなるんでしょうか？」

想像することをやめる？ そんなこと……。

エトセラが、悲しそうに目をふせた。

「……たぶん私たちも、想像の国自体も消えてしまうんだと思うんです」

「そんな……」

「現に、夢を見たり空想したり、何かを一生懸命考える人って減ってるんじゃないやありませんか？」

それは……確かにそうかもしれない……。

「人々の“想像力”っていう、非常にあいまいなものの上に、私たちピグマリオンは存在しています。だからすべてのピグマリオンは、自分たちのその“不安定さ”に疑問を感じているんですよ。『自分たちの存在はいつたいたいなんなのか？』って。私たちは、常に心に不安を抱えているんです」

あいまいなものの上に生きる不安定な存在。

それは確かに、不安だろう……。

「人間は、生まれてから成長していくとともに、徐々に自分という存在を作り上げていく

わけですよ？ でもピグマリオンにはそれはありません。気づいたときには、すでに自分は自分として存在していて、もしかしたら明日にも消えてしまいかもしれない。だから、常に“確かな存在”への憧れがあるんです」

「それが……人間か」

「はい。自分が自分であるために、人間になることを望みます」

自分が自分であるために……。

でも、人間だって自分つてものがどこまでわかっているか……。

「……それでエトセラも、人間に憧れてるの？」

俺の言葉に、エトセラが小さくうなづく。

「はい。……初めの理由はそうでした……」

初め？ 今は違うのか？

「それって……」

俺が質問を続けようとした、そのとき。

「あーっ！ 知也くん！」

どこからか、俺を呼ぶ声が聞こえた。う……、この聞きおぼえのある声は……。
おそるおそる声のしたほうを見れば、案の定。

「ねえ、ちよつと！」

花壇の向こうから、こちらにパタパタと駆けてくるのは、やっぱり加奈子だった。

……ほんとにいつも絶妙なタイミングで現れるよな。

もちろん今日は制服ではない。Tシャツにジーンズという、実に色気のない格好だ。

「……私、隠れますね」

そう言って、肩から降りて胸ポケットに滑り込むエトセラ。

ああ……こんな日まで、すまないねえ……。

「知也くん！」

息を切らせながら加奈子が駆けてくる。何をあわててるんだ？

「お願い、助けて！」

「は？」

加奈子は必死な顔で、俺の腕を引っ張ってベンチから立たせた。そして、

「来た！」

と悲鳴をあげ、俺の背中にサッと隠れる。

……なんだ？

その視線の方向を見れば……。

「なっ!？」

「加奈子おー！」

ギリッ!

「!？」

俺の言葉に、後ろの加奈子が突然背中の肉をつねった!

い、痛いっての!

振り返ってにらみつけてやると、逆に数十倍の迫力でにらみ返された。

……か、勝てない……。

「熱なんてない! 俺は真実の愛に目覚めたのだ!!」

拳こぶしを握って力説する公一。

こいつ、突然何を!? 暑さでついにイッたか?

「なんだよ、その真実の愛ってのは?」

「ああ……俺はこの夏の間、さまざまな女の子と出会い、別れを繰り返してきた……」

……ナンパしまくって、全部フラれたってことだな……。

「だが、先日ふと気づいたんだ! 俺に必要なのは、たったひとつの真実の愛なんだって

ことに!」

……なんだそりゃ?

ポケットの中では、なんだかエトセラがうんうんと肯いてるし……。

…… “愛” って言葉に反応したな……。

ギリギリッ!

抗議しようとしたら、再び背中をつねられた。
だから痛いっての!

(今だけでいいからさ、話を合わせてよ)
俺の耳に口を寄せ、加奈子が囁く。

(し、しかしなあ……)

(公一くんに諦めさせるだけだから、ね?)

小声でひそひそ話す俺たちを、ちよつと怪訝そうな顔をして公一が見ている。
あ、疑ってるな……。

「おまえら、ほんとに付き合ってるの?」

「ええ、もちろん! ねえ、知也?」

いきなり呼び捨てかい。

し、仕方ないなあ……。

「え? あー……そう、らしい……」

「いつから!」

「えーと、今さっき……」

「夏休み始まってすぐよ!」

公一の後ろ姿が見えなくなるのを確認してから、加奈子は回していた腕を俺から放し、ホッと胸を撫でおろした。

「ありがとう。助かったわ」

からかうように、俺にウィンクしてみせる。

「おまえなあ」

「いいじゃないのあれくらい。それとも知也くん、ちゃんとした恋人でもいるの？」

「ば、馬鹿！ なに言ってるんだよ！ そんなもんいるわけないだろ！」

「でしようねえ。冗談よ、じょーだん！」

腰に手を当て、コロコロと笑う加奈子。

まったく……。

「じゃ、またね」

そう言い残し、加奈子も出口へと走っていった。

残されたのは俺と……。

「……………」

……なんか、ポケットの中から凄まじい威圧感を感じるんだけど……。
誰か助けて……。

「だから、あの場合しようがないじゃないかあ」

思ったとおりというか、やっぱりというか、エトセラの機嫌は悪かった。

家に帰ってくるまでの間も、ひと言も口をきいてくれなかったし……。

今も、机の上で俺に背中を向けたまま、ズーツと顔を見てくれようとしない。

「公一にあきらめさせるための嘘だって、加奈子だって言ってただろ？」

「そのことじゃありません！ その後のことです！」

え？ その後？

「え、えーと……美知のこと？」

「違います！」

だろうなあ……。じゃあ……？

するとエトセラは、言いづらそうにうつむいてボソリとつぶやいた。

「だから……知也さんに……恋人が……」

「俺に？」

えーと……俺なんか言っただけ？ 動転してて、よく覚えてないんだけど……。

「な、なんだっけ？」

「……なんでもありません！ 今日はいもう帰ります！」

怒鳴ってすつくと立ち上がり、スタスタと机の縁まで歩いてきた。どうやら、床に降りようとしているらしい。俺が手を差し伸べて降ろしてやろうとすると、それを無視して自分でズルズルと机の脚を這い降りてきた。

……ははは……。

しかし机の下の箱の前まで行くと、じっとそれを見上げたまま止まってしまった。

「……」

……どうしたんだろう？

エトセラがクルリと振り返って俺を見上げる。頬はふくらませたままだ。

あ、そうか。箱のフタは俺が開けてやらないと……。

ぎいっ……。

フタを開けてやると、エトセラは箱の側面をよじ登り、俺のほうを振り返りもせず「えいっ」と箱の中に飛び込んでいった。

箱のフタを閉めると、部屋の中が寂しい静寂に包まれる。

……はあ。どうやら、今回は本気で怒ってしまったらしい。

エトセラの帰って行った箱をチラリと見る。なんだか、箱自体が俺を刺すような殺気を発してる気がする。

なんでこうなるかなあ？　せつかく、最後の二日間をふたりで楽しく過ごそうと思って

たのに……。明日の朝には機嫌を直してくれているといいなあ……。

3

ピンポーン。

玄関のチャイムが鳴った。

居間でひとり寂しくテレビを見てて、そろそろお腹が減ったな、^{なか}と思つてた頃だ。

時計を見ると、夜の7時を回っていた。……誰だ？ こんな時間に……。

ピンポーン。

再び鳴る。

わかった。わかりましたよ。

仕方なく腰を上げ、玄関へ向かった。その間に、もう一度チャイムが鳴った。

「はいはい！」

ガチャリとドアを開けると、そこには……。

「こんばんはー」

加奈子が立ってた。ノースリーブにキュロットスカートという、昼間よりは多少女の子らしい格好になっている。

「な、なんだよおまえ、こんな時間に……」

「おばさんに頼まれたのよ。ようすを見てきてくれって」

「母さんに？」

まったく。俺をいくつだと思ってるんだ？

「それから」

ガサツと、手に下げていたスーパーのビニール袋を見せた。なんか、いろいろと詰まっている。

「どうせろくなもの食べないだろうから、晩ご飯作りに来てあげたぞ」

まあ、確かにこれからカップラーメンか、レトルトカレーでも作ろうかと思ってたときだ。

加奈子は台所に上がり込み、なにやら鼻歌を歌いながら軽快な包丁の音をたてている。何ができるか知らないが、素直に感謝しておこう。

座ってしばらく待っていると、食卓にいくつも皿が並び始めた。

「へえ……」

「なによ」

俺が感心した声を上げると、加奈子はじろりと俺をにらんだ。

「意外だ。結構料理上手いんだな」

「意外は余計。文句言うなら、食べてもらわなくても結構です」

「そんなこと言ってないだろ！」

あわてて口の中にかき込んだ。味のほうもなかなかだ。数分で、全部たいらげてしまった。

「ふう、ごちそうさん」

「お粗末さまでした」

立ち上がって加奈子が皿を片しはじめ、俺はひと息ついて用意されたお茶をすすった。

「ねえ……」

「ん？」

「こうしていると、新婚さんみたいだよね」

ぶっ!! げほごほ。

……鼻からお茶出た。

「ちよつと、きたないわねえ」

「おまえが突然、ヘンなこと言うからだろ！」

「だから冗談だって。ホント、ユーモアが足んないわよ、知也くんは」

笑えないっての……。

もとはと言え、エトセラの機嫌が悪いのもこいつのせいなんだよな……たぶん。

背中をじーつとにらみつけていると、振り返った加奈子が俺の顔を見て眉根を寄せた。

「なにその顔？」

「なんでもねーよ！」

まったく、人の苦勞も知らないで……。

台所の水音が止まった。どうやら洗い物が終わったらしく、タオルで手を拭きながら加奈子がテーブルに戻って来る。

そして、突然「そうだ！」と何かを思い出して、俺を指差した。

「知也くん、英語のノート貸してなかったっけ？」

「ノート？」

ああ、そういえば試験前に借りてたな。

「あれがないと、宿題できないのよ。返してくれる？」

それはまあ……。返すと俺も宿題できない……。とは言えないよな。

「知也くんの部屋に入るのも久しぶりねえ」

加奈子はキョロキョロと部屋を見回している。

2階にノートを取りに行こうとしたら、加奈子も後ろからついてきてしまったのだ。エ

トセラのこともあるし、机の下には実際に箱が置いてあるんで、あまり入れたくはなかつたんだけど……。

「あんまり昔と変わってないね」

「そうか？」

そういえば、小さい頃はよく家へ遊びに来てたな。といつても、別に俺と遊んでたわけじゃないぞ。美知の遊び相手になってくれてたのだ。

「ま、本人も成長してないもんね」

……悪かったな。

加奈子は珍しそうに部屋をうろうろして、本棚の前で足を止めた。

「ふーん、児童文学集？　こんなの読んでるの？」

本棚を眺めながら、馬鹿にしたような声を上げる。

「あんまりそこらへんのものいじるなよ！」

「はいはい。それよりノート、ノート！」

「わかってるよ」

とりあえず机の引き出しを開けて探してみる。確か、ここらへんに入れといたはず……。俺は整理整頓つてのが苦手である。エトセラがいるようになってからは、ちよつとは見栄えをよくしようとして片づけるようにはなったが、基本的にそういうことに無頓着なのだ。

引き出しの中も、いろんなノートやら雑誌やらがごっちゃになってて、どこに何があるのやら……。

ガサゴソガサゴソ……。

「あっ！」

引き出しの中を引つかきまわしていると、突然背後の加奈子が大声をあげた。
な、なんだ!?

振り返ると、加奈子はなにやら1冊の本をパラパラとめくっている。

「!？」

あ、あれは!

加奈子が手にしているのは、例の恋愛小説、なんたらまいだーりんってやつだ!
そういや、美知の部屋に戻しておくのを忘れていたっ!

「か、加奈子、それはっ……!」

「ふーん、知也くんこんなの読んだ？」

そうやって、横目で俺を見て、にやりと笑う加奈子。

「お、俺のじゃないぞ! それは美知の本で……」

「でも、この部屋にあるってことは、知也くんも読んだってことでしょ?」
い、いや、それはエトセラが……。

「どれどれ、どんなの読んでるのかなあ？」

なんだか楽しそうに、加奈子はパラパラとページをめくって中身を見始めた。

「へえー……知也くんって、実はこういう乙女おとめちつくなの好きなんだあ」

「いや、だからそれは……」

……と、ページをめくる加奈子の指が、ぴたりと止まった。

あ、あれは、最後のキスシーンのあたりだな……。

「なになに？ 夏祭りの夜に、花火をバックに抱き合うふたり……。へえ、知也くんも、

こういうシチュエーションでキスしてみたいとか？」

「な、なに言ってるんだよ！ そんなこと……」

なんだか、顔がカーッと熱くなってしまった。

「もう、何このくらいで真っ赤になってるのよ。だいたい、知也くんだってキスくらいし

たことあるでしょ？」

「ないよ、そんなの……」

「え!?! ない……の？」

加奈子はかなりビククリした顔で俺を見つめている。……俺が女の子苦手なの知ってるくせに。

「そういう加奈子はあるのかよ？」

「私？ 決まってるでしょ。この歳でそのくらいないなんて、逆に恥ずかしいじゃない」
「……ふーん」

……そうか、あるのか……。まあ、加奈子なら、言い寄ってくる男も結構いるのかも知れないな……。

……なんだ？

俺、なんかちよつとガツカリしてるぞ!?

「ふーん、そうなんだ……。ないのか……」

そう言っつて、加奈子はじーっと俺の顔を見つめながら、何やら考えている。そして、急にふっと口元をほころばせると、

「ねえ……」

「ん？」

「キス、してあげようか？」

「は？」

な、なんだって？

すると、加奈子は突然顔を前に突き出してきて……。

え？ ちよ、ちよつと、なに？

「!？」

く……。

唇を奪われた！

スツと、すぐに離れてしまったが、俺の唇にはまだ柔らかい感触が残っている。
な、ななな……何を考えて……、いやそれより……。

「お、おまえ……」

「2度目」

「え？」

「だから、知也くんとキスしたの、これで2度目」

「……は？」

ど、どういうこと？

加奈子は、なんかあきれ顔で俺を見つめている。

「昔、ふざけてふたりでやったでしょ」

「い、いつ!？」

「小さい頃、小学校上がる前かな？ 覚えてないの？」

お、覚えてない！ 全然覚えてないぞっ!!

「なーんだ、私にとっては大切な思い出の1ページだったんだけどなあ。知也くんにとっては、どーでもいいことだったんだ」

ものだろうか……。

何やら、頭がぼーっとしてる。

何かを忘れてるような気がする……。何か、とても大事なことを……。

ぼやける瞳で部屋を見回した。俺の部屋だ。いつもどおり何も変わりはない。

加奈子の肩越しに、机の下が見える。そこに……何か……。

箱だ。

箱のフタは、開いていて……。

「!?」

俺はバツと加奈子の身体を引き離し、部屋中を見回した。

「ど、どうしたの？」

そのようすに、加奈子は驚いて、不思議そうに俺を見つめている。

箱が開いてる!? ってことは……!

さらによく見ると、部屋のドアがほんの少しだけ薄く開いていた。

何か、小さなものが通れるくらいに……。

「くっ!」

飛びかかるようにしてドアノブに手をかけ、力一杯に扉を開けた。

「と、知也くん!」



「加奈子、ゴメン！」

背中に向けられた加奈子の声を振り切り、俺は部屋を飛び出した。

4

まさか、エトセラが見てた!?

俺の馬鹿野郎！　なんて迂闊うかつなんだ!!

俺はもう、夢中で走った。エトセラがどこに行ったかわからないが、外にいることは確かだ。やみくもに、手当たり次第に走りまわる。

住宅地を駆け抜け、路地裏に入り、他人の家の庭からごみ箱までのぞいた。

ぜえはあぜえはあ……。

日が落ちたとはいえ、さすがに真夏の夜は暑い……。噴き出す汗が、どんどん体力を奪っていく……が、そんなことにかまってはいられない!

どこだ!?　エトセラ、出てきてくれ!!

そのとき。

「こおんの、アホたれ！」

耳元で罵声ばせいが響いた。見ると、いつの間にか肩にミンティーが乗っていて、キツと俺をにらみつけていた。

「ミ、ミンティー！」

「まったく、あれだけ注意したやろが！」

「……ごめん……」

「謝るのはうちにやないで」

「う、うん……」

「そうだ……もちろん彼女に……」

「そっちやない。ここをまっすぐや」

俺が路地の角を曲がろうとすると、ミンティーが別の道を指し示した。

「わかるのか!？」

「まあな。ピムが追ってったんや。うちが道案内したるさかい、早う急ぎな」

俺はミンティーの言う方向へと走り出した。

「ええか、エトセラに会ったら平謝りやで」

わかってる。俺が全面的に悪い。

「まったく……このままやと試験どころやないで。結果が出る前に、人間になれなくなつてまうかもしれへん」

「え？」

「どういうことだ!？」

「エトセラが人間になることを望まなけりや、合格も不合格もないってことや。そうなたらもう、一生人間になることはないで」

「一生!？」

「そや、うちらがこうして人間になるためにこつちの世界に来るのは強制やない、本人の意志、希望や。それが、今回のことでエトセラが人間に対して失望したらどうなる？ 2度と人間になりたいなんて思わんやろ？」

これからも、一生ピグマリオンか……。

「一生や言うても、うちらにはそないに時間はない。ピグマリオンはいつ消えてまうかわからんからな」

「消えるって、あの、人が想像をやめたらって……」

「はあ？ なんや、エトセラから聞いてないんか？」

「な、なにを!？」

するとミンティーは短く溜め息をつき、俺をにらみかえした。

「ええか、この世界の人間すべてが毎日何かを想像してるやろ？ 何十億もの人間が、日に何回もや。そうすると、その想像のエネルギーすべてが想像の国に届き、次々にピグマリオンが生まれることになるわけや。でもな、そうするといつか想像の国はピグマリオンだらけになつてまう。だから、新しいピグマリオンが生まれると、古いピグマリオンはそ

の新しい者の中に取り込まれてしまうんや」

「取り込まれる!？」

「そや。死ぬわけやない。でも、自分とは違うまったく別のピグマリオンになる」

……自分が自分でなくなる……。

エトセラの言葉を思い出す。

「自分が自分であるために、人間になることを望む」

そんな……。

「今回のエトセラの試験が終われば、次はうちとピムの番や。おそらくどこか別の場所で試験を受けることになるやろ。もちろん合格するかはわからへんけどな。でも、うちらかて人間になりたい。もしそうなら、エトセラは想像の国でひとりぼっちや。人間になることを夢見ることもない。じつと自分が消えていくのを待っただけの生活やで……」

エトセラが、そんな……そんな寂しいこと……。

「ええか！ 絶対エトセラを思いとどまらせるんや！ そうしないと、うちもピムも、ただじゃ置んで！」

「わかってる！」

エトセラ……ごめん！ 早く、早く言わなきゃ！
俺はもつれる足を無理矢理押さえつけ、必死に走るスピードを上げた。

5

うっそうとした足元の草に、月の光を覆い隠すように生える高い木々。そして、あたりに響く虫の声。

俺は息を整え、額の汗をぬぐって暗く長い砂利の坂道を見上げた。

「ここは……」

あの裏山だ。

「この上か？」

「そや」

ミンテイーがうなづく。

意を決し、急ぎ足で勾配こうばいを登りきると、例の天然の展望台に出る。ここから夜景を見るのは初めてだが、今はそんなものを鑑賞している場合ではない。

あたりを見回すが、エトセラの姿はない。そうだ、足元もよく見ないと……。

「あそこや」

ミンテイーの指差す方向を見ると、林から一本だけ離れて立っている桜の木があった。

その枝の上に、小さな人影が立っているのが見える。

あれは……ピムだ。

ゆっくりとその木へと近づく。すると俺の気配に気づいたピムが振り向き、目が合った。彼女も、俺のことをじっとにらんでいる。

……わかってるよ。

よく目を凝らして見ると、ピムの足元にもうひとり、うずくまるようにして座っている影があるのが見えた。

ピムがサツと枝から飛び降りて、少し離れた場所に頭を出している石の上に腰を下ろした。ミンテイーも俺の肩から下り、ピムの隣に座る。

俺は木の幹を見上げ、枝の影に向かって話しかけた。

「……エトセラ」

俺の声に、影がピクリと動いた。

「ごめん、エトセラ」

「……」

影は何も言わない。

「ホントに……ごめん」

俺は深々と頭を下げ、心の底から謝った。



そのまま頭を下げ続ける。しばらくの間沈黙が続いた。やがて、

「……知也さんは……」

木の上から、やつと声が返ってきた。

「知也さんは、加奈子さんが好きなんですか？」

今にも泣き出しそうな声……。いや、泣いて……いたのか。

俺は、正直に答えた。

「……嫌いじゃないよ……」

「……」

「加奈子といるとき、肩凝らないから……。結構楽しいしさ……」

そう、好きか嫌いかで言えば、たぶん俺は加奈子のことを好きなんだろう。

でも……。

「でも、違うんだ。最近、本当に好きっていうのがどういふことかわかったんだ。俺さ、女の子に縁がなかったから、今までよくわかんなかったんだけど、あるひとりの女の子と出会って……」

その女の子は、普通の娘じゃなかったけど……。

「その娘とただ一緒にいるだけでさ、こう胸がドキドキするんだ。話したり、遊んだり、触れたりするともうドキドキどころか、ワクワクして、ウキウキして、ちよっとハラハラ

して……」

「……………」

俺は、まっすぐに彼女を見つめた。

「ねえエトセラ、人間になろうよ！」

木の上に向かって叫ぶ。

「俺、嫌だよ、エトセラが消えちゃうなんて。エトセラが俺のこと嫌いだって言うんなら、それでもいい！ 顔も見たくないって言うんなら見てくれなくてもいい！ でも、それは人間になってからにしよう！ 人間になったエトセラが、どこかで生きていてくれるってことがわかっていけば、俺はそれでいいよ。だから、もう1日だけ俺に付き合ってくれ！」

「……………」

「エトセラは言ったじゃないか、人間になるのはピグマリオンの夢だって。自分もずっと憧れてたんだって。だから……」

「……………違います……………」

「え？」

木の影から、エトセラが顔を見せた。その険しい顔……………怒っている……………。

「私、そんな理由で人間になりたいんじゃないじゃないですか」

「え……………？ じゃあ……………」

「確かに初めはそうでした。ずっと人間になることを夢見て……人間になつたらあれをしたい、これをしたって……。でも、実際にこちらの世界に来て、知也さんと暮らしているうちに変わったんです」

そして、エトセラはふっと表情をゆるめ、

「私は……知也さんと同じ、人間になりたいんです。知也さんがいるから、知也さんと同じこの世界に生きたいんです」

そう言つて、やつとニツコリと俺に微笑みかけてくれた。

「エトセラ……」

ああ……。

手を差し伸べると、エトセラは少しはにかんで、俺の手のひらに降りて来てくれた。

なんだかギュッと抱きしめてやりたいけど……そんなことしたら、つぶれちゃうよな。

仕方ないので肩に乗せてやると、俺の顔にそつと身を預けてきた。

はあ……よかった……。

エトセラが肩の上にいる、微かな重みのこの安心感……。

ああ！ほんつつつつつつつつつとうによかったあつ！！

そして、ふたりでしばらく夜景を眺めた。さっきはじっくりと見るどころではなかったが、街の灯や駅のネオンが、キラキラとして結構きれいなものだ。

「知也さん……」

「ん？」

エトセラの声に、振り向こうとした瞬間。
ちゅっ。

「！」

頬に当たる柔らかな感触……。

「エ、エトセラ!？」

「うふふ……」

キ、キス……。

エトセラは、顔を耳まで真っ赤にしている。

ははは……。俺もちよつと恥ずかしい。

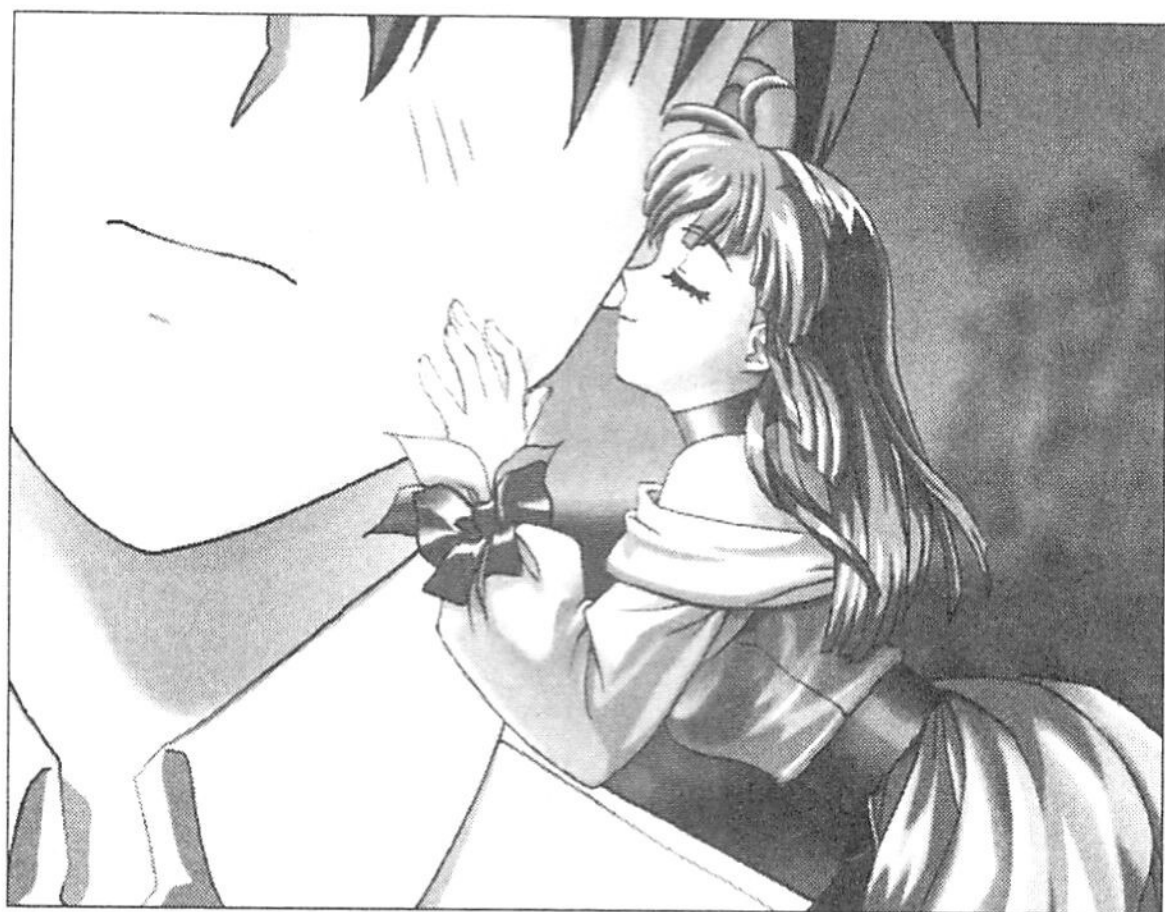
加奈子には悪いけど……。なんか、何倍もうれしい最高のキスだ。

「知也さん……。私、絶対人間になりたいです」

「なれるさ。なれるに決まってるよ！俺がパートナーなんだから、試験は絶対に合格だつて！」

「ふふふ、そうですね。絶対ですよね！」

エトセラが、力強くうなづく。



はあ……これで、とりあえずは元どおりか。

あとは、明日一日無事に暮らせれば、エトセラは晴れて人間になれる！
もう、完全に大丈夫だ。

俺は一つ危機を乗り越え、完全に安心していた。
しかし、そのとき……。

背後でガサリと、草の鳴る音がした。

ギクリとして振り返ると、そこには……。

「……知也くん……」

加奈子が……立っていた。

「か、加奈子……」

ついて来ちまったのか!?

加奈子は俺のことを見ていない。加奈子の目線の先にあるのは……。

「知也くん……そのお人形……」

エトセラ……。

だ、大丈夫だ。ただの人形だと思ったさ。俺が、人形にひとりで話しかけてたんだ。
そう笑ってごまかせば……。

しかし、加奈子の言葉は、そんな俺の考えを吹き飛ばしてしまったのだった。

「そのお人形……なんでしゃべってるの!？」

第7章 最終試験の結果は？

1

俺は、自分の部屋で呆然ぼうぜんと立ちつくしていた。

電気も点けずに薄暗い室内。カーテンを開けた窓から、ほぼ真円に近い月の光が差し込み、部屋全体を青白く照らしている。

どうやってここに戻って来たかは、よく覚えていない。あの後、加奈子を振り切って、また目茶苦茶に走って、気づいたらここに帰っていたのだ。

エトセラは……。

エトセラは、泣いている。

クッションの上でうずくまり、声押し殺して泣き続けている。

こんなときこそ、本当に思いつきり抱きしめてやりたい。でも、俺には、それもかなわないのだ。ただ、じっと見ているしかない。

ミンティーとピムも、エトセラのそばに立ち、黙って見守っている。彼女たちもなんと声をかけていいものかわからないのだ……。

……俺以外の人間に、エトセラを見られてしまった。人形ではなく、ピグマリオンとしてのエトセラを……。

これで、試験は終わりだ。

加奈子が悪いわけじゃない。すべて、俺の不注意が招いたことだ。俺が、周りにもっと気を配っていれば……。

自分で自分が情けなくなる。なにがパートナーだ！ なにが人間にしてやるだ！ あと、たった1日だったのに、俺が不甲斐ないばかりに！

俺は心の中で自分を罵り、エトセラに詫び続けた。

そうして、どのくらい時間が過ぎただろう……。

「……知也さん……」

ひとしきり泣いて鳴咽おえつが聞こえなくなった頃、エトセラが顔を上げ、俺の顔を見て微笑んだ。もう涙は流れていない……が、瞳は真っ赤に泣き腫はれたままだ。

……無理してるのが、ありありとわかる……。

「本当に……ありがとうございます。私、知也さんに出会えて本当によかったと思います」

「エトセラ……」

「短い時間でしたけど、こうして知也さんと一緒に暮らして、お話して……一緒にいるだ

けでとても楽しかった。こんなこと、想像の国にいたままじゃ体験できなかったことです」
そして、エトセラはチラリと箱を見た。今、箱は机の下から明かりの下へと引っ張り出されている。

「ううん……たぶん、たとえ人間になれていたとしても、相手が知也さんじゃなかったら、こんな気持ちになれなかったと思います」

箱が……。

ぎぎぎ……。

箱のフタが、ゆっくりとひとりでに開きはじめた。

箱の中からは、真っ白な光が洩れている。

再び顔を上げ、まっすぐ俺を見つめるエトセラ。

「だから、私、後悔してません」

そう言ってゆっくりと立ち上がり、箱へと歩きはじめた。

「エトセラ……」

箱に登って縁に立ち、俺を振り返るエトセラ。

「知也さん……私……」

何かを言いかけようとして、しかし声を詰まらせる。

そのようすに、俺は思わず叫んだ。

「エトセラ！ さよならじゃないよ！ もう一度……もう一度試験を受けに、俺の所へ来るんだ！ そうしたら、今度こそ……！」

するとエトセラは悲しそうに微笑み、こつくりと俺にうなずき返してから……。

箱の中へと消えて行った。

2

沈黙。

俺も、そして残ってエトセラを見送ったミンテイーとピムも、何もしゃべらずにじっとしている。

俺はやっと声をしぼり、ふたりに話しかけた。

「……もう一度試験を……受けられるかい？」

俺の言葉に、顔を見合わせるふたり。

ミンテイーが小さく溜め息をつき、俺に向き直った。

「……むずかしいとこやな。想像の国には、まだまだぎょうさん人間になりたい。ピグマリオンがおるから。そいつらを差し置いてつちゆうことはまず無理やろうし……」

「私たちも、帰ったらすぐに、試験の準備をしなくちゃいけないんだ……」

ピムが箱を見ながら、申し訳なさそうにつぶやく。

「……そうか……」

じゃあ、エトセラはもう、ここには……。

「なあ……どうしたらいいかな？」

「そんなこと、わかんないよ……」

俺の言葉に、ピムは泣きそうな顔になってうつむいてしまった。

そのまま視線を横に移すと、ミンティーは首をすくめている。

「……」

本当に……どうしたらいいんだろう。

俺は、エトセラに何がしてやれるんだろう？

すると、腕組みしていたミンティーが、「そやな」と言っただけ俺を見上げた。

「……とりあえず、祈ってみたらどや？」

ミンティーの言葉に、俺は思わず彼女の顔を見かえした。

「……祈る？」

「そや。エトセラのために……エトセラだけのために一生懸命祈るんや」

祈る……か。

「……結局……そんなことしかできないのか……」

何の役にも立たないのと同じじゃないか。

「あほう！ これは重要なことや。ええか？ 何度も言うところけども、うちらピグマリオンは人間の想像力でできとるんやで。『想像』いうんは『願い』であり『想い』や。人間の想像力つちゅーのは、うちらのような存在や、『想像の国』なんて『世界』まで作ってまうほどのごつついパワーを持つてるんや！ その人間の力なら、あないなちっこい女の子の運命を変えてまうくらい、簡単なことやろ？」

「そ、それは……」

ちよつと無理矢理な理論のような気も……。

「うちらかてエトセラの友達や。なんとかしてやりたいのは当然や。でもな、これはうちらではできへんことなんや。人間であり、エトセラのパートナーである、あんたにしかできないことなんやで！」

俺にしかできない……。

「もちろん、それでうまくいくかはわからへん。そういう話を聞いたこともないしな。でも、やってみる価値はあると思うで」

ミンティーは、じつと俺の目を見つめている。ピムも心配そうにようすをうかがっている。

俺が……俺がエトセラにしてやれること……。

それしかない……。それしかないなら……。やるしかないんだ！

「……わかった、やってみるよ」

俺の言葉にミンティーは「よっしゃ」と満足気にうなずいた。

そして、ふたりとも箱の縁に立つと、振り返って俺を見上げた。

「またいつか、こうして会える日があるかも知れん。だから、さよならは言わんで」
「ああ」

俺も、なんだかお別れって気がしない。

「またね！ 知也！」

ピムも、元気よく手を振る。

ふたりは互いに顔を見合わせると、勢いよく箱の中へと飛び込んだ。

……パタン。

箱のフタが閉まる。

……そして、部屋には俺だけがひとり取り残された……。

3

フラフラと部屋の隅^{すみ}まで行くと、俺は壁にもたれかかってズルズルとへたり込んだ。

ゆっくりと、自分の部屋を見回す。……俺の部屋って、こんなに広がったか？
あのちびすけたちがいなくなっただけで、こんなにも広く感じるなんて……。
……なんだか、実にあっけない幕切れ……。

目をつむり、この15日間のことを思い出してみる。確かに大変だった……でも、それ以上楽しかった。

もう一度……いや、もっと長く、あの生活を続けたかった。

そしてもう一度……エトセラの心からの笑顔が見たかった……。

それから俺は、エトセラのことを考え続けた。

笑った顔、怒った顔、すました顔、照れた顔、泣いた顔、驚いた顔……。

そして俺を呼ぶ声……。

「エトセラ……」

しかし俺のつぶやきに、返ってくる返事はない。

そのまま朝が来て窓から日が差し込み、その日が高くなってあたりには人々の声と街の喧騒が響きはじめ、そして再び日が傾いて遠くでカラスの声が聞こえ始めても、まだ俺はそこに座り続けていた……。

食事もしていない。睡眠も取っていない。トイレは……たまに行っただけ。

そうして……再び夜が訪れた。

本来ならば、最後の1日だったはずの夜だ。明日の夕方には家族も帰ってくるだろう。時計が9時を回ったところまでは覚えている。さすがにその頃になると、俺も疲れ果ててウトウトと船を漕ぎはじめていた。

そして、ふっと意識が途切れて、眠ってしまいそうになったそのとき……。

「……さん……」

……。

「……とも……さん……」

……。

「……知也さん……」

……!?

俺を呼ぶ声に、はっと目を覚ました。

その聞き覚えのある声に耳を疑いつつ、急いで顔を上げると、そこには……。

「知也さん、こんなところで寝ちゃ駄目じゃないですか」

「あ……ああ……」

くすくすと笑いながら、俺を見下ろしているエトセラの姿があった。

思わずエトセラを抱きしめた。力一杯、ぎゅっと。

そう、抱きしめることだできるのだ！ 俺とおんなじ大きさのエトセラ！

夢の中……じゃあないよな!?

「い、痛いですよ」

「あ！ ゴ、ゴメン！」

腕の中のエトセラの苦しそうな抗議に、あわててパツと身体を離す。

すると今度は、エトセラがフワリと俺に抱きついてきた。

「このくらいが、ちょうどいいですよ」

柔らかく、温かい感触……。

「そ、そうだね」

俺も優しく抱き返し、しばらくそのままの姿勢でぬくもりを確かめ合っていた。

……。

ずっとこうしていたい気もするが、やっぱり聞かずにはおけないだろう。

「……エトセラ？」

「はい？」

「その……試験のほうは……？」

この身体で現れたってことは、やっぱり……。

するとエトセラはふっと身体を離し、俺の顔を真剣に見つめた。

「それなんですけど……これから最終試験を受けることになったんです」

「……最終試験？」

「はい」

神妙にうなずいて、一步後ろに後退する。

「試験って、合格したんじゃないの？ だから、その身体で……」

「いえ、この身体は人間の身体ではないんです」

「え？ じゃあ……」

「これは、知也さんの “想い” です」

俺の……想い？

「知也さん、私のために一生懸命想い続けてくれましたよね？ その “想い” が形になっ

て、この身体を作っているんです」

そうか……ピグマリオンの身体と同じもの……。

「それで、これだけ知也さんが私のことを想ってくれているということが、私たちの教官に伝わって、特別に最後の試験を設けてくれることになったんです」

「それに合格すれば、人間に？」

「はい」

す、凄いぞ！ 俺の行為も無駄じゃなかったんだ！

ミンテイー！ ピム！ やったぞ！

……あ。

「と、ところで、その試験って……？」

「……それは……」

エトセラの頬が、ぽつと赤らむ。

え？

「あなたの本当の愛情を……確かめてこいと」

そう言って、エトセラはスルリとドレスを脱いでしまった。

ええ!?

月明かりに照らし出される、エトセラの透き通るような白い身体。

その美しいラインに、俺の目が釘づけになる……。

「……エトセラ……」

愛を確かめる？ ……それって……。

「その……私を……」

か細く、蚊かの泣くようなエトセラの声。

そして俺は、突き動かされるように再びエトセラを抱きしめた。

5

今、ベッドの上にエトセラが横たわっている。

今までのような小さな身体ではない。抱きしめることも、豊かな胸に顔を埋めることも、柔らかな唇に口づけることもできる。

「知也さん……」

恥ずかしそうに、俺を見つめるエトセラ。

俺は優しく微笑んで、小さく薄い唇にそっと自分の唇を押し当てた。

「ん……」

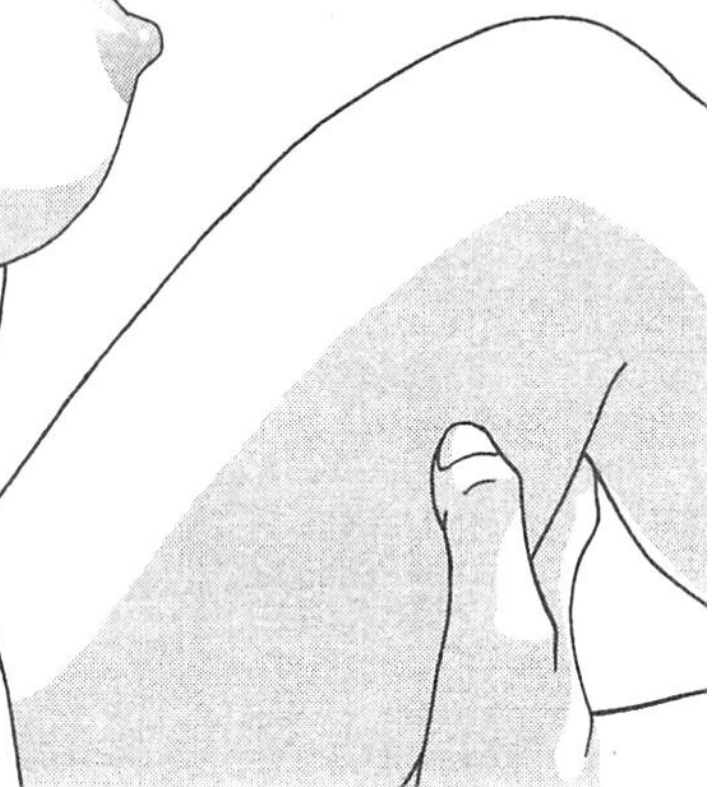
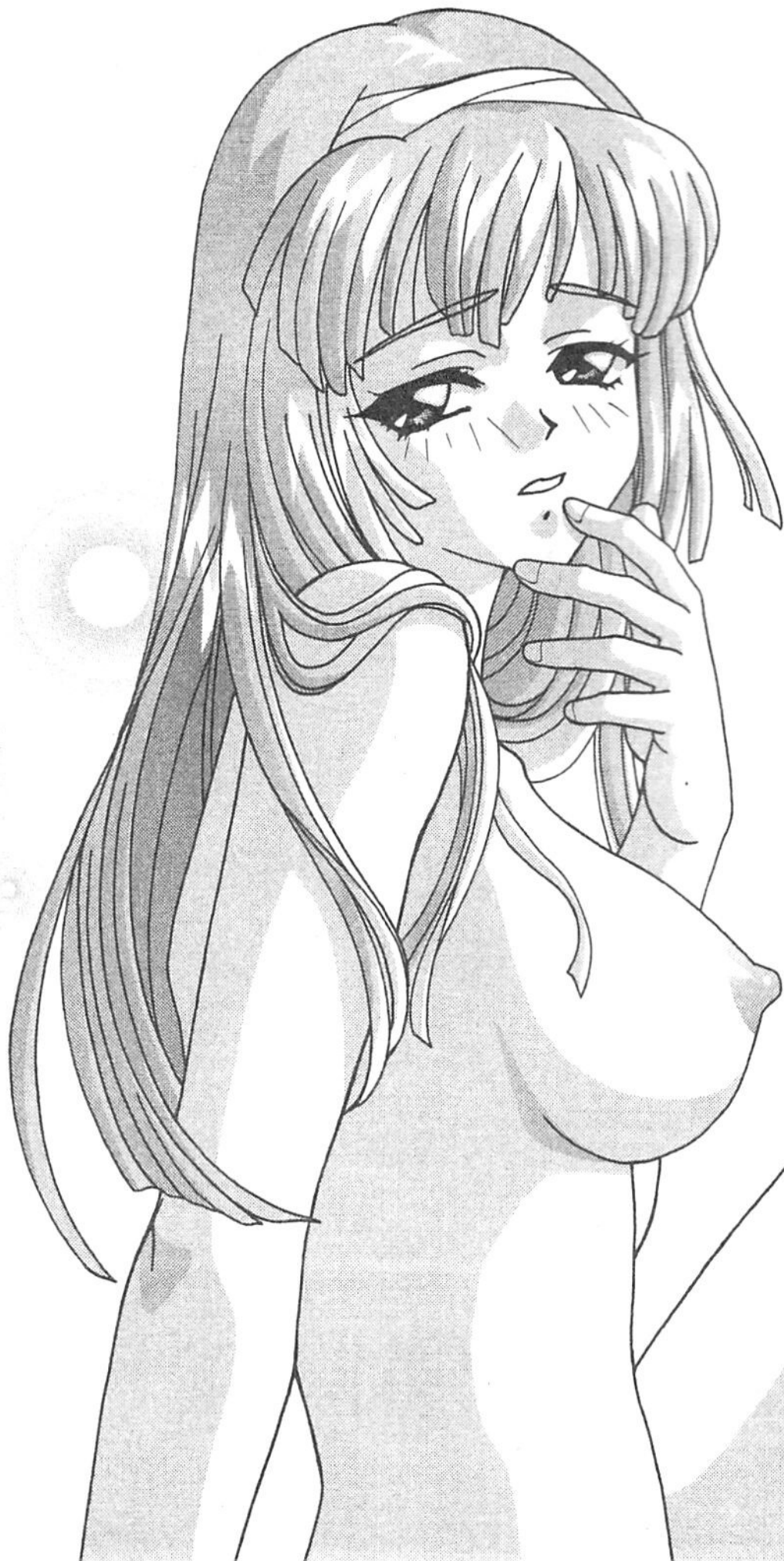
そして、その細い身体を抱きしめながら、俺は腕をエトセラの脚の間へと滑り込ませた。若草のように薄く煙る柔らかい繊毛。それをかき分けると、エトセラのもっとも大事な部分に指先が当たる。温かくて、柔らかくて、すでに少し潤うるおっている。

「あん……」

股の間に刻まれたクレヴァスに沿って指を動かすと、エトセラが過敏に反応を始める。

「ん……あ……ん……ん……」

声を出すまいとして、必死に唇を噛んで耐えるエトセラ。その表情が非常に……。



か、可愛い……!!

俺はもつとその表情が見たくて、指の動きを早くした。そして、エトセラの呼吸に応じて上下する双丘の片方にパクリと吸いつき、その先端に色づくピンクの突起を舌で転がしてやった。

「やっ! あ、ああっ! アンっ!」

次第に快感のさざ波が高くなってきたのか、エトセラは声を押し殺すのを止め、自然と洩れるに任せるようになった。

ああ、そんなようすもまた可愛いなあ。

「……………」

「……知也さん?」

俺が動きを止めて、いったんエトセラの身体から離れると、彼女は顔を上げて不安そうに俺を見つめた。

しかし、俺は身体をずらし、エトセラの足元へと回る。そしてその足をつかむと、ゆっくりと左右に押し広げて行く。

「ああ! いやあっ………」

完全に脚を左右に広げてしまうと、エトセラは恥ずかしそうに顔を両手で覆ってしまった。彼女のすべてが、俺の前にさらけ出されている。

……きれいだ……。

俺は、心の底からそう思った。

そして、俺はその脚の間に自分の身体を滑り込ませ、覆い被さるように上からエトセラの瞳を見つめた。

“俺”の先端が、エトセラの入り口に当たっている。

「……………」

「……………」

無言のままお互いの顔を見つめると、エトセラがこくりとうなずいた。それに応じて、俺もうなずき返す。

そして、俺は腰をゆつくりと前に進めはじめた。

にちにちと音がして、俺の一部がエトセラの中へと埋没していく。

せ、狭い……。

「あつ、くう……」

エトセラが苦しそうな声を上げる。

「痛い？」

「痛み……は、ありませんけど……でも、なんか……すぐくおつきくて……」

はは……。おんなじサイズになっても大きさが問題か……。

まあ、それはそれで男としてはちよつとうれしいかも……。

でも、痛みがないんなら大丈夫かな？

俺は、ゆつくりと腰を動かしてみた。

ぐつ、ぐつ、ぐつ。

「んっ！ んんっ！」

エトセラはしばらく、ちよつとだけ苦しそうな声を喉から絞り出していたが、そのまま律動を繰り返しているうちに、さつきと同様な可愛らしいあえぎ声に変わってきた。

「あっ！ ああっ！ い、いいです、知也さん！」

「ああ、俺も……」

ずちやつずちやつちや！

ふたりの接合部が、深いつながりの音を立てている。

「知也さん！ 好きっ、好きですっ！ 私、私っ！」

「俺もだ！ エトセラ……エトセラっ！」

今、俺の頭の中にはエトセラのことにしかない。世界にはエトセラと俺のふたりきりだ。この幸せを、いつまでも感じていたい……。

びくりっ！

ふたりの身体が、同時に跳ね上がった。俺の想いのだけがエトセラの中に吐き出される。

「あくうっ！」

エトセラも低く呻うめいて身体を震わせた。快樂の波が全身を痺しびれさせている間、お互いの身体をきつく抱き合う。

そして、どちらからともなく力を抜くと、ふたりともにベッドの上でぐったりとなった。
……はあ……。

「……知也さん？」

俺の身体の下から、エトセラが見上げる。

「なに？」

「これって、恋愛の最終段階なんですよね？」

悪戯いたづらっぽく微笑するエトセラの髪をやさしく撫なで、

「いや、ここから始まるんだよ」

そう言うと、エトセラはうれしそうに微笑んだ。

6

ひっく……ひっく……。

……？

あのまま、ベッドの上でうつらうつらとってしまったらしい。

ふと気づくと、エトセラが俺の胸に顔を埋めて泣いていた。
俺のさして厚くもない胸板の上に、ポタポタと熱い雫しずくが落ちている。

「……どうしたのエトセラ!？」

俺が声をかけると、エトセラは顔を上げて、いっぱいの涙をたたえた瞳で俺を見つめた。
な、なんだ!？」

「私……私、やっぱり人間になんてなりたくありません」

えっ!？」

「ど、どうしたんだよエトセラ!？」

そんな、いきなり……。あんなに、人間になるのを楽しみにしてたのに。

するとエトセラは、目を伏せてポツリポツリと話し始めた。

「……人間になるということは……転生して新しく生まれ変わるってことなんです」

「転生?」

「はい……。どこか別の場所で、私とは違う別の存在である “人間” として生まれ変わるんです。それはつまり……」

つまり……。

「今の私の記憶がなくなってしまうということなんです」

「記憶が……」

なくなる……ってことは……。

「忘れてしまふんです。想像の国のことも、ピムとミンティーのことも、そして……」
顔を上げ、悲しそうな顔で俺を見つめる。

「……知也さんのことも……」

「……」

「私、忘れたくないです！ 知也さんの顔も、声も！ そして、このぬくもりも……。この15日間のこと……知也さんの思い出を……。忘れたくないです……。これじゃあ……。ピグマリオンのまま消えていくのと同じです……」

そこまで言うと、こみ上げるものが抑えられなくなったのか、再び顔を覆って泣き出してしまった。

記憶がなくなる……。俺のことを忘れてしまう……。

そんな……。せつかくこれからもエトセラと一緒にいられると思ったのに……。

……でも。

「……違うよ」

「え？」

驚いてエトセラが顔を上げる。

「人間になって、たとえ記憶がなくなろうとも、姿形が変わろうとも、エトセラはエトセ

ラだ。ピグマリオンのまま消えてしまうのとは違う。同じ世界に住んでいれば、いつか会うこともあるかもしれないし……」

「でも……どこかで会ったとしても、記憶がなければ私、知也さんがわからない……」

「俺が覚えているよ」

やさしく、エトセラの手を握ってやる。

「どこで誰になっていようと、俺が気づいてやる。エトセラのことを間違えたりしない」

「知也さん……」

「俺たちは“運命”、で結ばれたパートナーなんだろ？ だったら、必ず会えるさ。いつか、必ず……」

俺の言葉に、エトセラはこわばっていた表情をふっとゆるめ、

「はい！」

と言って、俺の手を強く握りかえしてきた。

すると、そのとき……。

「!?」

「あ……」

エトセラの身体が、ほのかな光を放ち始めた。

「エトセラ、これは……?」

俺の顔を見て、悲しそうに微笑むエトセラ。

「もう……帰らなければなりません……」

「……そうか……」

これから帰って、そして人間に……。

俺は、エトセラを抱きしめた。この柔らかさを、温かさを忘れないように。ぎゅっと、力強く、思いっきり……。

エトセラも今度は抵抗しない。俺と同じように、強く抱き返してきた。

次第にエトセラの身体から発する光が強くなってくる。

「忘れないよ……絶対に」

「知也さん……私、知也さんに出会えて、本当に幸せでした」

「……エトセラ……」

「……知也さん……」

そして……。

エトセラは、俺の腕の中で光となって消えてしまった。

エピローグ

ふわあああああああつ……。

また、いつものように大あくびをひとつ。

そして人目もはばからずに大きく背伸びをしてから、俺はベンチにどてつと座り込んだ。
はああああうううううううううう……。

……クラゲのように脱力……。

ここは街の中央公園。噴水広場に立つ大きな時計の針は、午後の1時を少し過ぎている。
月が変わり、残暑の暑さも日とともに薄れ、次第に過ごしやすい気候になってきた。そんな、すつきりと晴れ渡った日曜日のお昼。これはまさに絶好の散歩日和だつてのに……。
相変わらず、この公園には人影がない。

まあ、元來人の多い所はあまり好きではないんで、こうやって静かにのんびりできるのは喜ばしいことだ。

ベンチの背もたれに背中を預け、ふんぞり返るようにして空を仰いだ。
あお

「……………」

そこには、いつかどこかで見たような、どこまでも続くような青空が広がっていた。その空をぼんやりと眺めながら、ひとり物思いにふける。

はあ……今年の夏休みも、なあんにもいいことなかったよなあ……。

毎日毎日、仕事仕事でさ……、結局海にも夏祭りにも行けなかったし。ましてや女の子との出会いなんてのも……。

「……はあ……」

最近、どうもため息の回数が増えている……。疲れてるのかな？

新学期が始まって、もうひと月は経とうというのに、すべてのことにおいてやる気がさっぱり起きない。

……いや、やる気なしってのは前からだけどね……。

しかし……。こう、心の中にぽっかりと穴が開いているような……。

……何が……。

……………。

……とところで。

さっきから気になってるんだけど、噴水の向こう側で女の子がひとり、ずっと行ったり

来たりしているのが見えるのだ。

キヨロキヨロとあたりを見回して、何かを探しているようなんだけど……。

……どうしたんだろ？

中学生くらいかな？ たぶん、美知と同じくらいだろう。ショートカットにジーンズで、ちよつとボーイッシュな感じの娘だ。

なんとはなしにその姿をボーッと眺めていると……。

「……あ」

目が合った。

すると、俺の存在に気づいたその少女が、

「すいませーん」

と呼びかけながら、パタパタと俺のほうへと駆けてきた。

「ん？ なに？」

「あの……このあたりでお姉ちゃん見ませんでした？」

そう言つて、くりくりとした大きな瞳で、俺の顔をじっと見つめる。

ややつ、これは結構可愛い娘だぞ。前言撤回、うちの美知とは大違いだ！

「お、お姉ちゃん？」

「うん。私のお姉ちゃんなんです」

いや、いきなりお姉ちゃんと言われても困るけど……。

「えーと、どんな人？」

「え？ うーん……」

俺の言葉に、女の子は首をかしげてちよつと考え込んでから、ぽんと手を打った。

「うん、とっても優しい人だよ」

ははは……、それじゃわかんないな……。

「じゃ、じゃあ、お姉さんの歳はいくつ？」

「そうねえ……お兄さんと同じくらいかな」

俺と同じ？ じゃあ、高校生くらいか。高校生の女の子ねえ……、うーん……。

この公園に来てからのことを、いろいろと思い出そうとしてみたのだが……。

「いや、ちよつと見なかったなあ」

「……そう……」

俺の言葉に、ちよつとがっかりして肩を落とす女の子。

そして、元氣なく「ありがとう」と言い残して、とぼとぼと公園の出口へ向かって行く。
……。

その後ろ姿を見ていたら、なんだかこのまま放って置けないような気がしてきて……。

「……仕方ないなあ……」

俺はベンチから立ち上がり、その女の子の後を追った。

「……でね、街を見たいって言って出かけたまま、お昼になっても帰ってこなかったの。だから心配になって探しにきたんだ」

俺と一緒にお姉ちゃんを探してやると申し出たのがよほどうれしかったのか、少女はニコニコと笑いながら、ひっきりなしに俺に話しかけてくるのだ。

しかもじつとしていられない性分らしく、話している間も常に走ったり跳んだりクルクルと回ったりしている。

……いやはや、元気な娘だなあ。それに、どうも見た目より、ちよつと幼い感じだ。

「……でも、引越して来たばかりなんでしょ？」

「うん」

少女がこくんとうなずく。

さつき、道すがら聞いた話によると、彼女たち姉妹はつい先日、この街に越して来たばかりなのだという。

ということは、やっぱりそのお姉さんは迷子になってるんじゃないだろうか？

そうしていろいろと話をしながら、俺たちは駅前の商店街までやってきた。どこかで買物でもしてるんじゃないかと思って来てみたのだが……。

「ここ、広いから探すの大変だね」

女の子が、頭上に広がるアーケードを見上げて、グルリと首を巡らした。

そうなのだ。ここの商店街は結構デカイ。食料品から雑貨まで、たいていの物はここでそろろう。

今はお昼過ぎなんで、買い物客がまばらなのが救いだ。これが夕方だったりすると、夕飯の買い出しの主婦でごった返して、人探しどころではなくなくなってしまふところだ。

ちなみに、酒屋もちゃんとある。うちの何倍も品ぞろえのいいのが。

……火を着けたらよく燃えるだろうな。アルコールいっぱいあるしさ。

……いや、考えたただけだってば。

女の子はウインドウ越しに電気屋をのぞいて、客の中にお姉さんがいないことを確かめると、すぐに隣のパン屋へと走って再び中をのぞき込む。

「ここにもいない……」

そう言っつて小さくため息をつき、さらに隣の薬局へと向かおうとしたとき……。

「よう、知也！」

背後からかけられた声に俺が足を止めると、女の子も気づいてそちらを振り返った。と、そこにはコンビニのビニール袋を両手にさげた公一が立っていた。

「なんだ、おまえも買い物か？」

言いながら、俺の横に並ぶ女の子に気づいたようだ。不信そうに俺の顔を見ると、

「……おまえ……まさか中学生と……」

……言わなくてもいい。おまえの考えていることは、すぐにわかる……。

だいたい、美知に手を出そうとしたおまえに言われたくないよ。ちなみに、もちろんあの後見事に玉砕ぎょくさいしたのは言うまでもないが……。

「あのな、一緒に人を探してるだけだよ」

「なんだ。ま、そんなとこじゃないかと思っただけだよ」

そして、公一は女の子をまじまじと眺めると、

「可愛いねえ。ねえ、今度デートしない？」

……おまえ、言ってることメチャクチャだよ……。

しかし、返す刀で女の子に「いやっ！」とにこやかに言われ、笑いながら頭をかく公一。

「あはははははは……」

……いや、こいつ結構傷ついてるぞ。しかし、立ち直りの早いのもこいつの長所。

「……ああ、そうだ。知ってるか知也？ 明日、うちのクラスに転校生が来るんだって」

「転校生？」

「ああ、それも女生徒だぞ、女生徒！」

……めげないねえ、ほんとに……。感心しちゃうよ。

「ま、よかったじゃないか公一。なんにしても女の子が増えるってのは、おまえにとつちや朗報だよな」

「なに言ってるんだよ。おまえにも他人事ひとごとじゃないだろ？」

公一はあきれ顔で俺を見ている。

「うーん、そりやまあ、クラスメイトなんだし……」

「そうじゃないよ。おまえの隣の席だろうが」

「え？」

「空いてるだろ？俺が座ってた所。だったら、転校生の席はおまえの隣じゃないか」

……ああ、そうか。

なるほど、さすが公一。女の子の事となると、妙なところによく気がつく。

「あーあ、俺は鬼松とにらめっこで、おまえは転校生とお近づきなんて……まったく不公平だよなあ」

大きいため息をついて、うらめしそうに横目で俺をにらむ。しかし、すぐに思い出したように再び女の子に向き直ると、

「ねえ、お姉さんとかいない？いたら紹介してほしいんだけど」

……だから、そのお姉さんを探してるんだって……。

それから。

用があるとかでさっさと帰って行った薄情者はくじょうものと別れたあと、店を1軒1軒しらみつぶしに回ったが結局お姉さんは見つからず、再び住宅街のほうへと戻って来たのだが……。

「見つからないね」

「……うん」

うーむ、いったいどこに行っただらうなあ……。まさか、事件か何かに巻き込まれちゃったんじゃないか……。

住宅街を抜け、そろそろ俺の学校が見えてきた。……とそのとき、ふいに俺の横を歩いていた女の子が大声をあげた。

「あ！ お姉ちゃん！」

「え!? いたの？」

彼女の指差す方向を見ると、ちょうど校門からひとり少女が出てくるところだった。しかもその娘は、日曜だというのに見慣れた制服を着ている。

あの娘がお姉さん？

……って、あれは……。

「あ、知也くん！」

校門から出て来た娘が、俺に気づいて大きく手を振った。

なんだよ、加奈子じゃないか。……じゃあ加奈子がお姉さん？ でも、妹なんていたかな？ それに、昨日越して来たばかりじゃなかったっけか？

「お姉ちゃん！」

少女がもう一度大きな声で呼ぶと、加奈子の後ろからもうひとり女の子が姿を見せて、こちらを振り返った。

なんだ。加奈子の影になって、俺からは見えなかったのか。

「あ！ なにしとんのや！」

その女の子が、俺の隣の少女に気づいてこちらへと走ってくる。

……関西弁？

「まったく、あんたまで迷子になってもうたら、意味がないやろ？」

「ごめんなさい」

お姉さんは妹よりもちよつとだけ背が高い。俺と同じ歳だと言ってたが、どうやらもう少し下のようだ。しかも、妹に負けず劣らずの可愛さ。こりゃ、美人姉妹だね。

ま、これで一件落着いてことだな。

「見つかってよかったね」

そう言って女の子の肩にポンと手を置いた。しかし、彼女は「え？」と不思議そうな顔をして、俺を見返した。

「探してるのは、おっきいお姉ちゃんだよ」

……え？ おっきい？

すると、遅れて加奈子が俺の前までやってきて、少女と俺を見比べる。

「なにしてるの、知也くん？ この娘は？」

「いや、お姉さんを探してあげてただけど……」

「え？ 私もよ。用があつて学校に来ただけど、ちょうどその娘が校門の回りをうろろして……。学校の中を見たいっていうから、一緒に入って探してあげてたの」

「お姉さんを？」

「うん」

……ってことは、もうひとり上にいるってことか……。

……三人姉妹ね。

「で、知也くん。私、これからちよつと学校戻らなきゃならなくて……。だから、その娘も一緒に連れて探してあげてくれない？」

「ん？ まあ、それはいいけど……」

初めからそのつもりだし……。

「よかった」

ほつと安堵あんどの息をついて、
“下のお姉さん”に向き直る。

「ごめんね。ホントは一緒に探し出してあげたいんだけど。あとはこのお兄さんに任せるから」
「ええて。おねーさんホンマにありがとうな」

彼女の言葉に加奈子はニコリと微笑むと、今度はこちらをちらりと見て、俺の耳に口を寄せて、秘密っぽく囁いた。

「ちゃんと探し出せたら、ご褒美にキスしてあげようか？」

「バツ!？」

「バカやろうっ！」

「ふふ。冗談冗談」

狼狽する俺のようすに加奈子は楽しそうに笑うと、もう一度ふたりの姉妹に微笑みかけながら、校門のほうへと戻っていった。

……まったく。結局、俺は加奈子にとっちゃ弟の延長線上を脱していないんだよな。

あのときだって……。

……あのとき？

「加奈子！」

その背中に呼びかけると、加奈子は「なに？」と言って振り返った。

「おまえさ……夏休みに……」

「夏休み？」

俺の家に来てから、その後……。

……。

「……いや、なんでもない……」

「？」

加奈子は俺の態度に不思議そうな顔をしたが、首をかしげつつ、そのまま校門の向こうへと消えて行った。

「なあ、にーちゃん」

「え？」

振り向くと、ふたりの少女が俺をじーっと見つめていた。

「うちらこの街はようわからんから、よろしゅう頼むわ」

「あ、うん」

俺の返事に、変な関西弁の美少女はにこりと微笑み、

「ほな、行こか」

と言つて歩き出した。

「じゃあ、お姉さんはうちの高校に転入するの？」

「うん。せやから学校の下見にでも寄ったか思たんやけどな」

街なかを探しながら話を聞いたところ、お姉さんは正確には俺と同じ高校2年だという。ちなみに、このふたりは美知と同じ中学に入るらしい。

……と、いうことは。

「……じゃあ、公一の言ってた転校生ってのは、お姉さんのことかな？」

「なんや、にーちゃんとおんなじクラスかいな」

「うん。それも、どうやら隣の席らしいんだ」

「へえ、偶然いうのんはあるもんやなあ」

うーむ、確かに。公園で妹さんが俺に声をかけなければ……いや、俺が彼女を追いかけて一緒に探さなければ、そのお姉さんにこんな可愛い妹たちがいるって、知ることもなかったわけ……。まさしく、運命の分かれ道って感じだね。

……とここで。

俺は隣を歩く、下のお姉さん〃に聞こえないように、反対側の妹さんに囁きかけた。

「ねえ、なんでお姉さんってあんなしゃべりかたなの？ 昔、お姉さんだけ関西のほうにいたとか？」

「え？ 一度も行ったことないよ」

「じゃあ、なんで？」

「うーん……わかんない。気がついたら、ずっとあのしゃべりかただよ」

……先天性の関西弁？ そんなもんあるか？

「なに、コソコソ話しとんねん？」

「え、いや、なんでもないよ」

……変なの……。

まあいいか。それより……。

「あのさ、その “上のお姉さん” なんだけど……」

もう、街内のほとんどの所は探してしまっただが、結局まだ見つかっていない。

「もしかして、家に帰ってるってことは？」

「うんにゃ。さつき電話したけど、まだ帰ってなかった」

そう言っつて、ポケットから携帯電話を取り出して見せた。猫のキャラクターのストラップが、ユラユラと揺れている。

「そっか……。そういえば、君たちの家ってどこなのかな？」

「ん？ あっちのほうにある、庭に大きな松の木が生えた家や」と言っつて、街の一角を指し示した。

松の木？ ……ってことは。 “松の木屋敷” か!?

「なんだ！ 君たち、あのお爺さんたちの孫だったのか！」

「なんや、じいちゃん知ってるんかいな？」

ふたりともビックリしたようで、目を丸くして俺を凝視ぎょうししている。俺もかなり驚いたが。そういや、店のほうにお祝い用のお酒の注文が入っていたな。息子さん夫婦、帰ってきたのか……。お爺さんたち喜んでるだろうなあ。

いや、それにしても、まさか3人も孫がいるとは……。
……ん？

俺は、ふとあることを思い出した。……ってことは、あの話は今探しているいちばん上のお姉さんのことか？

「……ねえ、お姉さんのことで、お爺さんから何か言われてない？」
「何を？」

「いや、その、け……け、けっこ……」

「けっこ？」

突然あたふたしだした俺を、ふたりは不思議そうに見つめている。

「う、うん……いや、なんでもない」

「？」

まさか、お爺さんだつて冗談で言ったんだよな。あんな話。

……なんか、お姉さんに会いづらくなっちゃったな……。

「しっかし、姉ちゃんどこ行ったんやろ？ 街を見たい言うて出てったんやから、近くに

はいるはずなんやけど……なあ？」

姉の言葉に、妹も「うん」とうなずく。

街を見たい、か。

そのとき、ふと視線をあげた俺の目に飛び込んできたのは……。

「……そうか」

街はずれにこんもりとそびえる、小さな裏山だった。

「ホンマにここにおるんか？」

木々の生い茂る山道を見上げ、下のお姉さん〃が疑いの視線を俺に向ける。

「あと探してないのかここくらいだしね。それに、街を見たいっていったんだろ？ だったら、ここからなら街を一望することができるしさ」

「でも、お姉ちゃんこの街知らへんのやで？ こないなとこ、ひとりで来れるかなあ？」

それはそうだけど……。

「……いや……でも、確かにいると思うよ……」

「なんや？ にいちゃん、超能力でも持つとるんか？」

はは……一般的な能力も足りないけどね。

……でも、なんとなくいるような気がするんだ……。

「登ってみればわかるよ！ ね！」

なんか、妹さんのほうは俄然がぜん元気になったようだ。お姉さんは「めんどいなあ」と、登る前から大きいため息をついている。

うーむ。対照的な性格してるけど、それが結構いいコンビになっているようだ。

……上のお姉さんのほうはどうなんだろうか？ このふたりの姉なら、やっぱり美人さんかも知れないな。……ちよつと期待。

そして、俺たちはゆっくりと山道を登りだした。山頂にお姉さんがいるのなら、急ぐ必要はない。といっても、妹さんのほうは張り切ってぐんぐんと前を登っていつてしまうのだが。

ほんとに元気いなあ。

「……なあ、にーちゃん？」

「ん？」

声に振り向くと、後ろからついてきてたお姉さんが、俺をじっと見つめていた。

「なに？」

「さっきのねーちゃん……加奈子さんだっけ？ あれってにーちゃんの恋人か？」

「え!？」

何を突然!？」

「あ、あれは単なるクラスメイトで、幼なじみというか、姉弟きょうだいというか……」
 ……とつきに、『姉』という字が先に思いつくのが悲しい……(泣)。

「ふーん……じゃあ、うちの姉ちゃんなんてどや?」

「は? ど、どやって!」

「だから、つきおうてみたらどうやって言うてんのや。なんやったら、うちが仲を取り持つてやってもええで」

「な、何を急に!」

「姉ちゃんなかなかの美人やで。おっぱいだってどーんとデッカいし、脚だってスラーつと長いし。うちが男だったら、放つとかんけどなあ」

なんか、どこかで聞いた台詞のような……。

……それに今、胸のあたりに激痛が走ったような気が……、気のせい?

「うちの姉ちゃんなあ、恋愛に夢持ちすぎやねん。なんやロマンチストっちゅーか少女趣味っちゅーか、いい歳とししていつか運命の人が迎えに来てくれる、なんて夢持つてんのや。その点、にいちちゃんなら合格なんやないか? 『山で出会ったあの人』が実はクラスメイトで、しかも隣の席だった!」なんてロマンチックな展開やろ? こりゃ、絶対運命の人決定やて」

いや、勝手に決定されても……。

「ほれ、その花。あれ、姉ちゃんの好きな花やで。摘んでいったら、喜ぶんやないか？」
 と言って彼女が指差したのは、山道の脇に咲いている小さな白い花だ。

「いや、だから俺は駄目だって。女の子と、まともに話すこともできないんだから……」
 「なんや、さつきからこうして普通に話してるやんか。それとも、うちらなんて女の範疇はんちゆうやないなんて言うんやないやろなあ？」

そう言つて、ギロリ、とまるでネズミを狙う猫のような目で俺を睨みつける。

「い、いや、そんなことは……」

……あれ？ 確かにそうだ。

前までの俺だったら、年下年上関係なく、女の子と話すのは苦手だったはずだ。

……そうか。

「……あの娘このおかげか……」

ボソリと呟つぶやいた。

「え？ なんやて？ なんか言うたか？」

俺を見上げる少女のその言葉に、ふと気づく。

……あの娘？ 俺、今“あの娘”って言ったか！?

……あの娘って……。

あの娘って誰だ!?

一瞬浮かんだおぼろげなイメージ。薄いベールのかかったような……霧の向こうに揺らめくように浮かんでは消える……。

女の子の笑顔。

……思い出せない、何かが……。

そうだ。ずっと何かが引つかかっていたんだ。

加奈子。加奈子はどうだ？ あのととき一緒にじゃなかったか？ なんてあいつは、そのことについて触れようとしななんだ？

……いや、加奈子も……加奈子も忘れているのか？

何か特別な力が働いているような、思い出そうとするとふっと目の前から消えてしまう。いや、それよりも、あのととき？ あのとときっていつ？

……。

思い出さなくちゃいけない。忘れないって……約束したじゃないか。

約束……誰と？

……誰と……。

「にーちゃん？」

袖を引つ張られて、ハッとわれに返った。

「どうしたん？」

「どっか痛いのか？」

「え？」

心配そうに俺をのぞき込むふたりの顔に、初めて “そのこと” に気づく。

俺……泣いてる？

なんだかわからないが、無性に悲しくて……あとからあとから涙が溢れてくる。

「な、なんだろ、これ？ ……おかしいなあ」

急いで、手の甲でぐいっと顔を拭いた。

はは……どうしたんだ？ 俺……。

「大丈夫？」

一緒に泣き出しそうな顔をして、ふたりは俺のことを見つめている。

「ああ、なんでもないよ。……さ、早く登ろう」

「……うん」

何か心の中のもやもやを吹っ切るように、俺がさっさと坂道を登りはじめると、ふたりも不思議そうにしながら俺の後をついてきた。

それから……。

しばらく登り続けると、すぐに木々が割れてバツと視界が開けた。頭上には青い空が姿を現し、眼下には街並みが広がっている。

「わあ、こりやええ眺めやなあ」

「ほんと、きれいー！」

どうやら、ふたりとも気にいってくれたようだ。

そういや、ここに来るのも久しぶりだな。夏休み中に何回か来たけど……。

……あれ？ 誰かと一緒だったっけ？

えーと……。

……また、あの感覚が俺を襲いそうになった。

あわてて首を振り、その思考を頭の外へと追い出す。

「……そうだ。そんなことより……」

問題のお姉さんは……？

俺があたりを見回そうとした、そのとき……。

ざあっ！

風が吹いた。

夏の終わりと……、続く秋の到来を告げるかのような乾いた風。そして、その風の中に微かに香る、甘く、柔らかい……どこか懐かしい、花のような香り。

ふと……。

風の吹いた方向を向いた。すると、そこに……。

「……あ……」

女の子がいた。

木々の群れから一本だけ離れて立つ桜の木の下に、ひとり立って街をながめている。何かを想う、憂いをおびたその表情……。そよ風が少女の髪を撫で、サラサラと踊るようにたなびいている。

俺はその少女の姿に、息をつくのも忘れてボーツと見いつてしまった。

……なんだこの感じ……。なにか、とても懐かしいような……。

……と、横にいたふたりも、その娘に気づいたようだ。

「お姉ちゃん！」

と叫んで、下の妹が笑顔で駆け出した。

「……あの人がお姉さん？」

「そや」

俺の言葉にうなずくと、上の妹も走りだす。

俺は、走るふたりを見送りながら、木の下に立つその女の子を見つめた。

……あの娘は……。

「お姉ーちゃん！」

妹の呼びかけに振り向いて、ニッコリと微笑む少女。

やっと姉に会うことができたふたりの妹が、なにやら彼女に話しかけて俺のほうを指差した。すると、お姉さんは俺に視線を向けて深々とおじぎをして、

ニコッ

……と、天使のような微笑みを、俺に向けてくれた。

「……あ……」

その笑顔を見た瞬間……。

俺の心の中にかかっていた霧が、サアッと晴れたような気がした。

何か、大切な思い出が心の奥に仕まわれたのだ。

それは大きな宝石箱に入れられて、しっかりと鍵をかけたような感覚……。

……。

もう……。

思い出すことはないのかも知れない。

でも、確かに……。

俺は、一歩足を踏み出した。

新しく“仲間”となった姉妹が、仲よく並んで俺を手招きしている。

……。

……でも、確かに。

彼女の微笑みの中に、月の光の中で微笑む“あの娘”の笑顔を見たような気がしたんだ。

あとがき

えー、読者の皆様の中には、ゲーム版のような心暖まる、めるへんちつくなラブコメデ
イーかと思つて、中身の確認をせずに本書を手に取っちゃった人もいるのでしょうか？
……御心配無きよう。まったく間違つてはおりません！ その通りの内容です！

という事で、沙涛渉デビュー作、『6インチまいだーりん』をここにお贈りします。

一般指定ゲームを（ほんのちよつとだけ）エッチにして小説化してしまおうという、な
んとも大胆なこの企画。しかもメーカーさん公認なので、訴えられることもありません。
さすがギャルゲーの勇キッド様、なんて懐が広いんだろう！

……しかし、原作ゲームの設定をいじくり回したあげく、キャラクターもなんだか違う
性格になっちゃつて……、別の意味で怒られちゃうかもしれないかな。

ホント、すいません。でもまあ、『小説版』は別の世界つて事で……。私に任せちゃつ
た段階で、犬に噛まれたとでも思つてあきらめてください（笑）。

それでも、原作の持つハートウォームな雰囲気をごさぬよう、細心の注意を払つて執

筆したつもりです。作品の一ファンとして。

あ、この本を読まれた方の中で、まだゲームをやっていないという人がもしもいるならば、是非ともプレイしましょう。もちろん、そちらは「エッチなの駄目」という心の清い人（笑）でも安心です。私の作品の何倍も感動できて、何倍も心が暖かくなれますよ。小説版ではすっかり脇役のピムとミンティーも大活躍です。

それでは最後に、このどこの馬の骨とも知れない三文ライターを、広い御心の元に起用して戴いたKKベストセラーズ様、及びキッド様。そして、このお仕事に巡り会わせて戴いたブレンバスターズの皆様と、連絡役として風邪をおして頑張って下さった増島氏、そして何よりもこの本を読んでくれた読者の皆様に、心からの感謝を贈らせて戴きます。

『想像の国』がいつまでも存在し続ける事を祈って。

一九九九年二月

沙涛 涉



6インチ まいだ〜りん

著者 沙濤涉 さとうわたる

原作 キッド

一九九九年三月一日初版発行

発行者 栗原幹夫

発行所 KKベストセラーズ

〒六〇〇八三〇五 東京都新宿区西新宿七―三―二七

電話〇三(三三六四)九二二(代表)

振替〇〇二八〇一六一〇三〇八三

印刷所 凸版印刷

製本所 凸版印刷

カバーデザイン ブレーンバスターズ カバーフォーマット 吉田剛

●本書の無断複製・複写・転載を禁じます。
落丁、乱丁本はお手数ですが小社営業部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan ISBN4-584-38123-2